
白帝記～それは、神と契約した男の物語～

白帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白帝記〜それは、神と契約した男の物語〜

【Nコード】

N0920V

【作者名】

白帝

【あらすじ】

普通の生活を送っていた主人公。ある日、神様のミスで死んでしまい。お詫びとして好きなアニメの世界に転生してくれるようになるので主人公はリリカルなのはの世界に決めて再び第二の人生を歩むのだが、転生先であるリリカルなのはの世界で、今度は悪魔に家族を殺され自分も死ぬと覚悟したとき、自分の中にある何らかの力が目覚め、悪魔を退くことが出来た主人公。だが、悪魔との戦いの傷がもとで再び死を覚悟する主人公。そんな時、主人公の前に二人の男が現れた。一人は神界の王・神王 もう一人は魔界の王・魔王二

人は主人公の傷を治し言った。「君が戦った悪魔の他にも別な世界で悪魔が暴れているのでその世界を救って欲しいと。」

主人公は、事情を聴き「願いを叶えてくれるなら。」と答えた。

二人は、その願いを聞き届けた。そして、今回のお詫びとして「我らと契約してくれ。」と頼まれた主人公は神王たちと契約し半神半人となり新たな世界に飛び出していくのだった。

プロローグ（前書き）

どうも初めまして白帝と申します。

初めてですのでよろしくお願いします。

プロローグ

「例えお前が忘れていても俺が憶えている。

だから、今度会うときは、笑顔で会おうな、それまで、元気でな我が弟よ。」

目の前で未だ起きる気配のない大切な弟に向かって男は言った。

そして、弟の両脇に同じように眠っている両親に向かって「こんな形で逝くことをゆるしてください 父よ 母よ」

そう言って、男は一人光の中に消えていった。

その場に残っていたのは、大切な家族と弟の誕生日に渡すはずだった、プレゼントである兄弟でお揃いのピアスだけだった。

プロローグ(後書き)

どうも？

プロローグ前の話その1

「さて、困った。」

何が困ったかって、それは、目の前に自分の身体があるからだよ。しかも、トラックに轢かれて　とんでもない事になってるんだよ！！まあ、結論から言っただけ自分死んじゃいました。(笑)(笑え　るのか?)

で、これからどうなるんだろうって考えていると、後ろから翼の生えた綺麗な天使みたいな人　「実際に天使です。」が現れて、「これから、あなたを神様の所に案内しますので、ついた来てくだ　さい。」と言ってきた。(なんだろうこの流れ?よくある転生の流れみたいな感じがするのわ。)

天使様についていくと、そこには、髭の生えたじいさん「だが、じいさんじゃ!!わしは、神　様じゃ。」がいた。まあ、実際シワシワで今にも逝きそうな感じなんだが。

さて、いざ神様と話そうと思っていると、いきなり神様が「申し訳ない。」と日本人からすれば　ほれぼする　D O G E Z A　を決めてくれた。いきなりな事に面食らっていると天使様が(まだ、居　たんだ。」「まだ、居ましたよ!!案内して、はい終わり。じゃありませんよ!!これでも神様の　秘書です。(は、置いといて)置いとかないでくださいよ。とにかく説明しますと貴方は本来な　ら死ぬはずではありませんでした。ですが、こちらのミスにより貴方を死なせてしまう結果になっ　てしまいまし

た。」と天使様が説明してくれたんだけど、「ちなみにミスってまさか、コレ (DOG EZA中の神様)「コレはひどくね!!」(うるさい。)が休憩中にOSPをしながらコーヒーを飲んでいるとPSOに夢中になりすぎて、そばに置いてあった俺に関する書類に飲みかけのコーヒーをこぼしたってことじゃないよね?(笑顔で)

「お前(貴方)は、神(様です)か??!!」と、驚きのコレと天使様「だから、コレはひどくね!?(だから、うるさい。)

「んなもん、後ろを見れば分かるわ!!!」と言われて後ろを向くコレと天使様、そこには、まあ、言われた通りの光景が広がっていた。

「ちょ!!神様、なんで片付けてないんですか?!」

「ありのままの姿をみてほしかったからじゃ!!」

天使「そんなカツコよく言ってもダメです!!」オレ「そんなもん見たくもないわ!!」

と天使様と二人で神様にツツコミ(と言う名の鉄拳)をいれた。

「さて、話が大きく脱線してしまったが、本題に入ろう。」とコレが言った。(頭に大きなタンコ ブ2つを着けて)

「そうだな。それで、本題って言うのは?」

「うむ。先ほども言ったがお前はまだ死ぬはずではなかった、しかし、生き返らすにしてもあの身体では無理じゃ。状態が酷

すぎる。そこで、お前には、別な世界に転生してもらうことになる。」

「なるほど（やっぱ、転生の流れか）」「今更じゃがお前の心は読んどるぞ」「あ、やっぱりでもそんなの関○ねえ〜」（今頃どうしているのか分からない人）

「転生先は何処でもいいのか？」

「かまわんぞ、アニメやゲーム、小説の世界でも行けるぞい。ちなみに、どの世界も平行世界なので原作ブレイクしても構わんぞ。」

「分かった、じゃありリカルなのは世界で頼む。あとなんか能力とか貰えるのか？」

「わかった。能力はすまんがやることは出来んわしは、そこまです力は強くないのでな。じゃが、容姿ぐらいなら大丈夫じゃぞ。どんな顔にする？」

「能力は仕方ないとして、容姿は犬夜叉の父親の顔で髪は黒で瞳は真紅で頼む。」

「うむ。こんな感じか？」と神様が手を振ったら俺の身体が光った。そしたら、目の前に鏡がある。りそこに映っていたのは、まさに、犬夜叉の父親の顔だった。

「おお！！」と驚いている俺は感想を訊くのに神様と天使様の方を向いたら。

神様は「うむ、流石わし、上出来じゃ。」と上機嫌。天使様は、

顔を見た瞬間真っ赤になり手で顔を隠してしまい、こちらをチラチラ見ながら「素敵です。」と言ってくれた。それを見た神様「初 心じゃのう。」と顔をニヤニヤしながら言っていた。(まあ、じいさんに言われるより美人な人に 言われた方が嬉しいんだが。) と思っていると、天使様が、「美人・・・」とまた、顔を真っ赤にして翼をブンブンと羽ばたかせていた。それは、まるで、シッポを振るいぬのようだ。その影響 か、そばにいた神様が運悪く羽に当たってしまい勢いよく壁に激突してしまった。(哀れ神)

「哀れとか言う出ない。」と復活が早い神様。

「まあ。これで準備は整ったから後は送るだけじゃ。」

「そうか、じゃあ早速送ってくれ、ここにいると俺まで巻き込まれそうだ。」(実際に風がヤバイ)

「そうじゃの、では送る前に今回の詫びじゃ、受け取ってくれ。」

「と渡されたのは長刀だった。しかし、鞘から抜いてみると二振りの小太刀が入っていた。(るる剣の四乃森蒼紫の小太刀です。)

「分かった。有りがたく貰っておくよ。これに銘は？」

「「春風」」と言う、刀はお前さんの身体に入っているから念じれば出てくるぞい、大事に使って くれよ。」

「ああ、分かった。大事に使わせてもらうよ。」神様の眼を真っ直ぐに見て言った。

「では、行くぞい。」と神様が手を振ったら自分の足元が消えて「え!!!??」と落ちながら驚いていると上から「向こうの神様によろしくな~~~~」と言ってきた。

俺は「このバカ神が~~~~」と怒号をあげながら落ちて行った。

「ふう〜〜」と大きな息をつく神様そこに、「彼はいきましたか？父上」と後ろを振り向けば先ほどまで暴れていた天使（もとい、天使の格好をした娘）アテネが言ってきた。「ああ、ついさっきな」と神であり最高神でもあるゼウスは言った。「しかし、彼で大丈夫なのですか？あちらの、神界と魔界は今、大変な時期だと思っただけですか？」とアテネ。「彼で大丈夫じゃよ。それに今だからこそじゃよ、向こうの神界も魔界を繋ぐ懸け橋として彼には頑張ってもらわなくてはな。」と嬉しそうに言うゼウス。「まあ、父上がそう言うなら構いませんが。」と心配そうに言うアテネ。それを感じたのか、

「ふふ。心配か？」と尋ねると。「べつに、あの方のことなど心配していませんノノ」と顔を赤くして言うアテネに対して「わしは別にあの男のこと訊いたわけではないのだがな。」と顔をニヤニヤしながら言ってきた。それに対してアテネは顔を真っ赤にして手で顔を隠し一人悶えていた。

そんな、娘の行動をみて「孫の顔がみてみたいのう。」とゼウスは言っていた。

ブローグ前の話その2 (前書き)

プロローグ前の話その2

あの後どうやら無事に転生出来たらしい（まだ、なのはに出てくるキャラには会っていないが）。目が覚めら知らない天井があり、周りを見てみると自分の母親なのか隣で眠っている女性の人（美人さんで、もの静かな感じの人です）がいた。そして、その女性の手を握って床に膝を着けて眠っている、多分父親なのか男の人（なかなかのイケメンで優男です）がいた。

（なるほど、この人たちが俺の新しい親か。見た感じ両親とも優しい感じの人だな。）としばらく考えていると、母親が目覚ましたのか俺のことをじっと見ていた。母親が起きたのが気付いたのか父親も目を覚まして母親と同じように俺のことを見ていた。

そして、笑顔で

母「彩稀^{さいこ}さん、この子が目を覚ましましたよ。」と嬉しそうに俺の手を握りながら言ってくれた。

父「そうだね、風音^{かおね}さん。わたしたちの愛の結晶^{かむすび}だね。」とこちらも嬉しそうに頬を突きながら言ってくれた。

母「初めまして赤ちゃん貴方のパパとママですよ。私たちのもとに生まれてきてくれてありがとう。」と言ってくれたので、それに對しまだ喋ることが出来ない俺は小さい手を両親に向かって動かし「あう〜」（こちらこそ初めまして。）と笑顔で手を上下に振ってみた。

これを見た両親は、「かわいいいいいいい~~~~~!!!!!!」
となんだか最初に感じたイメージと違うような反応してくれたので
驚いたが、両親が笑ってくれたので良かったと納得している。

母「彩稀さん、この子の名前は何て名前にするのですか？」

父「ふふ。この子の名前は京谷、不知火 京谷 です。」と俺の
新しい名前が付けられたと同時に第二の人生が始まった。

プロローグ前の話その2（後書き）

次でプロ前の話は終わり（かな？）

プログラマー前の話その3 (前書き)

これで、プロの前話はおわりかな？

プロローグ前の話その3

どうも、不知火 京谷です。あれから10年が経ちました。え、いきなり経ちすぎだって、しょうがないじゃん！だって、リリカルなの世界に転生したのはいいけど時間軸が原作開始の10年前からなんだもん！！なのは生まれてないしどうしろっていうんだよ！！

まあ、別になのはとその仲間たちとハーレム作るきはないんだけどね。(笑)

実際なのはの世界を選んだのは、ただ魔法とデバイスに興味があったからで後はどうでもいいのだが。(まあ、確かに原作キャラには興味はあるのだが。)

まあ、そんなことよりこの10年で起こった出来事を説明すると

まず、退院して家に帰ると何と隣が喫茶「翠屋」だったんだよ！！これは、びびったぜ。(両 家ともに親友同士なので関係は良好です。)ちなみに、翠屋でも先日赤ん坊(なのはの兄の 恭也君です)が生まれたいらしい。(オレ0歳)

それから、2年後に高町家でまた赤ん坊(なのはの姉の 美由希さんです)が生まれた。(オレ2歳)

それから、3年後(オレ5歳)に父親から「剣術をやってみるか？」と訊かれて、(まだ、リンカーコアもあるかどうかも分からないし、これから原作にも関わるかもしれないから身を守るために身体お鍛えておくにはいいだろう、それに、神様からもらった小太刀「春風」を扱うためにも なるし)と考えて「はい、

教えてください父さん。」と答えた。

それから、5年が経ち（オレ10歳）そろそろ、なのはが生まれるかな？と思いながら、学校や剣術の修行（父親に教わったり士郎さんからも教わっている、恭也君と一緒に修行している。）の生活を続けている、ある日、（今、翠屋の道場で士郎さんに恭也くんと一緒に修行中）

そこに、「京谷君、病院に居る彩稀さんから電話だよ。」とこの間、8歳の誕生日をむかえた美由希さんが言っただけで電話を渡してくれた。

「ありがとう美由希ちゃん」とお礼を言うと美由希さんは赤くなり「ううん、大丈夫だよ。」となぜか照れていた。

（その時、後ろから父と兄が鋭い視線で京谷を睨んでいた）

そんな、視線を感じながら電話に出ると

父「京谷、母さんなんだけど、今晚にでも生まれそうだと医者が出ているから今から病院に来なさい。」と父親が言ってきた。

そう実は、うちの母親はどうやら妊娠して、2週間前に大事をとって入院中なのだ、ちなみに、桃子さんも妊娠していて母と同じように入院中である（おそらく、「なのは」だろう）、

その間の家事は、まあ、野郎と美由希さんで頑張っている。（転生前は割と家事は出来た京谷君である。）

「うん、分かった。今から準備していくね。」と答えて電話を切った。

「士郎さん、父さんが今から病院に来るように言われたので今から準備してきます。」と士郎さんにそう伝えると

士郎さん「分かった、準備ができたならまた来なさい、病院まで送っていくから。恭也、美由希と一緒に出掛ける準備をしてきなさい母さんに会いに行くから。」

と士郎さんは言ってくれた。ので「ありがとうございます。」と答え準備をして病院に向かうのだった。

そして、夜、夜空に流星が降りしきる中で新しい家族である、そして、弟である「不知火 流星」が生まれた。

流星は、小さい手でオレの指を掴んで嬉しそうに笑った。そして、オレはこの笑顔を守るために強くなると改めて誓うのだった。

しかし、流星が生まれて5年ある事件が起こってしまふ。

プロローグ前の話その3（後書き）

次でプロ前の話を終わらします。

長い。

プロローグ前の話その4

どうも、15歳になりました。不知火 京谷です。

弟、流星が生まれて5年が経ちました。（流星5歳）（容姿は犬夜叉の幼少期の顔です。髪は黒。目は金色です）

ちなみに、流星が生まれて1週間後に桃子さんがなのはを無事出産しました。（まあ、原作開始まであと4年だけ）

今ではかわいい弟の世話が大好きなお兄ちゃんです（笑）

流星もオレに懐いてくれているのでうれしいです。（転生前から弟が欲しかった京谷君）

さて、15歳になりそれなりに身体は出来上がって剣術もある程度、父と土郎さんに互角で戦える（恭也君には圧勝です。）ようになったのですが、

（神様から能力は貰ってないと思っている京谷君だけど実は、身体能力は最強クラスです、その気になればオリンピックの世界記録をすべて塗り替えられます。）

未だにリンカーコアが有るか分かりません。

（実際はあるんだけど、神様が時が来るまで封印してしまったので感じられません、かわりに、気を感じられるようになり、気を纏ったり撃つことも出来ます。）

まあ、とりあえず今は、楽しいキャンプを楽しみますか。（高町家と一緒に河原でBBQ中）

流星「兄さん一緒に遊ぼうよ」と食後の休憩をとっていると、かわいい弟が言ってきた。無論断ることもないのでオレは喜んで、「いいぞ、何して遊び？」と弟を抱き上げながら答えた。「今日は、お前の誕生日だから好きな遊びをしようか。」と答えると、弟は嬉しそうに「じゃあ、あつちに行きたい」と森の方を指さして言った。「うん？森の中に何かあるのか？」と尋ねると「分かんないけど、冒険してみたい。」と子供ながらに来る冒険心のようなオレは、チラッと両親の方を向き確認のたえに「いい？」と尋ねた。

両親は 父「うん、そうだね。二人でもいいんだけど散歩がてらに家族で行ってみる？」

母「そうね。たまには家族で散歩もいいわね。」

と家族みんなでお散歩することになった。

士郎さん「ああ分かった。気を付けていつてきてな。」

父「大丈夫だよ、そんなに広くない森だし、ちゃんと整備もしてあるみたいだしね。じゃ、行 つてくる。」

と俺たち家族は歩き出したのだった。まさか、あんなことが起きるとは思わずに。

しばらく歩いて家族団らんを楽しんでいると周りが急に暗くなると、目の前に扉が現れたと思ったら、それが開き中から翼の生えた本なんかで見た悪魔が現れた。

悪魔「ほう、ついてるないきなり餌に会えるとは。その命、食わせて貰うぞ。」

そう言ったと思ったら行き成り目の前で両親が血を流しながら倒れていた。みると、悪魔の爪により心臓を貫かれているではないか、悪魔は、貫いてえぐりつつた心臓を食べながら俺たち兄弟を見つめて

悪魔「ふむ。なかなかうまい肉だな。さて、子供の肉はどんな味がするかな。」

と次は、俺たちかと思っていると目の前で弟が悪魔の爪にかかり力

なく倒れていくのが分かった、続いてその爪が自分に迫ってくるが寸前のところでそれをかわし、悪魔との距離をとった。

悪魔「ほう、あれを避けるか人間。なかなかやる。」と悪魔、

「貴様、何者だ！！？？」と家族を殺された怒りから怒号をあげた。そして、神様からもらった「春風」と念じると手に長刀が握られていた。

その光景を見た悪魔は驚き

悪魔「なんと！？、まさかこんな人間が神刀の使い手とは、ふふ、我はついているな、貴様の心臓を食らえば我は再び力を取り戻し、軍を率いて奴らと戦える。さあ、潔く我に殺される！！」そう言つて悪魔は再び襲いかかってきただが、「春風、抜刀！！」と勢いよく抜いた小太刀よつて防がれた。

「答える！！貴様は、なんだ？？」と激しい剣閃を浴びせながら質問していると、

簡単にかわしながら

悪魔「我は魔界に住むサタン先ほど神界より脱走してきて人間界に落ちたところよ。」

「なぜ、家族を殺した！！」

サタン「力を取り戻し我が神界と魔界を総べるたよ。」

「どうゆうことだ？神界は分かるが、なぜ、魔界もなんだ？」

サタン「そんなこと、今から死ぬ奴に言っても仕方がないわ！！」
と今まだない素早い攻撃が迫ってきてかわすことが出来ずに脇腹に

当たってしまい、そのまま勢いよくとばされてしまった。

ドンッと木にあたって一瞬気を失うところだったが何とこ踏みとどまった。

しかし、目の前でサタンが「これで終わりだ。」と、爪が高々と上げ振り下ろしてくる中。

京谷は（ここで、終わるのか？無残にも殺された家族の仇を取れぬまま！！そんなのヤダ！！せめて、一太刀、刺し違えてでもこいつに浴びせてやるんだ！！）と強い意志をもった瞬間、京谷の身体に封印されていた魔力が解かれて爆発した。そして迫ってくる爪を手でつかみ春風でサタンの腕を切り落とした。

サタン「ぐああああ〜〜〜、私の腕が〜〜〜、貴様よくも！！！」と迫って来ると思ったら「ツチ、もう追いついてきたのか。」と舌打ちをして再び扉の中に消えて行った。

「行ったか。ふう〜。」とその場に力なく倒れる京谷。そして、死を覚悟しているとまたしても扉が現れて中から、神々しい光を放つ男と冷たい光を放つ男それに続く何人かの兵隊の男たちが出てきた。

男「チ、遅かったか。」もう一人の男「仕方がないね、僕たちの気配を感じて逃げてしまったんだろう。」と男たちが話をしていると一人の兵隊が京谷に気付く

兵1「神王さま！！、この少年はまだ生きております。」と大声で神王と呼んだ。

神王「なんだと！？信じられん、奴と戦って生き残るとは！」と驚く神王の隣から

魔王「それより早く治療した方がいいんじゃないかい。」と冷静に言う魔王

神王「そうだな。これくらいならすぐに治せるな」（肉が抉り取られ臓器もボロボロです。普通なら 死んでいます）

と神王は手をかざして京谷の身体に神気を流すと傷が治っていく。

傷が治った京谷は目を覚まし周りを見ていると目の前に、神王と魔王が現れ二人は京谷に言った。

神王「初めましてだな、オレは神界を総べている神王だ。」と大柄で筋肉質の男

魔王「初めまして、僕は魔界を総べている魔王だよ。」と優男でクールな男

二人は自己紹介をしてくれた。

それに対し京谷は「どうも、不知火 京谷です。この傷はあなた方が治してくれたのでしよう、ありがとうございます。」と紹介と礼を言った。そして、「説明してくれますか？」と二人に尋ねた。

そして、二人は説明してくれた。神界と魔界はもう争えわないときめたこと。共に歩いていくと決めたこと。人間界には干渉しないこと。と説明を受けた。ここで質問した「なぜサタンは人間界に干渉しているんだ」と？すると、魔王は「約定意を守らない悪魔は何人かいる。そいつらは、嚴重に監視をつけ牢獄に閉じ込めていたんだけど、今回は中にサタンの仲間がいてねそいつらが、脱走

の手引きをしたんだよ。手引きした者は、その場で捕縛したけど肝心のサタンには逃げられてしまって、奴の気配を追ってここまできたんだよ。」と答えてくれた。

そして、神王から「この世界だけじゃない奴の他にも脱走した悪魔がいるそいつは、他の世界でも暴れているかもしれない、だからこんなの頼めた義理じゃないがその世界を救ってはくれないか？あの、サタンと戦って生き残ったのだお前さんしか頼める人はいないんだ。」と頼まれたのだが、確かに頼めた義理じゃない。しかし、京谷は「ある願いを叶えてくれるのなら。」と答えた。

神王「いいぜ。言ってみな。なんでもかなえてやる。それだけの権利がお前にはある。」

「では、オレの家族を生き返らせてほしい。そして、俺に関する記憶を消して欲しい。それが、オレの願いだ。」と決意を込めて言った。

それを、訊いた二人は「分かった、その願い聞き届けよう。」とこちらも真剣に京谷の目を見て答えた。

「あと、家に弟に渡すはずのプレゼントが有るんだそれも頼むよ。」

神「わかった。しかし、それだけでは、今回の詫びにもならないだから、我らと契約してくれないか？」

「契約？」

魔「そう、契約し神王と魔王の力を使うことが出来るんだよ。ち

なみに、身体は半神半人なっちゃうんだけどね。」

神「力だけじゃない、俺たちと契約している神獣や魔獣を召喚することも出来る。まあ、相手が気に入ればな。」

「なるほど、確かにこれからは必要になるか、分かった貴方たち二人と契約します。」

神・魔「では、手を前に」すると3人を囲う魔法陣が現れて光が3人を包んだと思ったら魔法陣は消えていた。

神「これで契約はすんだ後はお前を送るだけだ。」

「分かりました。覚悟はできています。お願いします。」

魔「では、送るよ。ああ、コレは饞別だ持っていきなさい。使の方は頭の入れておいたから」

と渡されたのは三本の刀

「ありがとうございます」

神「じゃ、いくぜ！」と神王が手を叩くと周りが光に包まれた。

ブログ前の話その4（後書き）

長かった。最後はちょっと変な感じになってしまった」

第1話（前書き）

やっと本編です。

第1話

「どうも、神王さまと魔王様に別世界に送られた「白帝 六花」です。え！名前が違うって！うん、実は送られる前に神王様に「お前に関する記憶を消すためには本人が居てはダメなのだ。」

と、最初は分からない説明だったがしばらくして「不知火 京谷」という”名前”を持つ人物が居てはダメってことですか？」と尋ねたら

神「その通りだ、だから今の名前を捨ててもらわねばならない。すまないな。」と悲しそうに言う神王様

「分かりました。家族を生き返らせてもらうのに対価はあると思っていましたから、これも、覚悟していました。」と少し笑った顔で答えた。

魔「では、新しい名前を決めなくてはね、何か希望はあるかい？」と魔王様に聞かれ「特にありませんが？あなた方が決めてください。」と神王様と魔王様に任せると。

神「よし、分かった！では、オレからは、”白き力を司り魔を払うという希望を込めて「白帝」”と。」

魔「では、僕からは、神界と魔界を”繋ぐ為の懸け橋としての願いを込めて、どちらの世界でも咲いている「六花」”で。」

神・魔「”白帝 六花”と名づける。」と声を揃えまるでどこか神々しい感じがした。

「ありがとうございます。神王様と魔王様に名をつけていただき
光栄です。」と膝をつき答えた。

神「まあ。実際、俺たちがつけたから加護はすごいぜ。」
魔「そうだね。そこらへんの神や魔族では手は出せないだろうからんね。」

と、こんな事があつたわけよ。

さて、名前のことはこれぐらいにして、周りを見てみると、ないやら、どこかの森の中なのか？

周りには木・木・木しかない。さてどうするかと考えて「まあ、歩いていれば何とかなるだろ。」と軽い考えで森の中を搜索するのだった。

と、しばらく歩いて森が開けた場所に出てみると、直径100メートル位の広場がありその真ん中に巨大な木が生えていた。とりあえず、近づいてみると後姿から見て一人の女性がその木に膝をついて祈りを捧げていた。

祈りが終わったのか、女性は立ち上がりこちらを向いたらよほど集中していたのか後ろから近付いて来た俺に驚いたようだった。これが、オレ”白帝”と”十六夜”（いざよい）の出会いだった。

第1話（後書き）

短いです。

ここから、オリ？恋姫？ 行きます。 （原作はまだ先です。） とり
あえず、それまでの流れです。

第2話（前書き）

恋姫 に行くための流れとしてオリジナル行きます!!!

第2話

女「貴方は何者ですか!?!?」と叫びながらオレとの距離を取りながら辺りを警戒する。(恋姫キャラの董卓を大人にした感じで髪が腰くらいある綺麗な黒髪です、想像してみてくださいね。)

「驚かせて、すまない。オレは白帝 六花という旅人だ。此処へは道に迷ってきて出て来てしまったんだよ。」と女性を落ち着かせるように自己紹介となぜ此処にいるかを説明した。(まあ、間違っ
てはいないが?)

それを聞いた女性は警戒を緩めずに

女「ここは、涼州の董家が所有している土地です。勝手に入ってこられる訳がありません、森の前に兵が居たはずですよ。」と鋭い視線でこちらを睨んでいた。

「(涼州!?!?ということとは此処は古代中国なのか!?!?しかも、董家!?!?あの董卓の?!?)森の前には兵は居なかったが?」と内心驚きながら、森の外からではなく元から中に居たのでその説明をどうしたらいいか悩んでいると、後ろから殺気を感じたので後ろ見てみると数人の男たちが矢を構えていた。

オレはとっさに彼女を守るように抱きかかえてその場から離れた。その場から離れて数本の矢が地面に刺さっていた。急に抱かれた女性には驚いたが地面に刺さった矢を見たのかしだいに落ち着た。

そして、矢が外れたのを見て森の中から男たちが出てきた。

女「貴方たちは、何者ですか!?!?」とオレの後ろから叫んで男た

ちに質問した。

森からは、70人ぐらいの賊のような格好をした男たちがオレ達を囲むように現れた。

賊1「へっへっへ。仲間から森の中に董家の姫さんが入って行くのを見たって奴がいてな、それで、姫さん人質にしてたつぷりと董家から金を頂くのさ。」とまあ、如何にも盗賊がやりそうなことだと考えていると。

賊2「それだけじゃねえ、姫さんには俺たちのお楽しみになつてもらうのさ。くっくっく。」と別な男が下衆な笑いで答えた。

賊3「さあ、優男。命が欲しかったら姫さんと腰のモノおいてさっさといきな!!森の前に居る兵のようになりたくないならな。」と男が叫んでいると、

女「貴方たちに捕まり、慰み者になる位ならこの場で潔く自害します。さあ、旅の方、先ほどは失礼しました、私に構わずお逃げください。」と懐から短刀を出し震える手でオレを守るように前に出た。

「残念ながらそいつは聞けないな。目の前で女性が危ない目に合おうとして居るんだ、黙っているわけにもいかいんでね。それにね、あなたの手は”誰かを殺めるためじゃなく誰かを救う手”だと、オレは思う。」と魔王様から貰った3本内の1本”清雲牙”を抜きながら前に出た。

それを見た賊たちは笑いながら

賊1「ハッハッハッハ。面白いこの人数を見て勝てるとおもっているのか。」と余裕の表情で言った。

「オレがイイというまで目と耳を塞いでいてください、此処からは、女性が見てはいいものではありませんので。」と安心させ

第2話（後書き）

さて、ここで武器の説明をします。

清雲牙（層雲牙の邪気なし） 奥義 清龍破 威力 惑星1つが
消し飛ばすほど

鉄碎牙（妖力ではなく神気・魔力で変化する） 爆流破 アニメ
では妖気だがここでは神気・魔力とする。

天生牙（死者を1度だけ生き返えせられる。一人一回） 冥道残
月破 空間を切り裂いて冥道を開き、敵を冥界へ直接送り込む。

春風 （双剣で神刀で小太刀 るる剣の四乃森蒼紫と同じ）回転
剣舞六連 小太刀二刀による高速の六連撃

（神刀）神様が打った刀。使い手を選ぶ。

第3話（前書き）

そういえば、まだ服装について説明してませんでした。

服装は犬夜叉の父親と同じ格好です（着物に鎧）

髪型は、ポニーテールです。（腰位の長さです）

第3話

さて、あの後助けた董伯さん（あの後名前を覚えてもらった、ちなみに歳は15歳だそうだ）にこの辺のことを聞いてみると、どうやら此処は涼州で董家が太守をしているらしい（董伯さんは太守の妹さん）。しかし、涼州・中国・董家と考えるとこの世界は三国志なのか？と考えていると。

董伯「あの！六花様（自分の性と名について説明して名の方で呼んでもらっている）助けてもらったお礼に董家に招待したいのですが、よろしですか？」と首を傾げながら尋ねてきた。（かなり、かわいいです）

「ああ。構わないよ。それに聴きたいこともあるからね。」と了承した。

董伯「はい（満面の笑み）！案内しますね、こっちです。」と手を引つ張つて森の中を案内してくれた。

「森の中を移動中の会話」

「董伯様（太守の妹なので様付け）はなぜ1人であそこに居たのですか？」

董伯「毎日、あの神木にお祈りを捧げるのが私の日課なんです。」

「護衛の方は居なのですか？」

董伯「はい。護衛の方は居ません。この森は董家の者しか入ることが許されません、なので、護衛の者は森の前で待っています。森の入り口はあそこしかありませんから。」

「なるほど、でも、今度からは誰か護衛の人をつけた方がいいですよ。」

董伯「そうですね、帰ったら兄に相談してみます。(本当は貴方に護衛してもらいたいのですが)／／／」と顔を赤くしながらこちらを見ていた。

「どうかしましたか？」

董伯「いえ！なんでもありません！！／／／(ヤダ、私ったら何を考えているの、でもこの方にならないかな)」と1人赤くしながら思っている何やら決意したかのように、急に

董伯「六花様！私のことをこれから真名の”十六夜”と呼んでください！！。あと、敬語もいりません！」と言われた。

「(真名！？ということとはここは恋姫の世界なのか？？だとしたら三国志の世界というのも分かるが、とりあえず今は)その”真名”とはなんですか？(本当は知っているが一応聞いておく。)」と尋ねてみた。

すると、彼女は「真名を知らないのですか！？」と驚かれた。

董伯「真名とはその人を表す神聖な名前で家族以外は自分が認めた相手にしか教えず、たとえ知っていても本人の許可なしに呼ぶと斬り殺されても文句を言えません。」ということを教えられた。

「ありがとう、オレは東から海を越えて来たから、この大陸についてはあまり知らないんですよ。（なるほど、やはりここは恋姫の世界で間違いないようだな、すると、この子は董卓の関係者なのか?）」と答えると

董伯「そうだったんですか、失礼しました。海を越えて来たのなら知らないはずですよね。だったか、字がない事にも納得です。」と分かってくれたようだ。しかし、

「そんな、大事な名を教えても良かったのですか?会ってまだ時間もたつてないオレなんか許してしまつて?」

董伯「イインです!!私が貴方に呼ばれたいのですから。っは!私は何をノノ、い、い、今のは忘れてください!!」と慌てて言った。

「そうゆう事なら喜んで呼ばせてもらつよ。でも、残念ながらオレには真名がないから、そのまま六花でイイですよ”十六夜”。」と笑顔で答えた。

すると彼女は”ボン”と顔が真っ赤になり「きゅううう~~~~」とその場に倒れてしまった。

オレは咄嗟に屈んで彼女の身体を抱きかかえた(お姫様抱っこです)そして、そのまま歩いて森の出口にむかうのだった。(神気を使って周囲の状況は確認済み)

しばらく歩いてやっと森から抜け出してみる目の前に鎧を装備した兵たちが居た。

なんかみなさん結構な殺気を出しながらこちらを見ていた。

「（あれ、これって結構ヤバイ感じ！？）」（実際、死亡フラグです）

そんなことを考えていると兵の中から大将なのか1人の男が出て来て大声で

男「この賊め！！おとなしく妹を返し・・・死んでくれ！！」と剣を抜きながら襲ってきた。

「（オレが、なにをしたああ~~~~~）」と心の中で叫んで逃げた。

腕の中にはぐっすりと寝ている天女を抱えながら。

第4話（前書き）

中国の歴史は知らないなのでオリジナル行きます（年号？人物？そんなの関係ないね！！）

第4話

どうも、白帝 六花 です。

あの後、十六夜が目を覚まして事情を説明してくれて今、董家に居ます。

そこでは、先代太守 董豪様とうごう その妻 董苑様とうえん 当代太守（十六夜の兄） 董穿様とうせん が居ました。

それぞれから、礼を言われる中、外から「失礼いたします、姫様をお連れいたしました。」と着替えに行っていた十六夜が帰ってきた。そして、「失礼します。」と言って入ってきた。（服装は十二単みたいな感じだが動きやすいようにできている感じです。）

十六夜「あの？六花様。何か？」

「いや何、森であった姿も綺麗だったが今の姿もよく似合っていると思ってな。」

十六夜「あ、ありがとございます／＼／＼／＼／＼／＼／＼」と頬を染めて言ってくれた。

それを見た周りの反応

董豪・・・鋭い目つきでこちらを睨んでいる。（殺気全開で）

董苑・・・「あらあら。うふふ。」と柔らかい目でこちらを見ていた。

董穿・・・こちらも鋭い視線で睨んでいたが父との違いは武器を今にも出しそうだということだ。(殺気全開)

そんな視線にも耐えている中

十六夜「六花様、この度は助けていただき、ありがとうございます。重ね重ねお礼申し上げます。」と頭を下げた。

「そう何度も言うな、お礼はあの場で受け取ったし、当然のことでしたまでだよ。」

十六夜「はい、ありがとうございます。」
と嬉しそうにほほ笑む十六夜。

董豪「うおほん!!(とやたら大きく咳払いをする。)それで、六花殿なぜあの森にいらしたのかな?あの森は董家の者しか入れないので。」

「はい。十六夜(「貴様~~~~!!何勝手に妹の真名を呼んでいやる。ぶっ殺されてか~~~~!!だったら表で、へぶっ!!」)と横からの何かで黙った兄。(哀れ)
にも言いましたが、自分は東より海を越えてきた旅人なのです。あそこには迷って入ってしまったてどうしたらいいか悩んでいる時に十六夜様と出会ったのです。ちなみに真名は助けてもらった礼としていただきました。」

董豪「そうだったのですか、分かりました。ところで真名のごことは娘から聞いたのですか?」

「はい、そうです。とても神聖なものだと。それが何か?」

董豪「実は董家には、まあ、女人にだけなのですが、女人が男に真名を教えるのは生涯の伴侶だけなのです。」と困ったようにしている

十六夜「お父様！！私は六花様の妻になりたいのです！！」と爆弾発言それに対して父

「だめだ！！いくら助けてもらった御仁とはいえどこの誰ともいない人に娘はやれん！！」と正論を言う父、に対する娘「どうして私が決めた人ならいいって言ったじゃない！！」とこちらも正論（約束は大事だよな。）に対する父「それでもだめだ！！まだ、会って間もないだろう！！」に対する娘「そんなの関係ないもん！！それに、私、六花様に（「なんだろうこの子、なんかものすごい爆弾落としそうな気がするのよ。」となにやらこれから不幸を考えていると）だ、だ、だ、“抱かれた”もん！！」（十六夜はまだ男女のまあそういうことは知りません。）
シィイイン~~~~~
父・兄「なんだってええええええええ~~~~~！！！！！！！！」
と鬼の形相で追いかけてきた（殺気全開・武器持ち）

“ シュバ ” 素早く逃げるオレ。

母「あらあら、おめでとう。十六夜、これで孫の顔が見られるはね、頑張つてね、母さん応援してるから。」

侍女たち「おめでとうございます。姫様！！」「ああ、ついに姫様も伴侶を得て嫁がれてしまいますのね。」「たまには、帰ってきて若様の顔をみせてくださいね。」「あんな、カッコいい殿方と出会えるなんて、姫様うらやましいです！！」

十六夜「ありがとう。お母様、みんな。私、幸せになるね！！」と何やら楽しそうに話している女たち

男ども（あの言葉で外にいた兵にも聞かれ）

「許せん！！いくら助けていたただいた御仁といえども、これだけは許せませんぞ！！！」

「妹のため、貴様は殺す。今殺す。すぐ殺す。さつさと死にやがれ！！！」

「俺たちの天女が奪われる！！野郎ども、やつを殺せ！！！」

「誤解だ！！意味が違う、確かに抱いたがそつちじゃない！！抱きかかえる。の方だ！！けっして十六夜には手を出していない！！！」

父・兄「それは、娘（妹）に魅力がないというのかああ！！！」

「オレに、どうしろっていうんだああ！！！」
と楽しく追いかけてこをしていた（楽しくねえよ！！）」

「仕方がない。」と向き直り「春風、抜刀」と叫んで鬼（親・妹・姫様馬鹿）に突っ込んでいった。
しばらくして、

「ふう、またつまらぬモノを切ってしまった。（峰打ちです）」と屍（死んでません）を見ながら言っていると。

「あら、もう終わったんですか。丁度よかったです。六花様の歓迎会の準備が終わったから呼びに来たんです。さあ、参りましょう。」
と十六夜は手をひいてくれた。

そんなことに、オレの胸は高鳴り（こんなのも好いな）と思いが

ら二人は仲良く屋敷に入っていくのだった。(まるで夫婦のように)

馬鹿ども「認めんぞ〜〜〜!!」とそんな叫びが聞こえたとか聞こえないとか。

第5話

どうも、歓迎会中（あの後、誤解を解きました）の白帝 六花です。ただ今、周りから（主に男）酒を注がれています。（本人は酒には、あまり強くありません）

男ども「オラオラ！飲め飲め！おれ達からの祝い酒だ！！」（憂さ晴らし）

「おれ達の姫さんを探ったんだこれぐらい付き合いやがれ！！」（同じく）

「地獄に落ちろ～～！！」（本音）

とまあ、頑張って相手をしていると、

侍女「白帝様。 太守様がお呼びです。 こちらに付いてきてください。」と天国からの使者が現れた。

付いてきてみると董家が勢揃いしていた。（未だに、父と息子は睨んでいるが）

董豪「六花殿、先ほどは済まなかったね、誤解とはいえ、許してくれ。」とこちらを睨みながら、

董穿「オレも済まなかった。許してくれ。」とこちらも睨みながら二人は頭を下げた。

「いえ、もう気にしていませんから。頭を上げてください。」と少し疲れた感じで言う。

董豪「そうか、詫びと言ってはなんだが、わしの真名は豪胡こうこと言って受け取ってくれ。」

董穿「なら俺も真名は列刃れつぱと言う、受け取ってくれ。」

「ちよつ！！そんな簡単に真名を預けていいんですか!？」

二人「問題ない。先ほど（4話の追いかけっこ）のやり取りでおれ達を倒したからな。」

「そうですか、分かりました。（倒したからOKでいいのか？）お二人の真名しかと受け取りました。」

と真名を受け取ったところで

十六夜「六花様、どうですか今宵は楽しんでいただけてますか。」
と隣に座っている十六夜が訪ねてきた。

「ああ、楽しいよ。兵のみんなも好い人だらけだしな。それに、こ
ういうのは、久しぶりだからな。」とほほ笑みながら言う

十六夜「そうですか。そう言っただけだと嬉しいです!」とこ
ちらも笑顔で言うてくる。

「ふふ。」

十六夜「どうかしましたか?」

「いや、ただ十六夜はやはり、笑ったほうが綺麗だなと思ってな。」

十六夜「（ボ？／／／／）もう！！六花様！からかわないでください／／／／」

「ふふ、すまん、すまん。」と十六夜の頭を優しくなでる。

周りの反応

董豪「離せお前たち！！娘が！娘が！！」と叫ぶ

董穿「離せてめーら！！妹の危機だ！！離せ！！」とこちらも叫んでいた

二人を押さえている兵たち「気持ちは分かります！！おれ達も辛いです！！でも！！あの姫様の顔を見たらどうしようもないじゃないですか！！」と泣きながら叫ぶ兵たち

そう今、十六夜は満面の笑みで今まで（家族に見せたことがない）にないくらい嬉しそうにしているのだ。いくら、憎い男が傍にいるとはいえあの笑顔を消したくはないと思う兵たちだった。（漢だぜ！！）

笑顔を見た二人（ズウウウン~~~~）と地面に埋もれていた。

董苑「本当に嬉しそうね。ふふ。まるで昔の私たちのようだわ。」

侍女たち「ホント、姫様が嬉しそうです。」「ああ！！私もあんな殿方と出会いたい！！」

「なんてお似合いの二人なのかしら／／／／」「もう、夫婦でいいんじゃないですか！！（割と本気）」

「そうね！！なんなら今から結婚式の準備でもする！？」

と侍女が話している中

董苑「ダメよ！！！結婚式は一族総出と他の豪族たちも招いて盛大にやりたいから、今準備するのは！！（侍女たち「するのは！？」）寝所の準備よ！！」（本気です）

董苑「今こそお酒の力を借りて娘を”真の女”にしてもらうのよ！
！」と何バカなことを言ってるだと思っただろうが

侍女たち「なるほど！！」「そうすれば、先代様とはいえ同衾してしまえば何にも言えません！！」

「それに、運が良ければ次代様ができます！！」「ヨオオシ、がんばるぞ〜〜！！」と何やら賛成している侍女たち

それを聞いた親ばか「ならん！！そんなこと、断じて許さん！！いくら神が許してもこのわしが許さん！！」

妹バカ「その通りだ！！そんなことを許すぐらいなら妹に恨まれようともこの男を殺す！！」（目がマジ）

侍女達「いくら先代様と当代太守様であろうとも、これだけは譲れません！！」「私たちは姫様の幸せのために戦います！！」

と何やら会場が混沌になっていく中で肝心の二人は

「ふむ。何やらうるさくなってきたな。どこか静かな場所に移動しようか？何処かないか。」

十六夜「そうですね。では、屋敷の先に小さな川があります。そこ

に、行きましょう。」

「分かった。案内を頼む。」

十六夜「はい。こちらです。」と二人は手を繋いで屋敷を出ていくのだった。

こんなやり取りを見ていた1人の女性
董苑「ふふ、頑張るのですよ。十六夜」

と優しく二人を見送るのであった。

第6話

どうも、屋敷を抜け出してきた白帝 六花です。

ただ今、屋敷から少し離れたところにある川に来ています。そして、丁度いい岩の上で二人で銀月を見ながらお酒を飲んでいます。(十六夜がお酌をしてくれています。)

十六夜「あの、六花様。」と十六夜が手を止めて尋ねてきた。

「なんだい。」と盃をわきに置いて答えた。

十六夜「昼間のお話のことなのですが／＼／＼／＼」

「お話というと、結婚のことかな。」

十六夜「はい、突然のことでご迷惑だとは分かっています。それでも、わたしは、本気です!!」
と頬を染めても真っ直ぐに白帝の眼を見て言った。

「それは、あの時の眼を見れば分かりました。ただなぜオレのかな、董轟様も言っていたが俺たちは会って1日も経っていないんだが。」

十六夜「それは、私があなたに、ひ、ひ、一目惚れしたからです／＼／＼／＼!!」
と真っ赤になつて答えてくれた。

「!!」

十六夜「森で出会った時から貴方に心奪われていました／＼／
／」

「そんなそぶりは見なかったと思ったんだけど。」

十六夜「それは、どんな時であれ見ず知らずの人に隙を与える訳にはいきませんから。」

「その隙だらけの間にあなたの後ろに居ただけだな。」

十六夜「うう／＼／／／六花様酷いです／＼／／」

「ふふ。すまん。すまん。」と十六夜の髪をなでる。

十六夜「私は、純粹に貴方様をお慕い申しております。」

と嬉しいことを言われさらに目がトロンとなって頬が少し上気いる顔を見てしまえば

十六夜「きゃー!!」

と急に肩を抱き寄せられ十六夜の顔が白帝の胸に埋もれた。

十六夜「あのあの／＼／／／六花様何を／＼／／」と胸の中で慌てふためいている十六夜が言ってきた。

「ありがとうな、十六夜。けどな、オレにはやらねばならないことがあんだ。」

十六夜「やらねばならないことですか?」

「そつだ。それが終わらなければ結婚は無理かな。それが、落ち着くまで待つていてほしい。」

十六夜「はい！！待ちます！！何時までも、それまであなたの隣に居ることを許してくれますか？」

「違うな。（「え！！」）”これからも”の間違いだ。ずっと、傍に居る”我が妻”よ。」

十六夜「はい！！旦那様！！！！」

と生涯を誓う二人を月が優しく照らしていた。

しばらくして隣から可愛らしい寝息が聞こえてきたふと確かめてみると、十六夜が疲れたのか、はたまた、酒に酔ったのか寝てしまつたらしい。

「今日は、たくさんのがあつたかな疲れても仕方がないか。」と納得する白帝。

「もう出て来てもいいですよ。お二方。」と後ろに向かって言ってみると。森の中から董轟様と董苑様が出てきた。

董轟「何時から気付いていたのかな。」

「おれ達が屋敷を出てここに着いたごろかな。」

董苑「あら、最初からね。なかなかやるじゃない。」

「まあ、あんだだけ十六夜から酌をされる度に殺気をぶつけられたら最初からじゃなくても気付きますけどね。」と董轟を見る。

董苑「あなた。」と冷たい目で見る董苑

董轟「だつて、わしですら娘から酌をしてもらったことがないのに！！見ず知らずの男に酌をするんだもん！！殺気をぶつけても罰は当たらないもん！！」と子供のように騒ぐ親バカ

董苑・白帝「はあ〜〜。」と二人は重いため息をつく。

董苑「ごめんなさいね、六花さんこんなダメ亭主で。」とあきれたように言う董苑

「いえ、お気になさらず。親バカは大抵こんなもんです。」とこちらもあきれたように言う。

「それで、なに用ですか。十六夜が心配できたのは分かりますが多分、本命は私かな。」

董轟「そつだ、貴様を殺して娘を ” ぐは ” と顔面殴られ撃沈（哀れ）

董苑「あなたは、黙つてて、そんなんじゃ娘に嫌われるわよ。さて、六花さん確かに私たちの目的は貴方なの、でね貴方に聞きたいことがあるの。」と声が鋭さをましていく。

「なんですか？（とりあえず冷静に）」

董苑「貴方がここに来た目的を教えてくださいませんか？」と殺気

を出して聞いてくる。

「目的って言ってもオレはただの旅人なん（ヒュ・・・カン）・・・」
「後ろを向くとクナイが木に刺さっていた

董苑「嘘はつかないでね。今度は頭よ。」とクナイをチラつかせる董苑様

「（うわ、コワッ。何者だよあの人!?）」とそこに復活したのか大剣片手にこちらを睨んでいる董轟様がいた。

董轟「そうだぞ。今うち（涼州）は大事な時期なんだこんな時期に不審な奴が現れたんじゃ心配だな。さあ、とつと吐いちまいな
!！」

「すみません、今出そうなのですが?」と顔を青くしてボケる。

それを見た董轟「ばか!!!ここで吐あくんじゃねえ!!!」

「え、言わなくていいんですか。」

董轟「違う!!!吐け。（」では、ここで「）だあゝゝやめろ!!!」
「どつちですか?どちらかきめてください。」（く、わしはどうし
し（」）「ふざけてるんじゃないよ（くは・・・）」とまたしても
撃沈。

董苑「ふざけないで、ちゃんと答えてくれるかしら。」とアオス
ジ立てて言ってきた。

「とは言っても、羌族シヤウとの戦に向けての準備をしていることしか
知らないんだけどね。」

それを聞いた二人（さつきよりも復活が早いな）

董轟「貴様、それをどこで聞いた！！」

「聞かなくても、周りがピリピリしていたよ。戦の前の緊張感だね。」

董苑「そう、そんなことでわかってしまったの、一応機密事項だったんだけどんね。知っている兵もごくわずかよ。そんな秘密を知ってしまった、娘には悪いけれども貴方には死んでもらいます！！」

と勘違いな戦いが始まった。

第7話（前書き）

第7話

どうも、ただいまバリバリ戦闘中の白帝 六花です。

いやあ〜この二人なかなかの連携ですね。

配置として前衛に董轟様 後衛に董苑様

董轟様は大剣で接近戦 董苑様はクナイで後方支援です。

いやはや、これがまたやっかいだね。

董苑様がクナイで牽制 避けるオレ 待ち構えてたかのように大剣構っている董轟様 さらに避けるオレ そこにクナイを投げる董苑様 の繰り返しです。(汗)

董苑様「さあ、さっさと他に知ってるがあるなら言いなさい!!
あなた、羌族の間者でしょ、だったらそちらのことも聞かせてもら
うわよ!!」となにやら羌族のスパイだと間違われている白帝。

「違います!!オレは間者じゃありません!!」と何とか誤解を
解こうと頑張って叫ぶ白帝。

董轟「嘘をつくな!!大方、こちらの情報を探るために娘に近付
いただろう!!下手な芝居なんぞそおつて。」これを聞いて立ち止
まり。白帝の中で、会って1日も経っていない最愛の人のことを考
えた

「(確かに誤解せれてしまうのはしかたがない、でも!!十六夜の
笑った顔、抱きしめた感触、からあかつて照れて真っ赤になった顔、
なだめるために髪を撫でた髪の感触、そして、「私は、純粹に貴方

様をお慕い申しております。」と心から言ってくれた十六夜のため、あの笑顔を消せないたも!!!」)と考え振り向き

「春風 抜刀!!」と二人に刀を向けた。

「いくら、将来の父上(「だれが、ちちう ぐは!! (ドサ)」と母上でも許しません!!)」

董苑「そう、そこまで言うなら私たちを倒してみなさい!! そうすれば、信じてあげるわ!! (やった!! 第2の息子が出来たわ)」とカツコよく言っではいるが内心嬉しがつている人。ちなみにその旦那は、気絶中(自分の妻により) (哀れなり)

「お二方。少し頭冷やそうか。」殺気を少し出す。(どんな猛将でもビビるほど)

殺気を受けた二人(いつの間にか董轟復活)「(ゾク) (なん(なの)だこの殺気は)」と驚いている二人

董轟「もしかしてわしらは、「董苑」とんでもない化け物を」

二人「相手にしてしまったのか(かしら)??!!)」

「白帝、参ります!!」と地を駆ける白帝

素早く二人に近付き、近くに居た董轟から無力化する、

無力化された本人は何が起こったのが分からないのその場で膝をついていた。

そんなことは確認せずに続いて董苑に近付いた。

董苑「（早い！！）」と反応するも武器を構えたが春風により弾かれ首に刃があたり、

「まだ、やりますか？これ以上やると十六夜が悲しむのでやりたくないのですが。」と

董苑「いえ、私たちの負けよ。」と武器を捨て負けを認めた。

第8話

どうも、白帝 六花です

さて、二人に勝ったあと戦闘の音で目を覚ましたのか。起きた時が大変だった。

起きたら周りが穴だらけだし、オレが董苑様に刃を向けているしで説明に大変苦労した。

事情を説明すれば、（「もう！！六花様がそんなことするような人じゃありません！！」）と両親を説教し父親には（「今度六花様に手を出したら、お父様と口をききません！！」）と父親にとつての最大級の爆弾が投下された。

それを聞いた父「そんな~~~~。娘が~~~~娘が~~~~わああああ~~~~」と森の中に走って行った。涙を流しながら（アホだな）

董苑「さて、帰りましょうか？六花さんの事と十六夜の結婚について話さないかね ふふ」

「（そういえば、聞かれていたんだよな。）」「と今更と思う六花だった。

十六夜「もう！！お母様！！」と顔を赤くして怒鳴った。しかし、そんなに怖くはなく、むしろ可愛らしいので。六花が十六夜の肩を引き寄せ

「ふふ、可愛いよ十六夜。それに、言っただろう。これかも、ずっと、傍に居てほしいと。」

と言ったので途端に真っ赤になる十六夜。

十六夜「(ボフウ!!!) はい、六花様¥¥¥¥」と言ってくれた。それを見た董苑「(熱いわねえ〜〜) そういうのは、帰って二人きりでやってくださいね、もちろん、寝所でね。」

十六夜「寝所! !でも、でも、わたし・・・キュウウウウ〜〜(ドサ)」と気絶してしまった。

董苑「あらあら、もうこの子は初心なんだから。これじゃ肝心な時、どうなるか心配だわ。」

「あまり、十六夜をいじめないでいただきたいのですが。」

董苑「あら、ごめんなさいね。ふふ。でもね、六花さん、(と真面目になる董苑) もしも、娘を泣かしたら招致しませんよ。」と言われ

「はい。それはもちろんです。すべて終わっても幸せにしますよ。今はこの”温もり”という”幸せ”を感じています。」と十六夜を抱きかかえて(お姫様抱っこ)言った。

董苑「(やつぱり熱いわねえ〜〜) ふふ。ありがとう。娘をよろしくいくな。(ボソ) やつぱり、あなたを選んで良かったわ。」
と話しながら屋敷に帰っていくのだった。そんな、3人を月が優しく見守っていた。

ちなみに、十六夜と別々に寝ていたのだが朝起きたら一緒に寝ていた(なにもしていないぞ! !)

どうでもいいが、董轟あの後ずっと森の中を走り回っていたらし

い（バカだな）

第9話

どうも、白帝 六花です。

ええ、川の出来事から数日が経った、そんな、ある日。

オレはというと、董家（董穿・十六夜はなし）にオレのこれまでのことを話しました。二人は親身になってオレの話を聞いてくれました。そして、話が終わると。

董轟「話は、分かった。君はその悪魔とやらを退治するためにこの地に来たのだね。」と

董苑「うう。今まで辛かったのね、目の前でご家族を……うう……」と涙ながらに話す。

「はい。私はそのためにこの世界に来ました。二度と自分と同じ悲しみを味あわせないために。」と真っ直ぐにそして、決意ある目で答えた。

董轟「分かった。それならここ（董家）を拠点にしてください。どのみち行くあてもないのだから？ここなら装備も揃ってるし情報が集まるからな。」

「ありがとうございます。しかし、よく信じましたね、こんな話を？」

董苑「貴方の眼に嘘はないし。なにより、あの娘が選んだ人だもの。信じるわ。」

董轟「そうだな。あの娘には人を見る目があるからな。それは、そうと六花君（真剣）娘のことよろしく頼む！！（と、頭を下げる）君になら娘を任せられる。だから、頼んだぞ！！」

「はい！！おまかせください。ただ今すぐにといいわけには・・・」

董苑「ええ。分かっているは、それが落ち着いたら式を挙げましよう。ねっ、あなた。」と笑顔で

董轟「そうだな。それまでは許婚でいいだろう。」
と言ってくれた二人

「本当にありがとうございます。代わりとしてはなんです私が住んでいた国の知識をお教えしましょう。」

董轟「おお！！それは、ありがたい！！天界の知識は我らにとつて大変な財になる。」

董苑「そうね。さらにこの涼州がそして、漢王朝が栄えるわ！！」
と嬉しそうに語り合う二人。

「ただ、こちらでは、実現できないものもあるので、それだけは覚えていてください。」

董轟「構わんよ。民のためになれるのなら、それだけで十分だ。」

「分かりました。後ほど書簡にまとめておきます。」
と話が終わろうとしている時に「し、失礼します！！先代様！！大変です！！！！」と慌ただしく部屋に入ってくる兵

董轟「何事だ!!」

兵「は!近くの村が賊の襲撃を受けています!その数7千!!」

董轟「なっ!!息子は(そうだ、息子には今朝方、山を一つ越えた砦を根城にしている賊退治に向かわせたんだっ。)っくどうしたら!!」と頭を抱え悩む

董苑「あなた・・・」と不安そうに夫の肩をたたく

とそんなやり取りを見た白帝

「いま、出撃可能な兵は?」

兵「は!城の警備を入れて3千です。」

「分かった。城の警備に2千を残し後はオレと共に出撃だ!!急げ!!」

兵「は!!了解です!!」

と慌てて出ていく兵

董轟「六花殿何を!!」

「私が出撃します。悩んでいる暇はありません。説教は帰ってから聞きますよ。」

董轟「いや、わしも行くっ、戦うことは出来なくても指揮ぐらいなら出来る。」

董苑「あなた・・・」

董轟「何、心配するなすぐ帰ってくる。」

とそんな、二人の世界をほおっておいて、今度は十六夜が駆け込んできた

十六夜「お父様！、お母様！村が賊に襲われていると報告を受けたのですが!？」

董轟「ああ。そのために、わしと六花殿で出撃する。」

十六夜「六花様ですか!？」と驚き白帝の傍に来る十六夜

「そうだ。なに、そんな心配するな、十六夜はここでオレの帰りを待つてくれればいい。そこに、お前が居ればオレはそこに帰ってくる。」と十六夜を抱きしめながら言った。

十六夜「はい!!六花様。私はここであなたの帰りを待つていますノノノ。どうか、ご武運をノノノ。」と赤くなりながらも言うてくれた。

「ああ、それじゃあ行ってくる。」

とそう言つて董轟と一緒に出ていく白帝

董苑「心配?」「コク」大丈夫よ。六花さんはあなたの旦那様よ。旦那様を信じて待つているのが妻の役目よ。分かった?」「はい!!お母様!!」「ふふ、こんなに女らしくなっちゃってお母さん嬉しいな。」

と娘の成長を嬉しく思う母親

城外

董轟「これより、我らは賊の討伐に向かう！！各々覚悟をもって戦いぬけ！！」

兵たち「オオオオオ〜〜〜」と叫ぶ兵たち

董轟「では、出陣！！」

と叫んで討伐に向かうのだった。

第10話

どうも、賊に襲われている村に到着した白帝 六花です。
ただ今、董轟様が今回の策について話しています。

先遣隊の報告で敵は7千に対し村には2人で賊に対応しているらしい。どうやら、(「旅の武者者のようだな」)と白帝は考え。

董轟「策についてはそんなに話してられない!!ここは、六花殿に先陣をつとめていただきたいのだが、よろしいかな。」とどこか確信した表情でこちらを見る董轟。

「構いませんよ。董轟様が来られるよう道は作っておきます。ただ、賊を完全に逃がさないよう周囲を包囲しといてくださいね。賊の撃ち漏らしはお願いですよ。」

董轟「分かった。数が数なので全軍突撃させたいのですが、それでは、場が混乱してしまいますので3百ほどで大丈夫ですか?」

「大丈夫です。ただし!!(と兵の方を向き)あの大群の中に突っ込む勇氣のあるやつだけ付けてこい!!いくぞ!!」と馬を蹴り駆けだした。

兵1「行くぞテーマーら小僧にいいカツコつけさせるんじゃねえ!!」

兵2「おう!!俺たちの強さ見せてやるよ!!」

兵3「姫さん、返せ〜〜!!」(本気)
と後ろから(なにやら変な声も聞いた気がする)兵の声を聴いた白
帝は賊に突っ込んだ。

村

???「貂蝉よだいじょうぶか。」と白髪で筋骨隆々なで上半身
に学生服をきて下半身にはふんどしという格好をしている、まあ言
わずもながらあの2人の内の1人です。

貂蝉「あら、問題ないわよ 卑弥呼。ぐふふふ。」とこちらも筋
骨隆々で上半身は裸で下半身にはピンクのビキニを履いている気持
ち悪い人物。

卑弥呼「しかし、こつも数が多いとちと、厄介じゃな。」と賊を
吹き飛ばしながら言う卑弥呼

貂蝉「そうね。でも、この数は異常よいったいこの外史で何が起
こっているのかしら。」
とこちらも賊を蹴り飛ばしながら言う貂蝉。

卑弥呼「確かに。これは、詳しく調べる必要があるの。」

貂蝉「その前に、まずは、目の前の敵をどうにかしましょうね。」

と話している時に「いくぞ!!」「と」「うおおおお〜〜」と雄
叫びが上がった。

卑弥呼「うむ。どうやら、太守の軍がきたみたいじゃな。」

貂蝉「そうみたいね。」

と賊と戦いながら軍を待つ2人。

「我が名は、白帝 六花 賊ども覚悟しろ!!」叫ぶ

「さて、やるか、春風 抜刀。はあああああああ~~~~」と
気を使い髪を白くさせ賊たちを狩っていく、その姿は白き狼のよう
に素早かった。

賊1「うわあああ~~~~化け物だ~~~~」

賊2「た、た、たすけてくれ~~~~」

賊3「まだ、死にたくない~~~~」

と次々と武器を捨て逃げていく賊たち。

「逃げる賊はほおっておけ!!それは、董轟様に任せてある!!
今は目の前のことに集中しろ!!」

兵たち「はっ!!!」

と賊たちを蹂躪していく。

やがて賊たちの討伐を終えて村の復興作業をしている中

董轟「いやはや。まさか、7千の賊に対し我らの被害が百にもな
っていません。これは、すごいことですな!!」

「いえ。まだ終わってはいません。」と村人と兵の死体がある方

に進む白帝

董轟「六花殿？」

と不思議そうにそのあとをついていく董轟。

やがて、死体の前に着くと腰に差してあつた刀を抜いた。

董轟「何を？」

周りもそんな白帝の様子が気になるのか手を止めてみていた。

「頼むぞ。天生牙^{トクンゼ}。」と刀を振った。周りからみれば何もないうところを切ったようにみえるだろうが、しかし、刀を振ってしばらくすると

「うっ、うっくん」と死んでいた筈の村人と兵たちが起き上がった。
てきた。

それを見た周りの反応

董轟「こ、こ、これは……！」

村人1「き、軌跡じゃ。」

村人2「お母さん！！うええええんん」

村人3「あなた……！」

兵1「す、すげ〜」

兵2「あの小僧は、神様か……！」

と驚いているなか白帝は

「先に言っておく！！お前たちの命は一度絶たれた。二度は無いだろう。だから、今度の命。大事に使ってくれ。」と祈るように言った。

それを聞いた村人と兵たち「はい！！白帝（將軍）様！！」と歓声をあげた。

その後、復興作業が終わったら村に護衛を残し帰っていくのだった。

その後を不審な二人（あの人たちです）が付けていく。

第10話（後書き）

策がない。

第11話

どうも、村から帰ってきた白帝 六花です。
ただ今、十六夜と抱きしめあっております。

(その前の出来事)

先ぶれで報告を受けたのか。屋敷の門には董苑と十六夜、賊退治から戻った董穿、他にも侍女達が帰りをまっていた。が十六夜はこちらの姿が見えるなり走ってきた。

なにを勘違いしたのか董轟は十六夜に向かって(さあ、この父の胸に飛び込んできなさい!!)とでもいうようなポーズで待ち構えていました。が現実はそんなに甘くはなかった!!

十六夜はそのまま走つてくると、董轟の横を通り過ぎ

十六夜「おかえりなさい!! 六花様!!」と白帝の胸に飛び込んできたのだった。

「ああ!! ただいま十六夜。」と抱きしめ髪をなでる。

(とこんな出来事がありました)

周りの反応

董轟「……………」とあのポーズのまま動かない。(哀れ+キモッ)

董穿「……………」と動かずに血の涙を流していた。(出血死で死ぬ!!)

董苑「ふふ あついわねえ〜〜」とニコニコ顔

侍女たち「きゃあああああ〜〜」「姫様、なんて幸せそ

シイイイイインンンン……と次の瞬間

「ワワワワアアアアアアア」とあふれんばかりの喝さいがとどろいた。

民「おめでとうございます!! 董伯様!!」「ああ。ついにあの董伯ちゃんが結婚かいこいつは、めでたいねえ。」「誰!! あの力ツコいい人!!」「私もあんな人が欲しい!!」「と言われ

兵「うう。俺たちの姫さんが(涙)」「まあ、仕方ないって、諦めよう。」「そうだな。」「と言われ

侍女「ああ!! おめでとうございます。 姫様!!」「やはり。二人はこうなる運命ですね!!」

「ああ!! 早く若様が姫様の顔が見たいです。」「いえ、もしかしたら二人とも見れるかも知らないわよ!!」「そうね! そうなったらどんなに幸せか!!」「とさんざん言われる中話題の二人は抱き合いながら

「十六夜(「はい。」「)例えどれほど役目に時間が掛かってもオレのことを待っていてくれるか?。」と静かに問い

十六夜「はい。例え貴方様の役目がどれほど掛かるうとも私はずっと貴方様を待っています。」「

「ありがとう。十六夜、今夜オレのことを話そう、だから後でオレの部屋に来てくれ。」「

十六夜「はい///分かりました。今晚六花様のお部屋に参ります///」とこんな会話をしていた。

董苑「さあ！！今夜は祝宴よ！！」

全体「オオオオオオオ〜」と大盛り上がりだった。

ちなみに、バカどもは未だ撃沈で誰にも相手にされてなかった。
先代太守と当代太守なのにね 哀れなり）

第12話

どうも、宴が終わって自分の部屋で愛しい人を待っている白帝
六花です

え、宴の説明はないのかって。そんなの・・・ない!!!だって、
みんなから、お祝いの言葉しかもらってないから説明してもつまん
ないんだもん!!!

あ、一つ、あつたかな。

董穿様が「オレは貴様を認めない!!認めてほしくば、オレを倒
してみろ!!!」と(死亡フラグ・兄の)言われたので「明日の昼な
らいいよ〜」と軽くOKだしちまったぜ!!! (まあ、問題ないん
だけどね。軽く殺ります。)

それを聞いた周りの反応

董轟・・・G・Jみたいなポーズで息子の応援

董苑・・・まるで、死人を見送るような目で息子を見ていた

兵士たち・・・両手を合わせ合唱^{チーン}

侍女たち・・・お前、空気読めよ。みたいな目で呆れていた

肝心な妹は・・・白帝の胸の中で自分の兄を冷たい目で見ていた。
終いには(「あの人誰?」)みたいなことも言っていた(十六夜の
心の声です)

とまあ、こんなことがありました。と説明している間に愛しい妻
(予定)が来ました(気配でわかる)。さて、おれの正体きいてど

んな反応するか不安です。なぜなら、もう人じゃないし（半分は人間です）、嫌われても（それはないから心配するな）仕方がないからそんな時は諦めるか（自惚れるな!!!）。まあ、とりあえず話すかと考えながら扉に近付き開けた。

そこには、湯あみをすませて来たのか頬が赤く、髪や身体からい匂いがしている十六夜がいた。（読者の方々の想像に任す!!!）

十六夜「ああ、ついにこの時が来たのですね／＼／＼六花様／＼／＼私ついに六花様と（妄想中）ボン!!!／＼／＼（が、頑張るのよ私!!!大丈夫お母様が言っていた通り六花様にすべて委ねればいいだから、そう委ね（再び妄想中）きゃあああ〜〜〜）」と一人考えで（妄想？）いると扉が開いた。

「よく来てくれた、ありがとう。十六夜」と笑顔で言う白帝

十六夜「いえ、約束ですし／＼／＼それで、六花様あなたのお話とこののはいったい？」

「そうだな。さて、では最初から話すか。長くなるけど聞いてくれ。」と真剣に十六夜を見つめて言った。

十六夜「はい。」とこちらも、白帝の眼を見て言った。

そして語った。自分は何者で何処からきて何しに来たのかを時々十六夜の反応を見ればどこか悲しく泣きそうな表情だったけど最後まで聞いてくれた。そして、話が終われば突然

十六夜「六花様!!!」と胸に飛び込んできた。突然な行動に驚いたけど何とか抱きしめた白帝。

「どうした、十六夜。そんなに泣いて？」そう十六夜は泣いていた声を抑えこらえる様に

十六夜「六花様は寂しくないのですか。いくら、家族が生き返る対価として六花様の記憶がないのですよ。悲しいです。」

「たとえ。家族が忘れてもオレが家族を覚えているからいいんだよ。（頭をなでながら）それに。」

十六夜「グスツ、それに？」と顔をあげる

「今は、新しい家族がいるから寂しくないよ。十六夜」と十六夜の目を見て言う。

十六夜「はい！！六花様」と笑顔で答えてくれる十六夜。

と二人は見つめあい顔が互いに近付きも少しでという所で

バカども「ウガアアアア~~~~離せ！！離せ~~~~！！娘の、娘の貞操が~~~~」「男には、やられなければならない時がある。それが・・・今！！」の声と殺気全開で今にも扉を蹴り飛ばしそうな気配が伝わってきた。
そこに董苑「いい加減にしろおおおおとおおおお」と神の雷（鉄拳）が下った。

バカども「（ドカ！！バキ！！ボキ！！ベキ！！）ギヤアアアアアア~~~~」となんか変な音がしたが気にしないことにした。
さて、十六夜の方を向くと、いい雰囲気かぶち壊されたので大変立腹でした。そんな十六夜の耳元で囁きように

「また、今度な」というと

十六夜「（ツボフ／＼／＼）はい／＼／＼。」と赤くなりながら答えた。

「さて、本当はこのまま寝てしまいたい。けど、次のお客様がお待ちだ。」

十六夜「ね、ね、寝る！！お客様？？誰か来るのですか??？」

「いや、もう来ているよ。」と天井を指す白帝

「もう、降りて来てもいいぞ。それとも、降ろされたいか？」と天井に向かって殺気を放つ

そして。天井から黒い影が降りてきた。

（バツ）布を寝台からとり素早く十六夜を隠す

十六夜「あのあの、六花様これでは前が見えませんか！！！」

「少し待っててくれ。その二人頼むからこれを被ってくれその姿のままでは十六夜にダメだ。」

と二人（卑弥呼と貂蝉）に寝台の布を渡す。

卑弥呼「ふむ。まあ仕方がないか。」

貂蝉「そうねえ。これも情報をもらうためだしね。」

と布を被る二人「（身体は隠せても顔は隠せなかったか。まあ、身体が隠せただけ良かったか）と内心安心している白帝（十六夜の

布をとる、顔を見た反応・・・特になし！！）」

「さて、管理者が何の御用かな？卑弥呼殿に貂蝉殿。」

二人「（ビクッ）」「コヤツ！！ワシらの正体を知っておる何者じゃー！！」（ふうふうん。これは、あたりかしらねえ〜）「と警戒しながら考えていると向こうから

「まあ〜そう警戒するな・・・というのは無理かこっちは聞きたいことがあるだけで戦闘の意志はない。」と手を挙げながら答える。

卑弥呼「うむ。ワシらも聞きたいことがあるだけで戦闘の意志はない。のう。貂蝉。」

貂蝉「ええ、そうよ。私たちに戦闘のいしはないわ〜」

「了解。じゃあ座ってくれこれからお互いの情報を交換しよう。」

こうして、管理者との話し合いが始まった。

ちなみに

バカども「イヤやめて、やめてよお願いだから。それだけは、やめて！！」（キモッ）「は、母上なぜこのようなこと（読者の想像に任せるー！！）をー！！」

董苑「こんなこと？そんなの・・・あの世の神様に聞いてこい！

！（ヒュッ）（何かが振り下ろされる音）

「ギヤアアアアアアアアアアア〜」と城からは断末魔が聞こえたとか聞こえなかったとか。そのあと、バカどもがどうなったか知る者はいない。（あ！きつと神様なら知っているかな。）

第13話(前書き)

やっと、つながったぜ!!

第13話

どうも、ただ今外史の管理者である卑弥呼と貂蝉とご対面しております。

あ！もちろん。十六夜もいるよ。彼女にも聞いてもらいたいからね。

「さて。まずは、自己紹介から始めようか。」と最初に白帝から切り出した。

貂蝉「そうねえ。私は貂蝉この外史の管理をしているわ。」

卑弥呼「ワシは卑弥呼、貂蝉と同じ管理者じゃ。」

「オレは白帝 六花ある目的でこの世界に来た。そして、彼女は」
「十六夜「董伯と申します。六花様の許婚です／＼」と赤くなりながら答えた。」

「さて、天井裏から聞いてたと思うからオレの目的は話すまでもないから、そちらの聞きたいことからどうぞ。」と二人に進める。

卑弥呼「うむ、確かに悪いと思ったが聞かせてもらった。」

貂蝉「私たちが聞きたいのは、この外史で一体何が起きているのかと貴方の力について聞きたいのよ。」

「分かった。せつ

(????)「その説明は僕たちからでしょうか。」(めいし・・・その声は!!!)」

と声が聞こえるときにも扉が現れた。そこから現れたのはこの世界

に自分を送ったあの二人

魔王「やあ。久しぶりだね。六花君」と

神王「おう！！六花殿元気でやってるか！！」の神王様と魔王様の二人だった。

「神王様！！魔王様！！どうしてココに！？」と驚き二人に近づく

神王「いや、さっきも言ったがこの世界についての説明をしに来たんだよ。」

魔王「そうだよ。君に全部押し付ける訳にもいかないからね。その前にあそこで固まっている3人に説明しようか。」と後ろを向けば二人の登場に驚いたのか3人が石のようにかたまっていた。

あれから3人に二人のことについて説明と俺たち3人の関係について説明した。

その反応

十六夜・・・「か、か、神様！！は、は、初めて見ました！！えと、えと、まずは、供物を捧げて、次はお願い事を・・・」とかなりテンパっていた。

卑弥呼・・・「ほう、神王と魔王とな、カツカツカツまさか会う日が来るとはのう。愉快。愉快。カツカツカツ」となんか笑っていた。

貂蝉・・・「あら、魔王様って結構いい男ね。ぐふふふふ。」となんか獲物を捕らえる目で見ていた。（魔王様はこの時寒気がしたとか）

さて、二人の説明が終わって本題に入ります。

神王「さて、まずは六花殿この外史についてどこまで分かっている？」

「正直、分かりません。すくなくとも、まだ始まってはいないし、

始まるまでそれなりの年月が必要だと思えます。」

魔王「そうだね。この外史が始まるのはあと200年だと思うよ。」

と3人だけで話していると、貂蟬が

貂蟬「あら？何のお話かしら？私たちにもお話してほしいわねえ。」

と尋ねれば卑弥呼も興味深くこちらを見ていた

魔王「この外史の始まりのカギである天の御使いが来るまでのお話かな。」と軽く答えると

卑弥呼・貂蟬「！！！！！」

と驚愕の表情（書きたくもない！！！！）

卑弥呼「ほう！！さすが神王と魔王じゃなそこまで知っているとは。」

と感心していると

十六夜「あの。先ほどから出てくる外史とはなんですか？」と聞いてけぼりにされている十六夜が尋ねてきた。

「ああ、外史とは……」（説明は……省く！！！！反論は認めない！！！！）

十六夜「はい。分かりました。」

神王「さて、確かにあと200年までこの外史は平和で何も起こらないはずだった。」

魔王「しかし。先ほど説明した通り僕たちのミスで悪魔の脱走を許してしまい、この世界に逃げられてしまいった。その結果、この世界がどうなるか分からなくなってしまった。」と申し訳なさそうに言う神王と魔王である。そんな2人に

卑弥呼「過ぎたことは仕方のない事じゃ。それを解決するために今おぬしら3人が居るんじゃないわ。」と励まされた。

神王「ああ。そうだ！！さて続きだが、その影響で賊や悪党など戦の被害が多くなると思われる。」
「とないやら事が大きくなってきた。」

魔王「六花君も気付いている。近く起きる羌賊との戦、賊にしてはあり得ない数の多さがその影響さ。」とここまで話して十六夜が
十六夜「羌賊との戦？？！！六花様それは本当ですか？？！！」
といきなり聞いてきた。

「ああ、そうなるとう董轟様たちが言っていた。その様子だと息子・娘にも極秘だったか。」

十六夜「六花様は何時、知ったのですか？」

「あの宴の日。河原での時だよ。」

十六夜「そうですか。」

魔王「続けるよ。おそらく悪魔はこの200年の間に力を取り戻す気だろう。そして、力を取り戻したら、この世界を滅ぼし次の世界でも破壊活動を行うだろう。」

神王「そうなる前に、奴を消すか、封印するしかない。」

貂蝉「その探す方法はあるのかしら？」

魔王「正直、厳しいね。あいつの魔力はほとんど消費してるから探せない。」

神王「だが奴は、人の負の感情を力とするから必ず戦を起こすか、起きるのを待っている。」

「それは、オレが何とかしましょう。さすがに戦を止めるのは無理ですが、戦で死んでいった者達の魂を浄化して負の感情を抑えることはできます。この天生牙でね。」

魔王「そうだね、そうすれば奴の回復は遅くなるしその間にこちらで何とか探すことも出来る。」

神王「ああ！！天生牙で思い出したが六花殿。あまり天生牙を人前で使うなよ。妖術師だと思われるからな。幸い今回は俺たちが天

生牙で生き返った者達や見ていた者達の記憶は書き換えておいたけど次から注意してくれよな。」

「そうですね。確かに死んだ人間が生き返らせると変な噂が立ってしまいますからね。分かりました。次からは気をつけます。ありがとうございます。それで、記憶は・・・」

魔王「ああ。心配しなくてもいいよ。僕たちがしたのは、自分たちは死んでないし何も見ていない、ような感じだから身体に害はないよ。」

「そうですね、安心しました。」

十六夜「あの。六花様先ほど死人を生き返らせたと言いました？」

「ああ出来るよ、神王様と魔王様から貰った3本のうちの一本、命を繋ぎ一振りで100人の命を救う刀この天生牙でね。」と天生牙を抜いて見せる白帝。

卑弥呼「あの時は驚いたぞ、”生き返らせる”いくら管理者だからと言ってもコレは出来ぬな。」

貂蝉「そうねえ、でも、今話を聞いて分かったわ。神様から貰ったものなら納得がいくわ。」

十六夜「す、すごいです、六花様!!」

「ただし、天生牙で生き返らせることが出来るのは一人一回までだ、それ以降は出来ない。」

魔王「そう、命とは尊きモノ。何回も蘇らせられるモノじゃないしね。」

十六夜「はい。だから人はその生を精一杯生きるのですね。」

「そう。本来、命とは一つだからね。」

と話は続いていき、悪魔対策と力の説明が終わり。まったりお茶をしていると

神王「しかし、六花殿もやるな。この世界に来て早くも嫁さん貰うなんてな。」

魔王「さうだね、しかも、こんな可愛いお嫁さんだなんて。六花君には娘の月読つきよみと結婚してほしかったんだけどね。」と真顔で言う魔王様

それを聞いた2人は飲んでいたお茶を・・・吐かずになんとか飲み込んだ。が、そのせいでむせたけど

2人「ゴホ、ゴホ！！何を言うんですかいきなり！！」

魔王「おお！！流石夫婦息がピッタリだね。」

神王「そうだな。それに六花殿にはオレの娘の天香てんかうと一緒にあってほしかったんだけどな。いやはや、遅かったけどな。」とこちらも顔をマジにして言う神王様

「だ、ダメですよ！！オレはもう十六夜と夫婦になるって約束しかしたし。それに！！妻は一人、十六夜だけでイイですよ！！十六夜もオレが他にも奥さん貰うの反対だろう。」と自分の愛しい人の言葉を待っていると

十六夜「えっ。私は、イイですよ。何人奥さん貰っても。」と軽く答えた

「そうだろう、やっぱり・・・えっ！！！！」
と十六夜の言葉でみんな固まっていると

十六夜「私思っただんです、六花様のこれまでの話を聞いて、これからこの人を支えていくのに私一人で大丈夫なのかなって不安だったんです。」と悲しそうに言う十六夜

そんな十六夜を抱き寄せ「そんなに、不安だったのか？（コク）そうか不安にさせて悪かったな。」

十六夜「いえ、六花様が謝ることはありません、私が勝手に不安になってしまっただけです。それに、何人つて言ってもちゃんと私が認めた人じゃなきゃダメですからね。わたし、他の奥さんたちとも仲良くしたいんですからね。」と笑って答える十六夜そして、神

王たちに向かつて

十六夜「ですので、私が認めれば六花様との結婚は許しますよ。」
と答えるえと

神・魔「イヨツシヤヤヤアアアアア~~~~こうしては
いられ（ドカツ!!!）へブツ!!!」

床に撃沈

何事かとみれば見知らぬ二人の女性が立っていた（手に何やら持っ
て・・・それが凶器か!!!）

???「もうお父さん!!!なんで言ったくれなかったの!!!」

???「そうですよ。お父様!!!白帝様の妃にするように白帝様に
頼みに行ってくるから私たちには秘密にしているってどうゆうこと
ですか!!!、それは、お父様からではなく私たちが直接白帝様に申
し上げますのに!!!」となにやら二人（床に深く埋まっている）に
言っている二人の御嬢さん。どうやら二人の娘だというのは分かっ
たので自己紹介をしてもらうことにした。

「あのう~~~~そこな御嬢さん方、自己紹介をお願いします。」と

???「あつ!!!し、失礼しました!!!白帝様!!!私は神王の娘
天香 です。」

と明るく挨拶してきた（イメージは彩雲国の香鈴で髪は赤つぽいく
髪をほどいて後ろでまとめた感じ。巫女さんの髪型と思え!!!）

???「失礼しました。私は魔王の娘 月読 と申します。お会
いできて光栄です、白帝様」

と落ち着いた感じで挨拶してきた（こちらと同じく彩雲国の春姫で
髪は黒で髪を束ねずにそのまま感じです。）

天香・月読「白帝様!!!私たちと結婚してください!!!あなたを
支えていきたいのです!!!お願いします!!!」

とこれが二人との出会いだった。

ちなみに神王と魔王は未だ床に埋もれたままだった。(ドンマイ！)

第13話（後書き）

遅くなったうえに1話しか更新できなかった。
すみません！！

第14話（前書き）

天香なのですが、イメージを香鈴から同作の十二姫にします。

第14話

さて、いきなりの結婚宣言に困っている白帝 六花です。

女性の方から結婚を申し込まれるのは嬉しい。さらに、その女性たちも綺麗だから尚更だ。

しかし、会って行き成りの結婚宣言、これは正直勘弁してくれ。友達、あるいは付き合いのある女性ならいい。しかし今回は、初めて会う女性だ。正直、どう対処したらいいか分からない。

と白帝が悩んでいると2人から

天香「初めて会う人に、こんなことを言うのはおかしいのは分かっているんです。けど!!」

月読「私たちは、白帝様のこれまでの記憶を見て この人を支えたい、この人を幸せにしたい 辛い思いを分けてほしいと思っただけです。だから!!」

天・月「私たちを受け入れてください!!!」

と二人に頭を下げられてお願いされては仕方がないのだが、今は

「お二人の気持ちは分かりましたが。だけど、俺には・・・六花様」十六夜。「と十六夜が話に入ってきた。

十六夜「六花様、先ほども言いましたが私は妻は何人もつても構いませんよ、あなたを支えるのに私一人では無理なので。私を大切にしてくれるのは嬉しいです。ですので、そんな気使いは無用です。それに私はお二人なら許しますよ。先ほどの言葉に嘘偽りはありませんでした。心から六花様を慕っているのが分かりましたから。」と笑顔で答える十六夜。(ええ嫁さんだよ)

「まったく。オレはいい妻をもったよ。」と言って十六夜を抱きしめる。

十六夜「でも、ちゃんと私も愛してくれないとダメですよ。」

「ああ。わかつているよ。」と十六夜を離して二人に近付き

「二人の想い確かに受け取った。これからは共に歩んでほしい。」
と膝をついて二人の手をとって言った。

天香「はい！！喜んで。」と笑顔で答えてくれた。

月読「嬉しいです。これで貴方を支えていきます。」と嬉しさの
あまり泣いて答えてくれた。

神・魔「いやあ〜良かつたな（ね）！！天香。（月読ちゃん

）六花殿（君）こちらから娘をよろしく頼む。（よ。）！！」となに
やら復活した二人が居た。

「はい！！もちろんです。必ず幸せにしますよ。」
と男どもの会話

十六夜「改めまして天香様、月読様 董伯と申します。これから
は、共に六花様を支えて行きましょうね。」と二人に近付き笑顔で
答えた

天香「うん！！もちろんだよ！！あ。あとこれからは同じ白帝様
の奥さんなんだから私のことは様付けじゃなくてもいいよ。」

月読「はい！！そうですね。同じ白帝様の妃なのですから様付
けはやめましょう。」

十六夜「ですが！！神王様と魔王様のご息女を呼び捨てにはでき
ません！！」

天香「まあいいか、じゃあせめて さん付けでもいいから呼びや
すい方で呼んで。神王の娘は気にしないでいいから。」

月読「私も呼びやすい方でイイですよ。私たちは共に白帝を支え
て行くのですからお互いに仲良くしていきましょう。」

十六夜「はい！分かりました。それでは二人には私の真名を預け
ます私の真名は十六夜です。これからよろしくお願いします。」

天香「うん。よろしくね十六夜ちゃん。私には真名はないけど代

わりにこれをあげる。」と十六夜の耳につけられたのはピアスの片割れ。

十六夜「あの、これは？」とピアスを触りながら尋ねると

天香「それは、神珠しんじゆと言って二つで一つの神界の宝石。これをお互いに持つていれば二人は離れないって言う言い伝えのある絆の宝石だよ。だから信頼の代わりとして受け取って。あとそれには、魔除けの加護があるんだよ。常に身に付けておいてね。」

十六夜「はい。ありがとうございます。大事に使いますね!!」

月読「それでは私からはこちらを」と渡されたのは指輪だった

十六夜「この指輪は？」

月読「はい。その指輪は守護者の指輪と言いまして危険が迫ると守護者が現れて自分の身を守ってくれます。この乱世の時代です。常に身に付けておいてくださいね。十六夜様に何かあれば白帝様だけでなく私たちまで悲しみますから。」

十六夜「はい。お心遣い感謝します。」

と楽しく会話をしていた。どうやら関係はうまくいきそうである。

としばらく会話が進んでいき

魔王「さて、そろそろ僕たちは帰ろうかなもう夜も遅いしね。」

と魔王の言葉で

神王「そうだな。あまり長居は出来ないな、それに、二人の為にもならんからな。」と白帝と十六夜を見ながら言う神王

十六夜「ツウウウ~~~~~／／／／／」と赤くなり悶えていた。

「さてどうだろうな。」とこちらはとぼけてみせるが顔が赤くなっている。

天香「む！まあ確かに仕方ないけど今度は私だからね!!」と何やら爆弾発言。

月読「て、天香様／／で、でも確かに。は、は、白帝様!!私

は最後でいいんでその／＼あの／＼相手をお願いします！！／／／
／＼となにやら変な話になってきたので

「2人とも落ち着け！！このバカ神ども自分の娘を煽るな！！」

神・魔「いやあ〜。早く孫の顔見たさについ。テヘツ（ニコ）
キモツ

「（ブチツ）さつさと帰れ〜〜！！！！」

神・魔「ではさらば〜〜。あ、そうそう娘は準備があるから後
で送るから楽しみに待っててね〜〜」と言って娘達と共に帰って行
った。

「ふう〜。やっと帰ったか。卑弥呼たちも悪かったな。」と管
理者たちに向き直り言った。

卑弥呼「何。気にするでないわ。（やっと今回喋れた！！）」

貂蝉「そうよ。代わりに情報が入ったしね。（でも、もう終わり
なのよね。）」

「何か情報が入ったら知らせるし、そちらも知らせてくれ。頼む。

」

卑弥呼「分かっている。ではな。」

貂蝉「じゃあねえ〜〜。楽しい夜をぐふふふ。」

と言って帰って行った。（天井から）

「さて、十六夜」

十六夜「ひゃい！！」

「そう驚くな。今夜は一緒に寝てくれればいい、なんだか今夜は
監視されてそうだからな。」と上を見ながら言う白帝。

十六夜「監視ですか？？いったい誰が・・・あ！！」

「まあ、深く考えなくていいから寝るか。」

十六夜「はい、そうですね。」

と二人は寝台に入ったのだが、お互い恥ずかしさのあまり背中を向
けていた。のだが十六夜が

十六夜「あの六花様。」と近づいてきたので向き直ると「エイッ」と可愛らしい声とともに十六夜が抱き着いてきた

「い、十六夜なにを。」

十六夜「六花様、今夜だけはこうしてきたいのです。ダメですか。」

「いいや、嬉しいよ十六夜。」と強くお互いに抱きしめあいながら眠りについた。

まあ、当然。翌朝にはそのバカ親と兄に追い回されたのは言うまでもない。

天界では

天香「いいなあ〜十六夜ちゃん／＼／＼」

魔界では

月読「うらやましいです。十六夜様／＼／＼」

と言っていたそうだ。（恋する乙女だね〜）

第15話(前書き)

変なところで区切るかもしれない。

第15話

どうも、ただ今、約束通り十六夜の兄と勝負することになった白帝
六花です。

まだ、開始まで時間があるので、周囲の様子を説明します。

場所は訓練所です。(イメージはローマの闘技場をそのまま小さくした感じで。大きさはビル4階分で広さはは野球場ぐらいです。その真ん中に二人は立っています。)観戦席ではこの勝負を見ようと兵たちや侍女たち、またまた領民たちが見えています。

さらに、観戦席よりも立派な(貴族とか高い身分の人が座るような席)席からは、董轟様をはじめ董家の方々が座りこちらを見えています。

さて、場所の説明はこんなもんで少し周りの会話に耳を傾けます。

観戦席へ領民 兵 侍女への会話

「いやあ〜楽しみだなこの戦い。妹君との結婚を認めてもらうために戦う白帝様。かたや妹君の結婚を認めない董穿様。うん。実に楽しみだ!!」

「えっ!! 違うだろ。結婚は認めてるけど董穿様が妹バカのせいで認めたくないだけだよ。」

「そうだね。大方、」この俺を倒さなければ妹はやらん!!」とかいったんじゃないか。妹バカだから。」「それでも、楽しみなのに代わりはないけどね。」

と何やら太守なのにバカ発言が聞こえたが事実なのでそのままスルーすることにした。見れが董穿が「妹バカで悪いかあ〜」と叫んでいた。

「おい、お前どっちが勝つと思う。」「うん。白帝様が出陣した時、オレは董穿様の方に居たから白帝様の戦いは見てないから分

董苑「あなた。まだそんなことを言っているんですか。そんなこと言っていると本当に十六夜に嫌われますよ。それでもいいんですか。」

董轟「そんなことはない！！なあ、十六夜。」と十六夜に顔を向ける

十六夜「（プイ）」と顔をそむける、すると

董轟「うがああああああ〜〜〜、十六夜に嫌われた〜〜。」
と何やら涙を流しながら叫んでいた。

十六夜「お父様。」と優しく声をかけると董轟「おお！なんだ十六夜。」とやはり自分は嫌われていなかったと思う董轟だが、十六夜「静かにしてください。うるさいです。あと、もう口はきいてあげませんので。」と静かに言う十六夜。そんな爆弾を投下されては董轟「……（真っ白）」（明〇の〇ヨ一風）になっていた。
それを見た董苑

董苑「だから言ったのに。はあ〜。」とため息をはいた。

十六夜「あ、六花様がこちらを向いてる！！六花様〜〜〜、頑張ってくださいね〜〜。ついでにお兄様も頑張ってくださいね。」と手を振りながら叫んでいるのだがその内容はこの勝負が戦わずして勝てるかもしれないからだ、なぜなら「うっ、うっ。十六夜がついでって、兄に向かつてついでって言った。」と妹についてと言われ膝を着き地面とお話しているかわいそうな人が出来たからだ。（何処の精神科がいいかな？）

とこれ以上話を聞いてると戻れない人が居るので（もう遅いが）やめる。と考えていると董苑様が席を立ち前出る

董苑「ではこれより董穿と白帝の試合を始める！！両者とも正々堂々、全力で相手をするように！！では・・・始め！！！！」
と試合が始まった。

童轟「……………」とやはり真っ白に固まっていた。

第16話

さて、董苑様の開始の合図により試合は開始されたのだが、未だに董穿は何やら落ち込んでいるので、これでは試合にならないと思っっている白帝である。

「(さて、コレは困った。どうする、軽く一発殴って終わりにするか?)」となにやら試合をどうするか悩んでいた。(まあ、確かにこれではどうしようもないので仕方のないことだと思う。)

そんなことを考えていると突然董穿が立ち上がり

董穿「よし!!この怒りを全て貴様にぶつけてやる!!覚悟しろ!!そして、妹の眼を覚まさせる!!」と何やらギャクギレなのかわからないが吠えていた。

「ふむ。望むところだ。かかってこい、逆にお前の眼を覚まさせてやろう。」

董穿「上等!!いくぞ!!」と武器を構え迫ってきた。(ちなみに武器は犬夜叉の蛮骨が使う蛮竜みたいな感じです。)

「白帝 参ります。清雲牙!!」とこちらも背負っていた剣を抜き待ち受ける。

「(あの大剣を背負ってあの速さ、これは油断できないな。)」と考えていると背負っていた剣を振り下ろす董穿。

董穿「ハアアアアアアアアア!!」(ドゴーン!!)

それを横に跳んでかわす白帝。いくらなんでもあの大剣を受けるバカは居ない、まして白帝の清雲牙はいくら神王たちから貰った特別なモノとはいえ限度がある。(実際は受け止めても折れませんが、ついでに刃こぼれもしません。気を付けるとしたら奥義を出すときに気を流しすぎないようにすることです。気を流す量によって威力が違います。最高で惑星一つは消えます。)とまあ使い方は頭に入

つて来るのでその辺は分かっている白帝。

「たいした威力だなあおい。」自分が居たところを見れば巨大なクレーターが出来ていた。

「（だがあの重量ではすぐに切り返しは難しいはず。その辺を試してみるか。）」と考え今度はこちらから攻める。

「参る！！ハッ！！」と踏み込み董穿に迫る。対する董穿は剣を振りかぶりそのまま振り下ろす！！

その攻撃を避け董穿に迫る。が、なんと董穿、あの太剣を片手で振ってきた！突然のことに驚いたが素早く清雲牙で受け止めるがそのまま吹き飛ばされてしまった白帝。

素早く立ち上がり董穿の出方を見る白帝。

董穿「どうだ。驚いたろう。一見、重量があるように見えるが実際は片手で扱えるようになってきているんだよ。」

「（なるほど。だが、片手で扱えるようになるまでそれなりの鍛錬を積んできたはず。）その武に敬意を評して少しだけ全力でお相手する！！」と以前よりも殺気を抑えて董穿に迫り、激しい打ち合いが始まった。

ここらで董家の方々の様子を見てみよう。

董轟「ふむ。ワシらと対峙した時より幾分か抑えておるな、六花殿は」と過去に白帝と河原で対峙した時のことを思い出していた。

董苑「そうね、あの時は本気で震えたわよ、あれほどの殺気を出す人はなかなかいないわよ。」と思いついたのか少し体が震えていた。

董轟「確かにな。それに六花殿の武器は以前見た二刀とは違う剣じゃな。」

董苑「そうね、一体何本の剣を持っているのかしら？」

十六夜「4本ですよ。」とそんな疑問に答えるのは隣で観戦していた十六夜である。

董苑「4本！そんなに扱えるの六花君は！？」

十六夜「はい。今使つてらっしゃるのが 清雲牙 です。そして、お母様たちが見たのは 春風、そして残りの2本は鉄砕牙 と 天生牙 です。」と以前白帝から聞いた武器を説明した。

董轟「なるほど。たが、あの武器はただの武器ではあるまい、あの時見た春風からは何かしらの力を感じだしな。」と十六夜に話しかけるが

十六夜「……(ぶいっ)」と無視

董轟「(ツパリン)」どこかが割れる音(おもに心です)

董苑「どうなの十六夜？」と父の代わりに訊いてみる。

十六夜「その通りです。六花様の武器は神様からの贈り物だそうです。お母様たちも六花様から事情は聞いたので知っているとidthink たんですが。聞いてませんでしたか？」

董苑「!!!ええ。聞いたわ。六花君の決意と覚悟をね。でも武器の説明はなかったわね。でも納得、神様からの贈り物ならしかたないわね。でも、六花君のことは他の人には内緒よ。このことを知っているのは私たち3人だけだからね。」と白帝の過去のことを他人には話さないようにした。それは、神からの使者などと広まったら白帝に変な噂や誤解が生まれ可能性があるからである。なので、このことは白帝が信頼している者達しか話すことはしない。

十六夜「はい。分かっています。六花様と神王様と魔王様との約束ですから。」とここで分からない説明を聞いた両親

董苑「神王と魔王は六花君から聞いたから知っているけど、あなた何時そんな約束をしたの？」

十六夜「昨晚、六花様のお部屋に居る時に神王様と魔王様にお会いした時です。」

両親「!!!!」何と驚いたことに自分たちの娘は神様に直接会ったというではないか。しかも、昨晚!!!此処に来たというのが驚きだ。そんな驚いているところに

十六夜「あと、神王様と魔王様の娘さんたちともお友達になりま

したよ。あつ、友達というより同じ六花様の妻になりました。」「と神様を見ることさえすごいのに神様の娘とも友達になった事により驚きがさらに増した。だがまたしても娘の口から不審な言葉が出てきた。

董苑「妻になった」ってどういうこと？」と白帝には我が自慢の娘との結婚が決まっているに他に妻を娶ったというではないか。その説明を聞くかのように目で説明を求めた

十六夜「はい。それは私が……（説明中）」

董苑「なるほど。自分ひとりじゃ六花君を支えて行けるか不安だったのね。」

十六夜「はい、六花様を支えるには私一人ではダメなのです。六花様を心から慕い支えてくれる人がいないと六花様の心が潰れてしまつからです。だから私は他の妻を娶ることを許したのです。六花様を支えるために、それに天香様も月読様もとってもいい人だからすぐ仲良くなれました。」

董苑「そう。あなたが認めたのなら私は何も言わないわ。確かに六花君の過去を聞いたなら一人じゃ駄目ね。ふふ。六花君もなかなかやるわね。神様の娘さん達とも結婚するなんて、何時かその娘さん達にも会いたいわ。」

十六夜「大丈夫ですよ。天香様達は此方に来る準備が出来たら来るみたいですよ。」

董苑「あら。そうなの楽しみね。ふふ。でもね十六夜。他の娘たちに負けるんじゃないわよ、ずっと六花君の袖を握ってるのよ。」

十六夜「はい！お母様。」

とこんな会話がされていた。ちなみに董豪は未だ撃沈中である。

（娘からのきつい態度により）

さてここらでまた白帝の戦闘に戻ります。

ちなみに、殺気は抑えてはいるけど、それでも相手の動きが鈍りま

す。

そのせいか、若干押され始めた董穿、さらに今まで感じた事のない殺気を浴びせられまして早い剣閃により普段の武を振るえないでいる。

「どうした、少し殺気を出したくらいで此処まで鈍るか。董轟様と董苑様と対峙した時はこれよりも出したんだぞ！これくらい耐えてみせろ！！董穿！！」とさらに激しさを増す剣の嵐。

董穿「つく！！（なんて速さだ。守りで精一杯だ、それにこれです少しだと！！なら全力ではどれほどなんだ！！）」と対する董穿は完全に防戦一方である。それに、いくら重量がないとはいえ。それでもやはり振つていれば疲労は溜まる、その証拠に董穿の手はすでに震えておりそう長くは戦えない感じた。

董穿「（つち！次でオレの全力を食らわせてやるよ！！）」とここで一旦、白帝との距離をとり自分が出せる最高の一撃のため集中する。それを感じたのか白帝もある程度まで殺気を抑え清雲牙に気をめくらす。

董穿「お前と戦って今のオレではお前に勝てないのは分かった。だから、今のオレが出せる最高の一撃を受け止めてくれないか？そうすれば、オレはさらに上を知ることが出来るんだ。」

「イイだろう。全力で来い。そして、さらなる高みを見る、そして、登つて来い。」

と互いに言い合い機会を窺っている。そんな二人の様子から観客達も固唾を？んで見守っている。

そして、二人の間を一陣の風がよぎる。そして、

二人「ハアアアアア~~~~~」とお互い怒号をあげながら互いの武器がぶつかり砂塵が舞い二人が砂煙により見えなくなってしまう。そして、二人の姿が見えるようになると董穿の武器は折られており白帝の刃が董穿の首筋に当たっていた。

観客「わあああああ~~~~~」

董苑「それまで！！勝者！白帝！！」と董苑の言葉により白帝の

勝利で終わった。

董穿「ありがとう。今の自分の武がどれ程か分かった。いつかお前のいる位置に追いついてやるからな。」

「ああ。楽しみに待ってるぞ。」と二人は互いに手を握った。

十六夜「六花様！」と十六夜が白帝の胸に飛び込んだ。

十六夜「おめでとうございます！！六花様！！どこも怪我はしていませんか？」

「ああ。大丈夫だよ。心配ない。」と二人は抱き合っていた。

董穿「（たつく、こんな妹の顔見せられたんじゃ認めるしかないじゃないかよ。）六花殿。」と真剣な顔で

「何かな董穿殿。」

董穿「妹のことよろしく頼む。」と頭を下げた

「ああ、任せられましたよ。烈刃殿。その認めてもらった礼といふかなんというか。」

董穿「？」

「折った武器の代わりにオレに作らせてくれないか。最高の武器を貴方に託したい。」

董穿「それは、ありがたい！！ぜひ作ってくれ！！楽しみに待っているぞ！！！」

「ああ。最高の武器を作ってみせるよ！！！」

とこうして二人の戦いは終わり、これにより董家公認（バカどものせいで長引いたが）となった。

ちなみに董轟は未だ撃沈中である。（いいかげん娘離れしろよ。阿呆が。）

第16話（後書き）

最後らへんが変な感じになってしまった。うまく、行かないもんだな。

さて、今更ながら次は人物紹介でも書こうかなっと思っ
ていても、今更の気がするので書かないかもしれませ
ん。まあ、書く気が有ったら書きますのでよろしくです。

登場人物紹介（前書き）

とりあえず書いてみた

登場人物紹介

人物紹介

主人公

名前 不知火 京谷（普通の人） 白帝 六花（半神半人）

身長 170cm 180cm（神たちと契約で成長）

血液型 A型

年齢 15歳 20歳（同上）

容姿 黒髪（長さは腰あたり）髪型はポニーテール（気や神気を流すと白くなる） 瞳は赤 整った顔立ち（犬夜叉と殺生丸の父親の顔です）

服装 劇場版と同じ（戦闘時） 劇場版の鎧なし（普段着）

武器 青雲牙（層雲牙の邪気なし） 奥義 清龍破

鉄碎牙（妖力ではなく神気・魔力で変化する） 爆流破

アニメでは妖気だがここでは神気・魔力とする。

天生牙（死者を1度だけ生き返えせられる。一人一回）

冥道残月破 空間を切り裂いて冥道を 開き、敵を

冥界へ直接送り込む。

春風 （双剣で神刀 るろ剣の四乃森蒼紫と同じ）回転剣

舞六連 小太刀二刀による高速の 六連撃

神刀 神が打った刀で浄化の力を持つ、また使い手を選ぶ

魔力ランク EXランク（リミッター解除時） AAAランク

(リミッター時)

魔力色 白色

主人公は半神半人なので不老不死に近い状態です。歳は20歳の容姿で止まり怪我・毒などは一日で治ります。また、戦闘能力と身体能力は高い。主人公はリミッターがあと2つあります。上記に載っているのは最高時と最低時です。なお、恋姫では魔力ではなく気と神気のみです。魔力はなのはの世界で使います。あと、4対の翼もあります。(色は白)

デバイス (恋姫では出しません)

名称 インテリジェントデバイス 天帝待機状態(ピアスの状態)

性能 主のサポート(補助魔法や周囲の索敵)主のリミッターの解除。

車・バイク・などの遠隔操作

ハッキング技術(どんな難関なセキュリティもとつぱする)

AIは男性タイプ

式神(白帝が自らの神気を使い作った鬼)

千(戦)鬼 せんき 戦闘に特化した鬼、身体を千体に分身が可能(全部本物でそれぞれが自我を持つ)

武器はそれぞれ違い神気により具現化する 主に対軍・賊用に召喚 属性は火

双鬼 そつぎ 二対で一組の鬼、前衛と後衛に分かれる。また、互いに離れていても念話で通信が可能 武器は斧と弓 主に護衛などに召喚 属性は風と雷

水鬼^{すいき} 治癒を得意とする鬼、神気を使い骨折や切断された傷を治すことができる

武器は薙刀 主に後方支援などで召喚 属性は水

剛鬼^{こうき} 防御・結界を張ることに特化した鬼、攻撃する術を持たない代わりに防御力と結界は最強を誇る 武器は手甲 主に拠点などの守護などで召喚 属性は土

輝鬼^{こうき} 式神の中でも最強の鬼、武器は剣（神気を使っているので神刀と同じ力を持つ）

主に対悪魔や殲滅用に召喚 属性は光

式神の強さ（左から強い順）

輝鬼 千鬼 双鬼 剛鬼 水鬼

なお、姿はシャーマンキングに出てくる式神の前鬼 後鬼と同じと考えてください

召喚獣

契約したことで聖獣や魔獣を呼び出すことが可能（召喚獣は白帝を気に入っているので召喚には答えてくれます。ちなみに召喚獣は出てくるごとに紹介します。）

白帝の妻

十六夜

月読

天香

身長 160cm

165cm

157cm

血液型 A型

AB型

A型

年齢 15歳

17歳

16歳

董家

董轟（轟胡） 筋骨隆々で涼州の先代太守 今は現役を退き内政に力を出している。戦闘は長時間は無理、それでも戦時になれば指揮を担当。娘の幸せを願う親バカである。

董苑 董豪の妻（彩雲国の珠翠と考えてください）で主に文官として政の中核を担う。また、武の方も優れている。董家の真の主。十六夜と白帝の幸せを願う女性。

董穿（烈刃） 十六夜の兄（同作の隼みたいな感じですが）涼州の現太守 文武共にやるが本人は武の方に力を入れているので内政は親と妹に任せている。太守になる前は様々な土地を回っていたそうだ。妹バカである。

神界

神王 神界を総べる王（同作の紅 玖琅）であり白帝を異世界に送った張本人。武に優れ若いころは一人で魔界に殴り込みに行き、そこで、魔王とあったそうだ。神界と魔界の平和を願っている。

魔界

魔王 魔界を総べる王（同作の藍 楸瑛で髪を下ろした状態）であり神王と共に白帝を送った張本人。知に優れ戦略家である。神王と同じく平和を願っている。

サタン 牢獄から脱走し、なのはの世界に来た悪魔。魔界でも最強の部類に入る、今は白帝に切られた腕を治すため隠れて力を蓄えている。神界と魔界の覇権を目指す。

??? (恋姫の悪魔) サタンと同じ脱走してきた悪魔。人を操り戦を起こさせる。

白狼隊 (白帝が持つ軍)

800人 (今考えてる時点) の少数精鋭。 情報収集 護衛 暗殺
工作活動 様々な分野で活動する

白帝が自ら鍛えた部隊であり兵1人1人の武は相当である (兵1人約10人分の強さ)

ちなみに隊員は白帝のことを白狼様 白將軍と言う。

登場人物紹介（後書き）

とまあ、こんな感じですが、妻たちの説明はまた今度書きます。また、気付いたことがあったら説明していくのでよろしくです。次回からまた新キャラ登場！！・・・かも？

第17話（前書き）

最近、仕事が忙しい今日この頃

第17話

烈刃との試合から数日経ったある日のこと、オレは董轟様に呼び出され政務室に来ています。

「（コンコン）失礼します、轟胡様。白帝です。」とノックをして入ってみる。

轟「おお。六花殿、すまないな呼び出してしまつて。」

と頑張つて政務している董轟、その後ろには何やら山が2つほどあった。

「いえ、問題ありません。部屋で案件をまとめていただけですから。」

轟「案件と言うと例のあれかな。」

と何時ぞや話した天界の知識の事について語っていた。

「はい。もう少しでまとまるので、楽しみに待っていてください。」

「

轟「うむ。楽しみにしているぞ。でだ、呼び出したのは、先日、息子と試合したじやろう。まあ、その前からなんじやが、兵たちが六花殿を將軍にしてくれと騒いでおつてな、まあ、六花殿さえよければ將軍となつてくれないじやろうか。」

となにやら、いきなり”この仕事どうですか？”みたいなノリで聞かれてきた。

「なぜ、兵たちがオレを將軍にと？」
ともつともな意見。

轟「うむ、切っ掛けとなつたのは、村が賊に襲われたのを六花殿が兵と共に突っ込んだことじゃ。あの、戦で兵たちが六花殿の魅力に惹かれてのう、六花殿の部下になりたいと申す者達が出たんじやよ。それに、先日の試合でさらに六花殿の武に魅入られた者達が増えてのう、もう六花殿を將軍にしてしようかと悩んでいたんじやよ。

「なるほど、分かりました。それに、いくら十六夜と許婚になったからって十六夜が働いてオレが働いてないのはまずいんで、正直この申し出はありがたいです。」

轟「おお、では。」

「ええ。ぜひともお願いします。」と頭を下げる白帝。

轟「いや、こちらそよろしく頼むよ。」

「はい。それで、志願兵はどれ位ですか？」

轟「うむ。だいたい800人ほどじゃったかのう。みな入ったばかりじゃから変な癖とかはないはずじゃ。六花殿の好きなように訓練して構わない。」

「分かりました。それで早速、今日から構わないのでしょうか？」

轟「いや。明日、みなに六花殿を正式に將軍にしたと報告した後兵たちとの顔合わせをもらう、訓練はその後じゃな。」

「分かりました。ではそれまでに準備はしておきます。」と部屋を出る白帝。

扉の前で振り返り

「最強の部隊を作って見せますよ。」と頼もしい言葉を残して部屋を後にした。

轟「最強の部隊か。楽しみにしているぞ、六花殿」

第18話(前書き)

今回はオリキャラ登場です。

第18話

さて、昨日轟胡様に言われたとおり、朝議の席でみなにオレが將軍になったことが伝えられた。

轟「さて、みなに六花殿が我が軍の將になったことを伝える。誰か反対意見はあるか。」と轟胡さまが周りを見ながら言った。朝議に出席しているのは、轟胡様、董苑様、烈刃、十六夜、まだ見たことがない人2人、そして、文官が数人ぐらいだ。それぞれから反応をまつ。

董苑「いえ、私は賛成よ。」

烈刃「ああ、オレも賛成だ。六花殿の戦力は頼もしいしな。」

十六夜「私も賛成です。六花様が將になって嬉しいですよ!!」

???「初めまして、白帝殿。私は張安ちやんあんと言います。ここ一月、賊の討伐でいきましたが、これからは同じ仲間としてよろしく頼みますよ。」と中年の男が言ってきた。

???「オレは呂畔りはん。張安と共に賊の討伐に行っていたが、白帝殿の事は周りの兵たちから聞いていて、よろしく頼む。」とこちらは30代ぐらいの男が言ってきた。

「はい、至らない事ばかりだと思いますがよろしくお願いします。張安様、呂畔様」

張安「謙遜なさらずに、後、私のことは昇華かいつくと呼んでください。」

呂畔「そうだぞ。極少数で7千の賊と戦って勝ったんだから謙遜することはあるまい。オレのことは紅こうと呼んでくれ。」

「はい、分かりました。昇華様。紅様。」
と一通り終わったのを見て董轟が

轟「よし！これで顔合わせは済んだな。朝議はこれにて終了とする、各自仕事に戻ってくれ。六花殿は烈刃と一緒にわしと共に訓練

所に来てくれ兵たちとの顔合わせじゃ。」

「分かりました。」

烈「了解だ、父上。さて楽しみだな六花殿が兵たちをどうするか。」

訓練場

さて、訓練所にはすでに志願兵が整列し待機していた。

轟「さて、みなも知ってると思うがこの度、六花殿が正式に我が軍の将として仕えてもらうことになった。そこで、前々から六花殿の部下にと望む者達を此処に集めた。どうだ、嬉しいか！」と集まった兵たちを見渡しながら言う董轟。

兵達「はい！！嬉しいです！！ありがとうございます。先代様！！」と何やら声をそろえて言っきた。

烈「この中にはオレの隊に居た者もいるがそんな事はどうでもいい、六花殿の元で強くなれ。分かったか！！」

兵達「はい！！董穿様！！」

轟「よし！！では此処からは六花殿に任せます。どうぞ好きに訓練してください。」

「分かりました。必ずや満足する部隊を作って見せますよ。」

轟「では、お願いします。烈よお前はどうする？」

烈「オレは今日は非番だから六花殿に付き合っよう、何かと不都合があると思うからその補助に回るつもりだ。」

「すまないな。烈刃殿。正直助かるよ。」

轟「そうか。ではわしは行くから何かあれば烈に言ってくれ。」

と言って訓練所を後にする董轟

「さて。今日よりお前たちを束ねることになった白帝 六花だ！
！轟胡様よりお前たちがオレの部下にと望んだことは聞いている、その期待に応えるようオレも全力を尽くそう。厳しい訓練だと思っ
が付いてこられた奴には董軍最強の部隊の称号をくれてやるう。そ

の覚悟、お前たちにあるか！！」

と兵たちの前で少し覇気を出しながら言った。

兵達「はい！！我ら一同、何処までも白帝様と共に！！！」
と自分を奮い立たせるように叫びながら答えた。

「よし！！これより訓練を開始する！！！」

とこうして後に董軍最強となる白狼隊の誕生だった。

第18話（後書き）

人物紹介

張安（彩雲国の紅 招可みたいな感じですが）

真名 昇華

董軍の古株で董轟と幼馴染。武と文共に優れており部下からの信頼はあつい。

大体、軍師的な位置である。原作恋姫の張遼のご先祖様。

呂畔（長身の体躯で髪は赤っぽいく短髪で顔は整っており目つきが鋭い）

真名 紅

董軍の中で最強の武人。主に単騎で戦場を駆け、部下の指揮は副官が張安に任せている。かと言って決して頭が悪いかではなく、ただ単に指揮をするのがめんどくさいだけで指揮はちゃんと出来る。こちらも部下からの信頼はあつい。原作恋姫の呂布のご先祖様

とまあ、こんな設定です。

ちなみに武器は飛龍偃月刀と方天画戟ではありません。

第19話

「(さて訓練を始めるのはいいんだけど、問題は訓練をどうするかなんだけど、まあ、深く考えずに自分好みにやるか。)」と何やらアバウトな考えでいる

「よし！訓練を始めるにあたってお前たちには厳しく指導していくから覚悟しろよ。まずは、お前たちにはオレの殺気を受けてもらう。」

兵「え！！」「ちょ！！それはいきなりすぎません！！」「俺達動けなくなりますよ！！」

「心配するな。いきなりそんな強くは出さないよ、まずは少しずつ出していくから徐々に慣れて行ってくれ、そうすれば自然と体制がつくからな。それに、自分で言うのもなんだがオレの殺気に慣れてしまえばたいていの殺気はなんでもないとと思うぞ。」

まあ。確かに白帝の殺気はそんな所そこの将が出す殺気よりも上を行くので慣れてしまえばどうと言うことはない、兵達もそれが分かったのか白帝の提案を受け入れた、それに自分たちが望んだことなので文句を言っている暇はないのである。

烈「六花殿」とそこに烈刃が話しかけてきた。

「何かな烈刃殿」

烈「オレも六花殿の訓練を受けてもいいだろうか。」

「別にかまいませんが、どうしたのですか。」

烈「イヤ何。六花殿に敗れて己を磨いているのだがまだ上を見れそうになくてな。そこで、オレも六花殿の訓練で何か得られるんじゃないこと思ってたな。ダメか？」

「イイですよ、それに訓練とかの指導は初めてなので兵たちに無理が掛からないようにしていきたいので何かあれば言ってください。」

「

烈「分かった、ありがとう」と言つて董穿は整列している兵の所に並んだ。

「では始めるぞ。少しずつ出していくから倒れる前に手を挙げてくれよ、やせ我慢して倒れちゃあ元も子もないんでな。」

烈・兵「了解！！」

と言つて白帝から殺気が出された。

〜殺気放出中〜

「（ふむ。まだ大丈夫か、思ったよりなかなかだな。では、これでどうか？）」「と董穿と戦つた時より少し抑えて出してみた。そこで、耐えられなかったのか何人かの兵が手を挙げた。それを見て殺気を出すのをやめた。

すると兵たちはみな地面に座り込み荒い息をしていた。

「よし、そこまで。みんな思ったより大丈夫みたいだな、今のは烈刃殿と対峙した時ぐらいの殺気だ。みなにはあれを最低でも慣れなくてもなうからなそのつもりでな。」

兵「あれで最低。」「とつか董穿様、あの殺気を受けて戦つてたんですか。」「凄すぎです。」

烈「父上と母上はあれ以上の殺気を受けて戦つたそうだ。それに比べれば俺達はまだまだ。」

それを聞いた兵達は

「あれよりも上がある。」「まだまだ。」「俺達とんでもない人を將軍にしちゃたんじゃないだろうか。」

「言つたらう。慣れていけばいいとそんな簡単には出来ないよ。とりあえず今日はみんなには耐えきれぬ殺気を受けながら訓練を受けてもらうから、一刻ほど休憩したらまたここに戻つてこい。」

〜一刻後〜

再び戻ってきた兵たちの前には何やら木刀、棍棒など武器の他にリストバンドが並んでいた。

烈「六花殿。木刀は分かるのだが、コレはなんだ？」とリストバンドを見ながら訊いてきた。

「ふふ、それはオレのとおきさ。いずれ話すけど。オレが許可するまで絶対にそれは外すなよ、今日からずっとそれを付けて生括してもらおうからな。」

烈「分かった、六花殿を信じよう。」

「よし、みんな付けたな。では、2人一組になって打ち合いをし
てくれ、1人で5連勝した者達はこちらに集まること、ただし！！
先着80人だ！！それ以外の奴はこの訓練場を10周させるからな
気合い入れて行けよ！！では開始！！」

兵達「はあああああああ〜〜〜」 「かかってこいやあああ〜
〜〜」 「どつせえええええええええええええええ〜〜〜」

「うん、みんながばつてるな〜」と兵たちが頑張ってる中、白帝は呑気に眺めていた。

「さて、この頑張りが何時までもつかな、それとも気付くのが早
いかな。」と何やらただ眺めているのではなく、何かを待つように
楽しそうにしていた。

しばらくして、最初に来たのはやはり將軍である董穿だった。

「おお！流石烈刃殿一番乗りですな。でも、烈刃殿は80人には
入らないので無効ですよ。」

烈「ああ、分かつているよ。それより六花殿、この木刀なんだが、
いつもより重い様な気がするんだがなんかしたのか？」

「（流石。將軍なだけのことはある、これに気づいてもらわなき
やあ烈刃殿をしごいていたよ。）ええ、重くしましたよ、何時もの
より1.5倍ほどね。いつもと違って武器の扱いが難しかったでし
ょう。これを徐々に重くしていき最終的には何時も自分が使ってい
る武器を”武器に振られている”のではなく、”武器を使いこなす
”ようにして貰います。それにこれには体力増強も入っているんで

すよ。まさに一石二鳥ですね。」

烈「なるほど、でも何時の間に重くしたんだ。」

「それは、コレですよ。」と言ってリストバンドを見せた

「コレを付けてモノに触ると触ったモノを重くすることが出来るんですよ。まさに訓練用には丁度いいですね。」

烈「そんなモノを何処で？」

「ふふ。知りたいのなら今夜オレの部屋に来てください。オレの正体を教えてあげますよ。後、渡したいモノもあるのでその時に。」
烈「分かった、今夜六花殿の部屋に行こう、そこで詳しく説明してもらおうからな。」

「ええ、分かりましたよ。」

と喋っているうちに

兵「白帝將軍。80人が決まりましたがどうしますか。」

「よし。では、残りの者は訓練所を10周するように80人はここでオレの話を聞いてくれ。以上」

兵「はっ!!!了解です!!!」

第19話（後書き）

リストバンド 身に着けていると触った物を重くすることが出来る

白帝が自分で作った

ちなみに、白帝が身に着けている鎧は力を制御するものであり。
るる剣の清十郎の白マントのような感じである。白帝が身に着けて
いるのは白いマントではなく白い毛皮（犬夜叉の映画の父親が身に
着けていたモノ）のマントである

第20話（前書き）

とりあえず、志願兵は800人でいってみます。
そこから、徐々に増やしていく予定です。

第20話

「さて、残った者達には説明するが、お前たちにはそれぞれ10人ずつの部下を持つてもらおう。」

兵達「??」「あの、どういう事でしょうか？」

「何。簡単な事だ。今回志願した数は800人だ。しかし、いくら俺でもそこまで一人一人面倒は見きれない。そこで、お前たちには部下を持つてもらい面倒を見てもらうことにした。勘違いするなよ、訓練の指揮はオレがするがお前たちには部下の”体調管理”・”連絡役”・”部下の指揮”をするだけだからそんな難しく考えなくていい。もちろんオレも気を付けるが常に部下の事を気にかけてくれよ。」

烈「なるほど。部下を持たせることによって指揮の向上や兵たちの団結を強めるのか。」

「その通り、言っちゃ悪いけどこの軍は人手不足だから少しでも人材の育成に努めないといけないからね、それに、うまくいけばこの中から将になる可能性の兵が出るかもしれないからね。」

それを聞いた兵達

「よっしゃあああああああ~~~~」「みなぎってきたあああああ~~~~」「女の子にモテる~~~~」

なんか願望が出てる奴もいたが気にしないことにした。

「それに、オレが目指す部隊は様々な分野に特化した部隊を作るつもりだ。」

烈「様々な分野??一体どういうことだ？」

「それは、護衛・隠密行動・情報収集・工作活動等の裏の仕事が出来る部隊だ。戦場では、遊撃部隊となってもらう。」

烈「なるほど、確かに我が軍にはそう言った部隊はあまりないな、情報はかなり大事だしな。」

「そういう事だ。まずは、お前たちにはその為の準備としてしっかりと体力と精神力を鍛えてもらうからな。」

兵達「はっ！！了解であります！！」

と話している間に残りの組が走り終わったようだ。

「よし！全員整列！！」

と兵が整列し白帝が先ほどの説明をする。

「よし。それぞれ10人一組になったな、それがお前たちの隊であり友であり仲間であり家族だ！！お前たちには常にその隊で活動してもらうからな。不満がある奴は居るか！！」

兵達「ありません！！」

「よし！！今日の訓練はここまでとする！！全員、明日に備えてゆっくり休んでくれよ。明日から厳しくいくからな！！では、解散！！」

兵達「はっ！！ありがとございました！！」

烈「いいのか。六花殿。まだ時間はあつたんだが。」

「そんな行き成りやつてもしょうがないですよ。それに、今日は顔合わせと、オレの部隊に対する意見を兵たちに話す事だけで十分ですよ。それに、先程からこちらを見ている何処かの誰かさんが闘気を出しっぱなしなんで、戦ってやりませんとね。」と後ろを振り向いて

「ねえ、紅様。」

烈「何？！」と慌てて振り向く董穿

そして、

紅「流石だな。自分としては幾分抑えていたんだが、いやはやコレは想像以上かもしれないな。」

烈「紅さん！！全く気付かなかった。」

「そんなのではダメですね。幾ら戦場ではないとはいえ此処が戦場あるいは何処か見知らぬ土地であったなら敵に気づかずにあの世行きですよ。少しは、感覚を磨くようにしてください。」

烈「グッ！！」心に何か刺さった。

紅「そうだぞ若。賊相手に突進してちゃ駄目だぜ。若は涼州の太守なんだから暗殺を企てる者もいるんだから気を付けてくれよ。」

烈「うう〜。みんなが僕を苛めるよおお〜。 (グス) 」

白・紅「事実だ！！後、キモいからやめろ。」

烈「うわわああああ〜」とどこかに走って行った。

「さて、では早速やりますか。相当我慢してたんでしよう、思う存分来てもいいですよ。後、昇華様。隠れてないで素直に観戦してください、落ち着きませんか。」

昇「オヤオヤ。気付かれてましたか。これでも気配は完全に消したつもりなんですがね。」

「まあ、確かに並みの武将じゃ気付かないでしょうが、俺ですから。」

昇「ふむ、それを聞いて納得している自分が居るんですが、まあいいでしょう、私も貴方の武見させてもらいます。」

「ご自由に、さて紅様いつでもどうぞ。」と言って清雲牙を抜く
白帝

紅「よし。では、行くぞ！！」と武器を構えて白帝に迫る呂畔（ちなみに武器は身の丈以上の大剣です。呂畔の身長は190cmです。）

紅「はあああ〜」大剣を振り下ろす呂畔

（ドオオオオオオンン）明らかに武器で出すような音じゃないと共に地面が割れた

「（どんな怪力だよ！！あんなの受け止めたら並みの剣じゃすぐ折れちまうぞ！！）凄いですね。紅様。」

紅「ふふ、白帝殿もたいしたものよ。今のは割と本気で振ったんだがまさか、かわされるとは思わなっかたけどな。（ボソ）董伯様と許婚だと、許さん。必ず一太刀浴びせてやる。」と何やら聞こえた気がするが聞かなかったことにする白帝

「では、今度はこちらから参ります。」と言って気を使つての身体強化により呂畔に迫る白帝

紅「（早い！！だが、捉えられないほどじゃない！！）あまい！！」
と言つて剣を振りぬく呂畔、だが振りぬいて切つたのは白帝の残像、本人は呂畔の後ろにおり剣を突き付けた。

紅「なっ！！何時の間に！！確かに早かつたが残像が出来るほどではなかつたはず？！」

「ふふ、今は”残照”^{ざんしやう}確かに残像が出来る程の速さではありませんが気を使つて一時的に自分の姿を残すことが出来ます。」

紅「なるほど、たいしたものだ。だが、まだ終わらんよ！！」
と言つて白帝の武器を自分の武器で弾くと同時に今度は無手で迫つてきた。

「なるほど、今度は無手ですか。いいでしょう、付き合いますよ！！」
「そう言つて白帝も呂畔に迫る

その様子を張安は感心して見ていた

昇「あの紅の背後をとりさらに無手で戦闘をさせるか。白帝殿なんてお人だ。」

そう張安が驚くのも無理はない呂畔は董軍最強の将であり普段は武器で敵を倒すが本当は無手の方が強いのである。武器を使うのはある程度の加減が出来るからである。まあ、あの大剣使つて加減するのは難しいと思うんだけどね。とにかく、呂畔が無手で戦うのは非常に珍しい事なのである。

そんな事を言っていると後ろから何人かの足跡が聞こえてきた、振り向いてみると 先代 董苑 十六夜 先程の白帝隊の者達がこちらに向かつてきた。

轟「おお！！昇華。先程の轟音は一体何だ？！」

董苑「そうですよ、政務をしてたら突然聞こえて来たんですもの驚きましたよ。」

十六夜「一体何があつたんですか。昇華様??」

兵達「(ウンウン)」

とどうやら先ほどの呂畔が放つた一撃でみな来てしまった用だ。

そんな皆に説明するよりも指を2人の方に指して

昇「アレが原因ですよ。みなさん。」

みんな「アレ??・・・なっ!!」

そこには、白帝と呂畔の戦いが繰り広げられていた。呂畔の事を知っている者なら誰もが疑うだろうあの董軍最強の武人が武器ではなく無手で戦っているのだから、その光景を見た董轟

轟「あの紅が無手で戦つてるだど?!信じられん!!白帝殿はそこまで紅を追い詰めたのか?」

昇「ええ。追い詰めたというより、すぐに紅の背後をとりましたよ。なんの苦も無くね、その後に紅が白帝殿の武器を弾いて自ら無手の戦闘になり今に至ります。」

董苑「流石は六花君ね!あの紅君に無手を使わせるなんて。」

十六夜「でも、心配です。六花様が怪我をなさるかもしれせん。」

昇「ああ。そういえばまだ、董伯様にはお祝いの言葉を言ってませんでしたね。董伯様、白帝殿との許婚おめでとございます。」

十六夜「はい!!ありがとうございます。昇華様!!」

昇「(ふふ。こんな董伯様の顔は見たことがないな。そこまで白帝殿に惚れられましたか。イヤハヤ羨ましい限りだね。紅よ、せめて自分が納得いくまで戦いなさい。)」

紅「はあああああ~~~~」と雄たけびを挙げながら白帝に拳、蹴り、あらゆる体術で白帝を攻撃するもすべて弾くか避ける白帝

紅「(ツチ。当たらない!全て紙一重でかわしてやがる!こんな奴がいるか!?)どうした!!避けてばかりでは俺には勝てんぞ!!少しは攻撃してきたらどうだ!!」

「そうか、では参ります!!」と少し殺気を出す（董轟達と対戦した時と同じ）そして、構える。

雰囲気が変わったのである程度の距離をとる呂畔。そして、今まで受けたことがない殺気を受けて知ることになる”自分以上の存在”が居ることを。

外野

昇「こ、これ程とは!!」轟「イヤハヤ何とも。」董苑「幾ら離れていても少し震えてしまうわね。」

兵達「コレが白帝様の。俺達が受けたのと全然違う。」「それでも俺たちは白帝様に付いて行くって決めたんじゃないか。」「そうだぞ、白帝様が目指す部隊の為にこれぐらい耐えられなきゃだめなんだよ。」

十六夜「六花様・・・」

手を下ろし楽に構え、足を軽く開き膝を曲げる構える。

呂畔は自分を叱咤して白帝に迫る、迫る呂畔を白帝は呂畔の肩を蹴って上に跳びかわす、その時に「俺を踏み台にした〜」なんてのは聞こえなかった。そして、白帝は着地と同時に素早く呂畔の頭上に迫り回転を加えた踵落としを食らわせた。

「食らいやがれ!!」

呂畔は素早く腕を交差させたが受けると同時に自分の身体が地面に沈む感じがした。その時の音が

（ドゴオオオン!!）さらに、突風が吹き周りの土砂が飛び散り土煙が舞う。

土煙が晴れるとそこには、倒れた呂畔と立っている白帝の姿があった。

「満足したかな、紅様。」と手を差し出す白帝

紅「ああ、満足したよ。というか、すっきりした感じた。」と手を掴み立ち上がる呂畔

「それは、良かった。また、手合わせをお願いできますかな。」

紅「それは、こちらのセリフだ。次こそは勝たせてもらうぞ。」

「ふふ。どうぞ何度でもお相手いたしますよ。」

と二人が話している

十六夜「六花様!!」と十六夜が走ってきて白帝の胸に飛び込んできた

「十六夜。どうしたんだ。今は政務中ではなかったのか。」

十六夜「あんな音が訓練場から聞こえてきたのです、政務をしている場合じゃありません!!」

「あんな音?」

昇「紅が大剣で地面を割った音ですよ。それでみなさん来てしまった用です。」

見れば、後ろから董轟、董苑、兵達まで来てしまった。

紅「すまん。」

轟「気にしなくていいんだよ轟。どうだい楽しめたかい。」

紅「ええ!!久しぶりにスッキリしましたよ。」

董苑「音と言えばさっきの六花君の技もすごかったわよね。人が地面に埋もれる程なんだもの。」

紅「ええ。あれは死ぬかと思いましたが。今でも腕が痺れていますね。」そういつて腕をさする呂畔

そんな呂畔に白帝は

「うむ、加減してよかったよ。もう少し強くしていれば腕が切断していたからね。ハツハツハ」と何気に恐ろしいことを言う白帝

それを聞いた周りの反応

轟「あれで加減……」董苑「六花君には底がないのかしら。」

昇「未恐ろしいな……」

紅「オレ生きてて良かった~~~~」十六夜「六花様すごいです!流石私の旦那様です!!」

兵達「俺達。一生、白帝様に付いて行きます!!」

とこうして白帝と呂畔の試合が終わった。後に後世には白い鬼神と赤い鬼神の戦いとして伝えられるのだった。

ちなみに、董穿は自分の部屋で泣いていたらしい。と侍女談全く、男がそんなに泣くなよ。

第20話（後書き）

呂畔の武器は斬馬刀と考えてください。

張安は槍と弓です。

第21話

さてただ今、夜。自分の部屋で部隊の訓練と案件についてまとめています。

とりあえず訓練については

護衛部隊・・・要人、貴族、輸送隊などの護衛専門の部隊（40人）

隠密（情報収集）部隊・・・敵の城・陣営に潜入し情報を集めたり情報を操作する部隊（200人）

工作部隊・・・工作活動など武器や兵器の製作、罠を仕掛ける部隊（200人）

を中心として育成。

戦場では、護衛部隊を中心とした遊撃部隊とする。

訓練方法

第一段階・・・体力の増強と精神の向上

第二段階・・・それぞれの部隊の技術の向上

最終段階・・・実践による経験

「ふむ。部隊については簡単にまとめてみたがこんなもんか。あまり、悠長にやっていたられないから兵達には悪いが地獄を見てもらうことになるかもしれないが、仕方ないか。さて次は天の知識の案件か。正直、前世でもあまり勉強してなかったからな、自分が憶えてる限りの事しか書けなかった。」

案件

戸籍などの住民登録 市役所の設立 学校の設立 交通機関の整備
治水工事 交番の設置

良質な鉄の生成方法 土地の改良方法 など

「まあ。こんなもんか説明は一応書いておくけど、質問されたら答えればいいし簡単に書いておくか。」

となんとかまとまったところで、ふと扉の前に人の気配を感じたので振りかえり、扉が開くのを待つとそこには董穿の姿があった。

烈「六花殿。約束通り来たぞ。」

「おお。烈刃殿待った居ました。ささ中に入ってください、今お茶を用意しますので。」と董穿を招き入れ部屋の椅子に座らせる白帝

「どうぞ、烈刃殿。」

烈「ああ、すまんな。頂くよ。」とお茶を一口飲んで董穿が本題に入った。

烈「さて、六花殿。昼間言った貴方の秘密教えてもらいましょうか。」

「いいでしょう。いずれ話す予定でしたから。それではお話しします。」

（説明中）（手抜きとか思わないでくださいね）

「と言っわけですよ。」

烈「なるほど、神様からの頼みでこの地に来たのか。」

「その通り。役目を果たすためにオレは来た。」

烈「話は分かった。この事は後誰が知っているんだ？」

「烈刃殿以外の董家の皆知ってるぞ。」

烈「（ガーン）オレが最後、なんで父上も母上も妹も教えてくれなかったんだ。（グス）」

「あー。多分、何時話していいか分からなかったんじゃないかな。」

烈「うう。まあそういう事しておくよ。で六花殿。渡したいと
いうのは何だ？」

「ああ、前に言っていた烈刃殿の武器を渡したいと思つてな。」

烈「おお！本当か？！出来たのか？！」

「そう慌てるな。烈刃殿、手を出して。」

烈「分かった。」と言つて片腕を出す。

「我願う。彼の者にふさわしきモノを彼の手に、魔を払い 幸を呼ぶモノよ 共に歩むモノとして彼の手に現れよ」と神々しい光が二人を包み込み光が収まると董穿の手には一振りの長剣が握られていた。

烈「コレは??」

「それは、天狼剣てんろうけんと言つてオレが持つ春風と同じ神刀で浄化の力があります。」

烈「天狼剣。何だ、初めてのはずなのに手に馴染んでるし頭の中に何かが流れ込んでくるような感覚がする。」

「それは、貴方を使い手と認められた証として自分の使い方を教えてくれているでしょう。大事に使ってくださいね。それに、幾ら使い手として認められたからといって鍛錬は欠かさずにしてくださいね。じゃないとその剣は消えてしまいますからね。」

烈「ああ、分かった。大事に使わせてもらうよ。ありがとう。」

「礼には及びませんよ、さて、オレの用は終わりましたからもう休んでください。今日は色々と大変だったでしょうからゆつくり休んでください。明日もオレの訓練受けるつもりでしょう。なら、尚更ですよ明日から地獄を見てもらいますから、今日ぐらいいい夢を見てください。」

なんか、不吉な単語が聞いた董穿は「えっ！！ちよっ！！地獄つてなにさ！！」と慌てるも部屋から出されて

「では、良い夢を〜」と白帝に言われ廊下に取り残される董穿 烈「ヤバイ。明日は死ぬかもしれん。」と何やら自分の死期を悟るのであった。

まあ、死にませんけどね。軽く地獄を見てもらうだけですから死にはしませんので安心してください。

烈「安心出来るか〜〜〜〜！！！」説明に突っ込まないでください！！全くそういう人には出番はありませんからね！！

烈「えっ！！すまん！！オレが悪かった！！だから、許し（ではまた次回〜〜）ってオイ！！！」

第21話（後書き）

「ごめんなさい。最後変なの入れてしまいました。」

第22話

さて翌日、訓練に行く前に董轟の執務室に行き案件を見せた。

「どうです、轟胡様。一応、私が思いついた事は書いては見ましたが。」

轟「うむ、素晴らしい!!早速、妻と文官たちに見せて実際に来るか検証してみよう!!」

「よろしく願います。一応、説明は書いておきましたが分からない事がつたら聞いてください。みなさんの前で説明しますのでああ!!それと、しばらく、後ろの山で訓練をしますので半月ほどいませんで何かあったら来てください。では、私は訓練に行きますので。失礼します。」と礼をして訓練所に向かう白帝。

轟「山で訓練つて。六花殿はどんな部隊を作るつもりなんじゃ?まあ、好きな様には言ってしまったからしょうがないのじゃが。六花殿に任せれば大丈夫じゃろうて。しかし、ふむ、何とも素晴らしい案件だ。コレが出来れば涼州が栄えるな。民たちも喜んでくれるだろう。」と期待に胸を弾ませて別な部屋で政務をしている妻と娘と文官たちに案件を見せに行くのであった。

〔訓練場〕

さて、訓練所に集まった董穿と兵たちの前で白帝は

「さて、本来なら時間をかけてお前たちを育てて行きたいんだが、余りゆつくりとしていられないので。これより、一月で仕上げしていくから覚悟しろよ!!」と言って昨夜考えた部隊の役割、訓練方法の説明をした。

兵1「あの。質問ですが」

「なんだ。」

兵1「部隊編成はどうするのですか、10人の中でもそれぞれ向

き不向きがあると思うのですが？」

「心配ない。部隊編成についてはこれから行う訓練で分かるから問題ない。」

兵2「その訓練とはなんですか？」

「それは。今日より半月、山で自給自足の生活をしてもらう事だ！！」

烈・兵達「?????!?!?!」

烈「ツチヨ、昨夜言っただけ地獄を見てもらうってこの事かよ!!！」と昨晚、白帝の言ったことを思い出し聞いた

兵達「(地獄?????!?!?!んなわけ・・・)」と流石にそんな事はないだろうと思う兵達だが

「そうだ。」とあっさり肯定した白帝

兵達「(ガン)」となにやら地面に膝をついてる兵達

「言っただろう。あまり時間もなくて。それに、近々戦も控えてるんだろう烈刃殿。」

烈「な、なんでその事を?!それはまだ一部の者しか知らないはず?!」

「轟胡様と董苑様に言われたからな。」本当は言い当ててしまったのだがそれを言つとややこしくなるので言わない白帝

烈「なるほど。まあ、六花殿になら知られても問題はないんだが。」と兵の方を見る董穿

「心配ない。もしこの中に間者が居れば・・・殺す。(ちよい殺気だし)」と兵を見ながら言う白帝

兵達「ひい?!」

「まあ、そんな間者いないけどな。だがもし、この事を誰かに話したら・・・分かってるな。」

兵達「はっ!!了解であります!!」

「よし。他に質問はないか、ないなら続けるぞ。基本的には山での生活だ。もちろん、ただ山で生活するだけでなく訓練も行う。その中でお前たちにどの部隊に適しているかを選ぶ。生活は10人一

組での行動だ。訓練はもちろん合同だ。

朝は自分たちで朝食の準備、もちろん現地調達だ。何も捕れなかったらそのまま訓練になるからしつかりな。ついでに言っとくと昼の分も捕つとけよ昼食の時間は獲物を捕ってる時間はないからな。その後にもまた訓練を再開ただし午後の訓練は短めだ、それは、夕食の準備と少し睡眠をとっておくためだ。」

烈「なぜ、睡眠を？そのまま。寝てしまえばいいんじゃないか。」

「夜には昼間動かない動物たちもいるし何より賊が出る可能性もあるから交代で寝ずの番をする必要がある。それに、夜にしか出来ない事もあるしな、フツフツ」最後がなんか怖いです

烈「なるほどな。（冷や汗）」

「と云うわけだ。質問がなければまた、2時間後に（時間の単位がイマイチつかめないので現代版で行きます。）準備と家族に挨拶をすませたら此処に集まってくれ。以上、解散！！」

兵達「はっ！！」と走り出した

「さてと、オレも準備するか。烈刃殿、貴方も準備を忘れずにお願ひしますよ。ああ、もし烈刃殿の隊で参加したい者が居るなら参加してもいいですよ、ただし、烈刃殿を含めて10人ですけどね。では、また此処で。」と烈刃を残して準備に向かう白帝

烈「うーん、参加したい奴いるかな。まあ声かけてみるか。」と自分の隊が居る所に向かうのだった。

（白帝の部屋）

「さて持つてく物はオレは少ないからこんなもんでいいだろう。ふむ、まだ時間はあるな、流石に2時間は長すぎたか。」

と準備が終わり暇を持て余してる白帝

「流石に戻るの早すぎるし、執務室も今は政務中だからな。さて、どうしたものか。」と考えると（コンコン）と扉を叩く音が聞こえたので「はい、どうぞ。」と相手を招き入れた。（ちなみにノックは白帝が教えて今では日常的に使ってもらってます。）

十六夜「失礼します。六花様」と言つて入つて来たのは十六夜だった。

「ああ、十六夜どうした。今は政務中じゃなかったか？」と言つて愛する人を抱き寄せて聞いた

十六夜「それは、大丈夫です！六花様に会うために終わらせてきましたから！」となんともうれしい事を言つてくれる十六夜

十六夜「六花様。訓練で山に行くとお父様から聞いたのですが本当ですか。」と抱きしめ返しながら答えてくれた

「ああ。半月ほど山ですごく予定だ。寂しい思いをさせてしまうな。けど心配するな、会いたくなったら、会いに来てくれればいい。もちろん、他の兵の家族も連れて来ても構わないよ、ただし、1週間に1回で頼むよ、そんな頻繁にこられちゃ訓練に集中できないからね。」と十六夜の髪を髪を撫でながら言う白帝

十六夜「はい！！私お弁当作つて行きますね！！」と嬉しそうに笑顔で言う十六夜

「それは、楽しみだ。

そうだ！出来れば、他の兵の家族達にも弁当を作ってもらおう。そうすればあいつ等もやる気が出るだろうからな。来る時は前日に連絡を入れてくれよ、その日の内に材料はこちらで用意して届けるからな。」

十六夜「はい！！頑張りますね！！」

「ふふ。・・・すまんな十六夜」と突然、白帝がポツンと言つた十六夜「どうして六花様が謝るのですか？」と首を傾げながら尋ねる十六夜

「最近、十六夜とこうしてゆっくり会話もしてなかったからな、十六夜の許婚としてとしてダメだな私は十六夜にさみしい思いをさせてしまつて。」

十六夜「そんな事はありませんよ。六花様！！こうして私を抱きしめてくれるじゃありませんか。そりゃ最近、六花様と会話らしい会話をしてなくて、さみしいのは感じていました。けど！こうして

会話して抱きしめてもらってそれだけで私は幸せなんですよ。こうして愛する人が隣に居てくれるから嬉しいんです。」と白帝の手を握りながら言う十六夜

「そうか、ありがとう、十六夜。そうだ、訓練から戻ったら城下に行こうか。」

十六夜「城下にですか？」

「ああ、許婚として十六夜と逢引きしようと思ってな。」

十六夜「あ、あ、逢引き／＼／＼?! (ボン!)」と真つ赤になる十六夜

「ダメか。」

十六夜「い、いえっ!!もちろん大歓迎です!!六花様／＼／」

「そうか、帰ってくるのが楽しみだ。」

十六夜「もう!!六花様!!..あ、あの六花様、では今だけはこうしてもいいですか。」と言って白帝の胸に顔を埋める十六夜

「ああ、当分会えないからな、時間が来るまでこうしていよう。」
「とこちらも十六夜を抱きしめる白帝

二人は時間が来るまで抱きしめあうのであった。

〈訓練場〉

「よし、全員集まったな。ではこれより山に向かう、山に着くのはおそろく3時ごろだろうから着いたらまず周辺の調査を行う、なおその時に自分たちが寢床とする所を見つけておくように早い者勝ちだぞ。それから食料の調達もしておくようにその時に食べられるモノかの確認も忘れるなよ。分からなかったら聞いてくれ。後、食べ物には必ず火を通すように。説明はまた着いたら説明する。以上だ、分からないことがあったらそのつど聞いてくれ。では、では出発!!」

兵達「おおおおお〜〜」と出発した

「うん。みんな大丈夫そうだな。」

烈「六花殿。」

「ああ、烈刃殿。どうやら、烈刃殿の隊からも参加者が出たようですね。」見れば董穿を含めた10人がいた。

烈「ああ、苦勞したよ。何しろ全員参加希望したんだから。そこからなんとかこの9人を選んだんだよ。」と何やら疲れた顔で言ってきた。

「それは、ご苦勞様です。さて、9人の方々この訓練、最後までついて来られますか。」

兵「無論です!!」「最後まで付いて行ってみせます!!」「どんな訓練か楽しみだ!!」

と気合十分な兵達

「どうやら。大丈夫そうですね。では、烈刃殿この組の隊長は任せましたよ。説明は先程言った通りです。分からない事があつたら聞いてくださいね。では、みなさん頑張ってください。」

と言って兵の後を追うのであつた

烈「よし!!俺達も行くぞ!!」

兵達「はっ!!」

こうして白帝による地獄の訓練が始まった。さて何人無事に帰つてこられるか非常に楽しみであるクッククク

「そんな死人は出さないよ……多分」

烈・兵達「オイッ!!!!!!」

第22話（後書き）

ふむ、やはり最後までこうした方が面白いだろうか？
うーん。やっぱり直そうかな。

第23話(前書き)

第23話

さて、ただいま山の中腹の開けた場所に兵達といます。

「出発前にも言ったと思うがこれから山の周辺と地形の調査をしてもらう。これは、班全員でやってもらう。そして、自分たちの拠点となる寢床を確保しろ、ただし、寢床の場所は他の班には絶対に知られるなよ。訓練は常に合同だが訓練以外は周りの班は敵と思えよ。これは、実践も兼ねてるからな。ここまでで質問は？」

兵1「はい！その拠点が見つかった場合はその拠点を放棄して別の拠点を探せばいいのでしょうか。」

「そうだ。ついでに言うと、自分たちで拠点を作っても構わないし、班の何人かを偵察に向かわせて他の拠点を探してもいい。拠点を見つけた班はこの白い矢をその拠点到打ち込めよ、打ち込まれた班は速やかに移動して新たな拠点を探すこと。また、拠点は日に日に変えても構わない、それは、自分たちの班で相談して決めてくれ。なお、今日の拠点の詮索はなしだぞ、詮索は明日から始めること。他に質問はあるか。」

兵2「はい！もし訓練以外で他の班に接触した場合はどうすればいいですか。」

「先程も言ったが訓練以外は周りは敵だ、戦って構わない。ただし、勝敗はこの皿が割れたら負けだ。」そう言つて番号の書かれた皿を2枚出す白帝

「班を決めた際に班長も決めたが、その班長にはこの大きい皿を頭か胸に付けてもらう。そして、他の班の者にはこちらの小さい方を付けてもらう、こちらも場所は同じだ。負けた者は相手がいなくなつたら自分の拠点に戻る。その際に誰が誰をやつたか此処に書いてくれよ。書き方は戦う前にお互いの番号を確認し勝つた方は勝ち組に自分の番号を負け組に相手の番号を、負けた方はさっきの

逆で書いてくれ、またその班長が敵に見つかり皿が割れた場合は拠点を移動してもらうぞ。他に質問は。」周りを見渡す白帝

「ないようだな。では拠点が決まったら各班で役割を決めてもらう。決めるといっても、これが確定してわけじゃない。その役割は3つだ。一つは班長を守る護衛役、二つ目は周りを偵察する隠密役、三つ目は罠などを仕掛ける仕掛け人だ。二つ目までは名前の通りだが、三つ目の仕掛け人だが罠の制限として落とし穴と命の危険がない罠とする。ただし、中に何か仕込んだり深く掘ることは禁止する。なお役割は変えても構わない。人数は班と相談して決めてくれ。」

それが決まったらここに書いて持ってってくれ、ただし、役割を変えたらそのつど書いてくれよ。書き方はそれぞれの役割の項目に自分の番号を書いてくれれば構わない。」

今日の訓練は、拠点の確保と役割を決めることだ。それが決まれば後は夕食の準備と明日の為に寝て構わない、その際、交代で寝ずの番を立てるのを忘れるなよ寝てる最中に皿が割られたって事がないようにな。説明は以上だ。ちなみにオレは夜に各班の拠点に行くからその時に分らないことがあったら聞いてくれよ。では各班、明日の9時にまた此処に集合すること。では始め！！（ゴーン）」
と言って銅鑼を鳴らす白帝

兵達「うおおおおお〜〜」と一斉に駆け出す兵達

「うんうん。みんな元気だねえ〜」。さて、オレも行きますか。」
と言って進む白帝

〜森の中 董穿班〜

烈「さて、拠点としてこの辺がいいだろうか。」と言って董穿たちがいるのは少し開けた場所であり周りがよく見渡せる場所である。
兵1「いいんじゃないですかね。ここなら見張りもしやすいですし隠れる場所もありますしね。」

兵2「そうだな、罠も張りやすいし近くに川もあるから水には困らないしな。」

烈「よし、拠点はこの処に決まりだな。とりあえず後は役割を決めて夕食の準備をしつつ周辺の調査を行う。」

兵達「了解。」

烈「役割は兵1〜3は護衛4〜7は隠密8〜9は仕掛人で頼む。」

兵「しっかり護衛しますよ。」「隠密は得意だ。」「どこに仕掛けようかな。」

烈「では行動開始!!!」

兵達「はっ!!!」

〜少し離れた場所〜

「なるほど。烈刃殿の班はあそこか。流石、訓練されてるな。どの作業も手馴れているしな。さて烈刃殿はこの訓練で何処まで成長するか楽しみだな。さて次行くか。」と言って木と木の間を跳ぶ白帝

〜夜〜

別の班にて

「よう、なんか分からないことはあるか?」と班に尋ねる白帝

班長「あ、隊長。実はキノコを採ったのはいいんですがどうもこのキノコが怪しくて、みんなでどうしようか迷ってたんですよ。」

「ああ、このキノコは毒キノコだから気を付けるよ、普通のキノコと毒キノコの見分けからとしてはまず色に注意しろよ。こういういた色が鮮やかなやつは毒キノコの可能性が高いから注意だ。普通のキノコはこのように色が暗いのが多い、しかし、普通のキノコだからって生で食うなよ、ちゃんと火を通して食べるようにしないと腹を悪くするぞ。」

班長「はい!!!分かりました!!!ありがとございます!!!隊長!!!」

「他に問題がないならオレは行くぞ、夜は注意しろよ。」

班長「はっ!!!了解です!!!」

大体他の班を見た後に最後に董穿班を見てみると

「烈刃殿。何か問題はありませんか。」

烈「?!・・・なんだ六花殿か脅かさないでくれよ。」

「ああ、すまんすまん。」

と謝ってる中

兵2「ウソだろ。全く気配を感じなかったし、いくら夜でも姿さえ見えなかった。」

兵9「そんな!!--こころ周辺に罾(よく武家屋敷とか)に出てくる侵入者用の音が出る罾)を仕掛けたのに全く反応がなかったなんて(ガク)」

兵5「うーん。白帝將軍。恐るべし。」

烈「特に問題はないから大丈夫だ、心配ない。食料の安全も確認したから問題ない。」

「流石ですね。烈刃殿、ではまた明日。夜には夜は気を付けてください。」と言って姿を消す白帝

兵3「き、消えた?!」

烈「いや。上に跳んだんだよ、木と木の間を跳んで移動してきたんだろ。」

兵9「そうか!!--だから、罾が反応しなかったのか!!--よし、今すぐに上に罾を仕掛けねば!!--」

烈「気を付けるよ。さて、後は交代で寝ずの番を決めて寝るだけか。」と言って董穿班は眠りにつくのだった。

〈各班から離れた場所〉

「どうやら、各班休んだようだな。」と神気を使った周辺調査を終わらせた。

「さてこの辺でいいかな。周りには結界を張ったし誰も近付かないしな。」と言って懐から5枚の人型の紙を取り出す。

「よし。やるか。」と言って白帝の周りが白く光り魔法陣が現れ

た。

「我願う 我が力を受けしモノ達よ その力を得て我に姿を現せ 顕現せよ!! 式神!! 五闘神!!」^{ごとうしん}「光が強まり辺りを光が包み込むやがて光が収まると白帝の前には5体の鬼が膝をつき白帝に頭を垂れていた。

????「お呼びでございますか。我らが主様。」と5体の一人である白い鬼が聞いてきた

「ああ、すまんな呼び出してしまって、輝鬼よ。」

輝「いえ、我らが創造主にして我らの主の求めに参上するは当然のこと」

????「そうですよ、白帝様。貴方様は私たちを作り命を与えてくれただけでなく、友として我らを見てくれたのですから参上するのは当たり前です。」と今度は青い鬼が話してきた

「ありがと。水鬼。」

????「そうですぞ。お前は俺たちの主なんだからもつと堂々としてろよな。」と今度は赤い鬼が話してきた

「オレはこれくらいがいいんだよ。戦鬼。」

????「ちよつと戦鬼!! 何、白帝様になんて口の聞き方してんの?!」????「そうですよ、戦鬼!! 僕たちの主様になんてことを言うんだよ!!」と緑の鬼と黄色い鬼が戦鬼を責める

「あまり、戦鬼を苛めてやるなよ双鬼。」

????「それにそういう所が主様のいい所なんだよな。だから俺達は主を好いていられるんだよ。」と黒い鬼が双鬼をなだめる

「ありがと。剛鬼。」

とそれぞれと会話をした後改めて白帝が

「今回呼び出したのはお前たちに頼みがあるからだ。」

輝「頼みでございますか。」

「そうだ、お前たちには今回の訓練に協力してもらいたい。」

水「それで、協力と言うのは?」

「ああ。まず、戦鬼と水鬼にはこの山の麓の周辺に潜んでいる賊

たちの調査をしてもらいたい。」

戦「賊を見つけたら倒していいのか？」

「イヤ倒さなくていい。賊が周辺の村を襲わないように見張って
いてくれればいい。」

水「もし襲った場合は？」

「その時は殲滅して構わない、その時は負傷した村の人たちの治
療を忘れるなよ。」

戦・水「分かった。（承りました。）」

「剛鬼には、この山に結界とこの土地の土の状況と土地の穢れが
ないかを調べてもらいた。」

剛「了解しました。」

「輝鬼には、剛鬼と共に土地の穢れを払ってもらおう。」

輝「承知しました。」

双「ねえねえ。主様、僕たちは？」「そうですね、私達にはない
んですか？！」

「心配するな、双鬼には重大な役割をになっってもらおう。」

双「重大！！」「なんか私たちがすごい事やるのかしら。」

「お前たちに頼むのは十六夜の護衛と話し相手になってもらいた
い。」

双「十六夜？」「誰、それ？」と首を傾げる双鬼、見れば他の式
神も首を傾げていた

「ああ、お前達は知らなかったな十六夜はオレの”妻”（予定）
だ。」と説明

五闘神「妻あああ？？？！！！」と何やら驚く式神たち

輝「ああ！！おめでとございます！！主様！！！」

水「まあまあ。嬉しいですね。早く白帝様のお子様を見てみたい
です！！！」

戦「ちよっ！！なんで俺達を呼んでくれなかったんだよ！！！」

剛「そつだぞ、主。水臭いじゃないか。」

「お前たち少し落ち着け、十六夜とはまだ結婚はしていないが今は許婚だ。今回は訓練で十六夜から離れてしまふからさみしくない様に護衛と話し相手を付ける。そういう訳だから頼んだぞ双鬼。」
と双鬼の方を向けば

双「あ、あ、主様の奥方様を護衛する。」「どうしよう、私、奥方様の話し相手務まるかしら？」となんかテンパっていた。

「そんなに気負わなくていい。いつも通りでいいから頼んだぞ。」
と双鬼を落ち着かせるように言う白帝

双「は、はい！！」「ま、まかせなさい！！」なんか先が不安になる白帝

「（大丈夫だろうか）では、お前たち頼んだぞ。それから人に見られるなよ、常に神気で姿を隠してくれよ。」

五鬨神「はっ！！主様！！」

「では、頼んだぞ。」

と言うと式神たちはそれぞれ飛んで行った。

「さて、オレも寝るかな。」と言って木の上に跳び移り眠る白帝であった

第23話（後書き）

式神たちの性格の説明

輝鬼・・・大人びており落ち着いた男性の性格、主には絶対の忠誠を誓う

水鬼・・・物腰柔らかな女性で主を心から敬愛している

戦鬼・・・熱くなりやすい性格で主には時々模擬戦を申し込むほどで敬語はあまり使わない

双鬼・・・精神年齢は子供で、にぎやかな性格で常に周りは明るい。

剛鬼・・・あまり喋らず寡黙な性格である。双鬼の面倒をよく見ているお兄さんの存在である

式神たちは常に人間界ではなく神界にいるのだが白帝の様子は分からないでいる、人間界に行く時は呼び出されるか自分たちで行くかしかないのだが滅多な事では自分たちから降りて行くことはない。例外として双鬼は結構降りて来たりもする。呼出がないときは常に鍛錬やら神王や魔王・天香と月読と話していたりする。

とこんな感じで式神の説明追加です。

第24話(前書き)

今回は十六夜視点で行きます。

第24話

さて所、変わって董家です。

えっ！訓練の様子は書かないのかつて。そんなのいちいち書いていられません、ちなみに訓練開始から三日経ってます。しかし、今回は訓練開始の夜からですのでお願いします。

〜夜 十六夜の部屋〜

「はあく。六花様、十六夜は寂しいです。」と政務が終わり自分の部屋で休んでいる十六夜

何やら窓の外の月を見つめては愛する人の事を考えていた。ちなみに十六夜の格好は単衣でその上に軽く着物を羽織っている格好である。

「うう。でも六花様が1週間に一回なら会いに来ていいって言うたから、そんなに寂しくないもん！」と気丈に振る舞う十六夜、なんだかんだでやはり寂しいのである

「ああ、六花様。今頃何をしているのかしら、もう寝てしまったかしら。私ももう寝ようかしら。」

と言って自分の寝台に入る十六夜

「せめて、夢の中で六花様にお会いできますように・・・」と目を瞑り睡魔が来るのを待っている

突然、窓が開き風が部屋を荒らしたのだった。

突然の事に驚いた十六夜は風が止むまで寝台におり風が止んだら寝台から降りて周りの片づけを行うとすると、

双鬼・黄「ちよと！！双鬼！！風が強すぎだよ！！奥方様が起きちゃうだろう！！」

双鬼・緑「うっさいわね！！ちよと風の加減を間違っただけじゃない！！あんだこそ声が大きいわよ！！奥方様の睡眠妨害しない

「でよね!!」

黄「そつちこそ!!」

緑「なによ!!やる気!!」と何やら大きな声がして部屋の中をよく見ると月明りで見えたのは丸い物体が何か言い争いをしていたのである。

「あ、貴方たちは一体何？」と恐る恐るその物体に近付き聞いてみる十六夜

普通なら叫んで部屋から飛び出すところのだがこの姫何かと胆が据わっているのである

黄「これは、奥方様!!夜遅くにごめんなさい!!」と片方の黄色物体が謝ってきた。

緑「ちよつと。いきなり謝っても奥方様が困惑するでしょう。初めまして奥方様。私たちは白帝様の式神で双鬼と言います。」

「六花様の式神？」

黄「はい。あ、式神とはですね・・・(説明中)と言う訳なんです。」

「なるほど、六花様の手助けする方々なのですな。」

緑「そんな感じですよ。私たちは白帝様から奥方様の護衛と話し相手に参りました。」

「お、奥方様だなんて!!確かに私は六花様の妻になるけど、そ、そんなまだ結婚もしていないのに!!で、でも奥方様!!ううう。はずかしいよ!!」と何やら悶絶している十六夜しばらくして落ち着いたのか、顔を赤くしながらも

「六花様から?一体どうして?」

黄「それは、主様は奥方様が心配だからですよ。」

「えっ!!」

緑「そうよね、寂しみ想いをさせないために私たちは参りました。大事にされていますね奥方様。」

「やつ!!そんな!!もう六花様つたら!!/エへへ!!/」とまたしても1人悶絶する十六夜 そんな十六夜を見る双鬼

緑「はあ〜愛されてるはね。白帝様は。」黄「うん。お互いを想いあつてるのが分かるよ。」と温かく見守る式神である

やがて落ち着いたのか十六夜は双鬼の方に向きなおる

緑「では奥方様。我らが主が奥方様の元に戻るまで私たちがしっかりとお守り申します。」と十六夜の前で膝をつき頭をたれる双鬼
「はい、よろしく願いますね。ええ〜と何て読んだらいいのかしら、どちらとも双鬼と言つ名前何よね？」

黄「そうだよ。僕たちは2体で1体だからね。呼ぶときは双鬼でいいよ。」

緑「個別で呼びたいときは、そうね・・・私の事は翡翠ひすいと呼んでください。」

黄「じゃ〜僕は・・・黄牙いっかつて呼んでください。」

「分かったわ。これからよろしくね”翡翠ちゃん”。」黄牙ちゃん”。」と呼んだ

翡翠「ちゃ、ちゃん。私にちゃん付け・・・（ガク）」黄牙「黄牙ちゃん・・・ウン！！いいかも！！」と片方は地面に膝をつきもう片方は喜んでいた

「ふふ。ありがとうございます。六花様、十六夜は今楽しいです！！」と最初の時に比べると笑顔になり愛する人に向かつてお礼を言つのであった。そんな十六夜を月が優しく見守っていた。

第24話（後書き）

と今回は十六夜メインで書いてみました。

ちよいとここから、十六夜メインを数話ほど書いてその後訓練の事を書いて行きたいと思います。その時は訓練から最後の週のことなのでよろしくです。

第25話(前書き)

十六夜メイン

第25話

〔朝 十六夜の部屋〕

着替えをすませこれから朝食に向かう十六夜

「これから、朝ご飯何だけど、貴方たちはどうするの?」

黄「僕たちは基本食べなくても平気だよ。」

翡翠「ええ。私たちが式神は主様である白帝様からの神気があれば人間のようには食べたり寝たりすることはには問題はないのよ。それに私たちは、奥方様の護衛なのでついて行きますよ。」

「そう、ありがとね。後、喋りずらかったら何時も通りの口調で構わないわよ。」

翡翠「うう。やっぱりダメだったか。(ガク)「黄」そっだよ。

慣れない事はなするもんじゃないって剛鬼が言ってたよ。」

翡翠「うう。うるさい!」

「まあまあ。落ち着いて翡翠ちゃん。さて食堂に行きましょうか。」

翡翠「分かったわよ。」黄「はい。」

と言つて双鬼は神気で姿を隠した

「わあ〜すごい。消えたわ!」

翡翠「まあ、神気を使つて姿を隠しただけだから実態はあるわよ。」

黄「うん、今は十六夜様の横に居る状態だよ。手を出して触ってみてよ。」

と言われたので手を左右に出してみると確かに何かがあるのを感じる十六夜

翡翠「後、私たちが姿を隠している時の会話はこの玉を持って頭の中でするわよ。」と言つて渡されたのは青い玉だった。

「わあ綺麗な玉ね。頭の中?」

黄「説明するより、実際にやってみると、”こんな感じかな？”
と十六夜の頭の中に声が聞こえてきた
「えっ！」

黄「玉を握って頭の中で思ったことを話す感じでやってみて”」

”こんな感じかしら？”

翡翠「ええ。大丈夫そうね。ちなみに玉が身体に触れてればいいからそんなに握らなくても大丈夫よ”」と言って翡翠が十六夜の手首に玉をブレスレットのように付けた。

「ありがとうございます、翡翠ちゃん。」

翡翠「気にしないで、それにこの玉は白帝様から十六夜様の贈り物なんだから。」

「六花様が、私に。」

黄「そうだよ、白帝様。頑張って作ったんだよ。」

具体的には、土の中から材料となる鉱物を探し出しそこに神気を流し込み固めて作ったのである

「ありがとうございます。六花様。」と少し涙を潤ませる十六夜

黄「お礼は、白帝様が帰って来てから言った方がいいよ。」

翡翠「そうよ、白帝様の胸に飛び込んで思いつきり抱き着いてお礼を言うのよ。それが白帝様にとって最高の贈り物何だから。」

「はい！！そうしますね。」ととびきりの笑顔で言う十六夜

翡翠「さて朝食が冷める前に食堂に行きましょうか。」と言って十六夜を促す翡翠

「ええ、さあ今日も頑張るわよ！！」と言って食堂に向かう十六夜
食堂に向かう途中の十六夜の顔は緩んでいたのは言うまでもない

（政務室）

朝議が終わり各自の自分の仕事をしている時のこと

「えへへ／／六花様／／」と仕事はしているのだが白帝の贈り物を見るたびに頬が緩む十六夜

そんな娘の様子が気になるのか傍に居た母である董苑に

董苑「十六夜。先程から何をニヤついているのですか。仕事が進みませんよ。」

「は、はい！！お母様！！」といそいそと筆を動かす十六夜。しかし、

「えへへ／＼／＼」と顔が緩む十六夜

董苑「まったく。六花君からの贈り物をもらって嬉しいのは分かるけど、今私たちがやっているのは、六花君が提案してくれた案件をどこまで実現出来るかの検討なのよ、ほら頑張つて作業をする。」

そう今、董苑と十六夜、数名の文官が白帝の案が何処まで実現できるかの検討中なのである

ちなみに案件を見せた時のみなへの反応はすごかった

董苑「す、すごいわ六花君。こんな方法があるなんて。」十六夜「わあ、学校ですか面白そうですね。」文1「こ、これは?!」文2「来た来た来たああ~~~~こんなやりがいのある案件、実現できればすごい事になるぞ!!」文3「私はこういうのを待っていたのよ!!お任せください白帝様!!必ずや実現出来るよう頑張ります!!」

とこんな事がありました

「分かっています。お母様、少しでも六花様の案件が出来るよう頑張ります!!」

董苑「ええ、頑張るのよ。それにしても六花君。帰ってきたら文官の仕事やらせてみようかしら?そうすれば、面白い案件が出るかもしれないし、何より六花君。仕事出来そうだし、よし!!帰つて来たら仕事をやらせてみましょう。」と決める董苑。この時白帝は何やら寒気がしたとか

双鬼「(白帝様。頑張ってください。)」と心から主を応援する式神である

く昼休み 十六夜の部屋く

何とか午前中の分の仕事を終わらせた十六夜は食後のお茶を飲んでいた。

「うん。午後の政務はあと少しで終わるから2時ぐらいには全部終わるかしら。」

と考えていると

翡翠「奥方様、午後は何処かに出掛けないの？」

黄「そうだよ、部屋の中じゃ息が詰まるよ。」

「うん。出掛ける用はないし買うモノもないかな、それに、六花様と約束したから。」

黄「約束？」

「ええ、帰って来たら一緒に城下に行く約束ノノノ」

翡翠「あゝハイハイ。ごちそう様、楽しみはとっておきたいわけね。」

黄「じゃあ何するの？」

「そうね。・・・じゃあ六花様の事を話してくれるかしら。」

黄「白帝様の？なんで？」

「貴方たちから見て六花様がどんな人が聞いてみたいのよ。私の知らない六花様がいるかもしれないしね。」

翡翠「いいわよ別に。私たちは白帝様の神気で作られたからある程度の白帝様の事なら分かるしね、でも、いくら奥方様でもお話しできないモノもあるので、そこは勘弁してね。」

「分かっています。」

黄「じゃあ政務が終わったらこの部屋でお話ししよう。」

「そうね。よし、頑張って仕事を終わらそうー!!」

とお茶を飲み終え午後の政務に向かう十六夜

く政務終了 十六夜の部屋く

翡翠「さて、白帝様の何が聞きたいの？」

「最初に、貴方たちから見た六花様の事が聞きたいわ。」

黄「いいよ、でも僕たちはまだ、そんなに白帝様とすごしたわけじゃないからうまく言えないかもしれないよ。」

「いいわ。私はどんな六花様も知っておきたいの。」

翡翠「じゃあ話すわよ。私たち式神は白帝様から生まれたわ。私たちから見て白帝様は優しい人よ。」

黄「うん！白帝様は僕たちの事を友として扱ってくれるしね！！」
「友として？」

翡翠「ええ、本来、私たち式神の役割は主に戦場で使われるわ。主に道具としてね。」

「道具？」

黄「そう、道具。式神を戦うための道具としか見ていないからね。あ、これは神界の神王様から聞いた話なんだけど。でも、白帝様は違った。僕たちの事を道具としてではなく友達として扱ってくれたんだ。」

翡翠「ええ。今でも覚えてるはあの時の白帝様の言葉を

” 我が作りし鬼たちよ、これからは友として我に力を貸してくださいだろうか、頼む” って本来主である人が私たちに頭を下げたのよ。その瞬間から私たちは白帝様の式神として誇りを持ったわ。」

黄「うん！！白帝様に一生付いて行くってみんなで決めただよ。」
「そう話す二体の顔は嬉しそうだった」

「そう、やはり六花様は優しい方なのね。」

翡翠「そうよ、白帝様はそんな所そこの男なんかには負けないくらいいい男なんだから。奥方様も白帝様を離すんじゃないわよ。」

「もちろんです。六花様の事は絶対に離しませんよ。支えるって決めただよから。ふふ」

黄「じゃあ、次は何を話そうか。」

「じゃあ、六花様の天界に居た様子を聞かせて。」

翡翠「いいわよ。白帝様には……」

とこうして夜まで話は続いたのだった。

第25話（後書き）

十六夜が聞いた。白帝が天界（人間界）いた説明はいつか番外編とかで書いていきたいと思います。
次で十六夜パートは終了かな？

第26話(前書き)

今回で十六夜メインの話は終わりかな・・・多分

第26話

さて白帝が山に訓練して間もなく1週間になるうとしていている時である。董家では朝、早くから侍女たちが忙しく走り回っていた。それもそのはず今日は、十六夜が白帝の許可をもらい白帝に会いに行ける日だからである。そのために、十六夜は約束通り弁当を作るため厨房に入り腕を振るっているのである。また、他の訓練兵である家族達もそれぞれ腕を振るっているのである。

（材料などは白帝が神王に頼んで董家に送ってもらった。その時は商人から白帝からのお届けモノとしてもらった。）

ちなみにそんなに厨房には入らないので中庭で炊き出しのような感じで作っている。

「えへへ／＼／＼／＼六花様喜んでくれるかな／＼／＼」と顔をにやけながら作る十六夜

翡翠「大丈夫よ。白帝様が奥方様の作るお弁当を食べて喜ばないはずはないわ。」

黄「そうだよ。白帝様はきっと喜んでくれるよ。」

「うん。そうだといいなあ。」

ここで翡翠が爆弾を投下

翡翠「そして、もちろん食べさせるときは、”アーン”って言いながら白帝様に食べさせるのよ。」

「（ッボン！！）」た、食べさせる？！／＼／＼」と顔を赤くする十六夜、声に出さなかったのは偉いと思う。しかし、慌てふためいてしまい変な行動をとってしまう形になってしまった。（両手をブンブン振り回している状態。刃物は持ってないんで心配ない）

黄「そうだよ。奥さんなんだし当たり前でしょう？」と云う黄牙。

実は黄牙は神王たちと過ごしていた時にたまたま神王たちと庭で

食事をする事になったのだが、その時に神王夫妻と魔王夫妻がお互いに”アーン”をしていたので、それは何かと黄牙が聞くと

神王夫人「コレは妻が夫にする当たり前の行動よ。」魔王夫人「そうね、愛し合う人同士でやる当たり前の行動ね。」と二人から”当たり前”と言われたのでその行動は当たり前と認識した黄牙。

ちなみにその二人の行動を見たそれぞれの娘たちは

天香「いいなあ〜。お母さん。私も白帝様に見てみたいよ。」

月読「あ、愛し合う者同士／＼／＼お母様、羨ましいです〜。」
とこんな反応をしていた。

翡翠「」なに、まさか、まだやったことがないの?!」と驚きの声をあげる

「(コク)／＼／＼」と静かに頷く十六夜

翡翠「」まあ。確かにそんなことはあまり意識しないからしょうがないか。だけど、口づけぐらいはしたことあるでしょう?」

「(ツボン)／＼／＼)く、口づけ／＼／＼そ、それもまだ・・・

」と赤くなり声がだんだん小さくなる十六夜

翡翠「」っはああ?!まだ?!いくら、許婚とはいえ口づけもしてないの?!」

「(コク)」

翡翠「」信じらんない?!じゃあ、その／＼まだそういうことも／＼／＼」と顔を赤くする翡翠。まあ彼女も女性なので気になるのも無理はないのかもしれない

「はい」／＼／＼と恥ずかしくも答える十六夜

翡翠「」はあ〜。一体何があったのよ、そういう機会は少なくともあつたでしょう。」そう。たしかにあつた、しかし、どこぞのバカどもによってその雰囲気壊されたのを十六夜が話した

式神の反応

翡翠「」そう。いい度胸してるじゃない!!」

黄「」うん!!十六夜様を悲しませる奴は許さない!!」

翡翠・黄「待つてるバカ共！！今から貴様らの根性叩きのめしてやる！！」とバカ共の一人、董轟の元に行く式神。

「待つて！！行かなくていいから！！それに、その後に六花様とその／＼かたちは違うけど一緒に寝ることは出来たからいいの／＼」と双鬼に待ったをかける十六夜

翡翠「ううう。納得いかないけど奥方様が言うなら仕方ないわね。」

黄「でも。今回だけだよ。次に白帝様と十六夜様の邪魔さしたら僕の雷撃で黒焦げにしてやるんだからね！！」

「ふふ。ありがとね、二人ともその時は遠慮なくやってね。」

翡翠・黄「もちろん！！」

翡翠「そうだわ！！奥方様、この機会に白帝様と口づけするのよ！！」

とまたしても爆弾投下

「わ、私が六花様と！！く、く、口づけを？！！／＼」

翡翠「そうよ。ただそういうのを意識してるのよ。そうすれば自然とするものなんだから。」とこれは、夫人から聞いた話である。

「そうね。頑張ってみます・・・／＼／＼」と赤くなりながらも答える十六夜

とそんなこんなやり取りをしている間に弁当は作り終わり後は出発するだけとなった。

出発前に城門前に集まっていると兵の家族だろうが十六夜に話してきた

女「董伯様。これから私たちはどうすればいいんですか？いくら、近くとはいえ、結構歩きますよね？」そう確かに近いとはいえ結構な距離があり男なら何でもいいが女性にとっては問題でもあった。

「大丈夫ですよ。六花様が迎えをよこしてくれるみたいですから。

「と安心させるように言う十六夜

女2「迎えですか？」と傍にいた女性も話に加わってきた。

「はい。もう間もなくだと思いますよ。」と門の方を見る十六夜
すると門から

白帝隊の男1「申し上げます！お迎えに上がりました！開門
をお願いします！！」と聞こえてきた

「ほらね。」と笑顔で言う十六夜

そして門が開きそこに居たのは馬にまたがる白帝と兵達だった

十六夜はすぐに白帝の元に走った。白帝も気付いて馬から降り十
六夜を待つ

十六夜「六花様！！」と勢いよく白帝の胸に飛び込んだ。

「十六夜！！」と抱きしめる白帝

十六夜「六花様。苦しいです。」と言うが顔は緩んでいる十六夜
「すまん。でもしばらくこうさせてくれ。」と少し力を抜くが

決して離そうとしない白帝

十六夜「はい／＼／＼／＼」とこちらも離す気はないらしい。

そんな二人の周りの反応

女1「ああ。若いつていいわねえ〜。」女2「そうね。あんな
こと、結婚した時しかやってもらってないわね。」女3「うう〜。
やっぱり白帝様カッコいい！！」女4「そうよね！！うちの旦那も
あれくらい良ければねえ〜。」

兵1「ちくしょう〜！！」兵2「隊長！！それは、恋人がいな
い俺たちに対する嫌がらせですか！！」兵3「見せつけてくれます
ね！！！！」

となどと言っている。

十六夜「あらそんなこと言っているのかしら。」と恋人がいない
兵達に向かって言った十六夜

兵2「どういう事ですか。董伯様??」

十六夜「実はね。貴方たちの事が気になっっている娘が居るんだけど。その娘たちに今回の件を話したら喜んで参加したわよ。」とそれを聞いた兵達

兵2「よっしゃああああああああああ〜〜〜」兵3「来た来た来た〜〜〜」兵1「俺達に春が来たんだああああああ〜〜〜」
といきなりテンションが上がった兵達

見れば後ろの方で顔を赤くしている娘たちが何人かいた

「さて、十六夜ともつとこうしていたのだが、それではせつかくの時間がもつたないのでそろそろ出発するか。」

十六夜「もう六花様／＼でも私たちは歩くのですか？」

「大事な人にあの距離を歩かせる気はないよ。山の途中にある野原までだ。それに、これは訓練の一環だからね。」

十六夜「訓練の一環？」

白帝「そうさ。全員！！指示通り行動せよ！！」と兵に向かって言う

兵達「了解！！」すると兵達は家族の元に行き自分の馬の所に連れてきた。

「よし！！全員騎乗！！」
と言うと兵達は自分の馬に妻・子供、恋人を乗せた（馬の大きさは平均的だが大人二人と子供一人なら問題ないという設定でお願いします。）

そして、十六夜も白帝の馬に寄せられた

十六夜「あのあの／＼／＼／＼六花様！！こ、コレは一体？！」と慌てふためく十六夜

「言つたろう、訓練だと。もしもの時の為に兵達の訓練と乗馬の訓練だよ。それから・・・」と十六夜の耳元で「オレが十六夜とこうしたいからかな。」

十六夜「（ツボン！！）／＼／＼／＼」と顔を赤くする十六夜
「嫌か？」

十六夜「い、いえ！！そんな／＼／＼う、嬉しいです／＼／＼六花

様／＼／＼」と顔を下に向けるも答える十六夜

「そうか、よかった。・・・よし！！全員出発！！ここ一週間で鍛えた成果どれほどか自分で実感せよ！！」

兵達「はっ！！」と馬を歩かせる兵達。馬に乗る妻や恋人も初めてなのか顔を赤くしながらもしつかりと夫や兵達に捕まっている。それを見た十六夜は

「（もしかして六花様。始めからこのために？）」と考えていた、実は白帝。部下たちから最近妻が冷たいだとか恋人が出来ないなどと言う相談をされていたのだが（なんか愚痴だなオイッ！！）、今回の訓練でこれ幸いと思い兵達に妻と恋人（気になる娘）を自分の馬に乗せ家族サーブスを考えていたのである。まあ、一応は成果があるのだがコレは自分たちの腕次第である。

とこんな感じで馬を進める白帝一行

（馬に乗る白帝と十六夜の会話）

「大丈夫か、十六夜。辛くはないか？」

十六夜「はい、大丈夫です。六花様。」

「そうか。」

十六夜「でも六花様。この馬もそうですけど、あの馬たちはどうやって手に入れたのですか？行き時はみなさん歩兵でしたよね？」

「ああ。こいつらは山に住んでいた馬たちでな訓練として馬をどうやって捕まえるかを教えようとしたんだが・・・」とここで口を閉じる白帝

十六夜「六花様？」

「捕まえたにはいいんだが、捕まえた馬が頭目らしくてな馬たちがオレに懐いてしまつてな、仕方ないから他の馬たちを兵達に与えて乗馬の訓練をしたんだよ。」

十六夜「そうだったんですか。流石六花様です！！一週間であそこまで兵達に乗馬の腕を挙げさせるなんて！！すごいです！！」

それを聞いた兵達

兵2「そりゃあ、アンだけ訓練してればな。」兵3「そうだよな、

麓から頂上まで駆け昇ったり。「兵4「頂上から麓まで駆け下りたりすれば自然と腕も上がるしな。」兵1「でもアレは驚いたよな。」兵2「ああ、まさか隊長が素手で馬と戦うとは思わなかったしな。」兵3「でもよ、戦う隊長もそうだけだよ、戦った馬もすごいと思うぞ。」兵4「ああ、なんだってあの通り普通の馬と違って4倍ぐらいはあるぞ。（世紀末覇者が乗る黒い馬と考えてください）」
兵1「それを無傷で勝った隊長もすごいぜ。」その時兵達の心は一つになり
「あの二人（白帝と馬）は最強だな！！！」とこんなことを言っていた。

十六夜「六花様。この馬に名前は付けたのですか？」

「ああ。こいつの名前は”白雪”と名付けた。」

十六夜「白雪。確かに雪のように真っ白ですね。いい名前だと思います！！！」

「そうか、良かったな白雪。」

白「ブルル」と答えるかのように身体を揺らした。どうやら気にしているようだ（ちなみに雌である）
と話をしている間に目的地である野原に着いたのである。

「全員！！降りて班ごとに行動せよ！！自分の役割を忘れるな！！いつも通りやれよ！！あまり班同士離れずに、周囲の確認をわすれるな！！ではしばらく休憩する、今日はゆっくりと家族達と楽しむめよでは、解散！！！」

兵達「了解！！！」という早速班同士となり家族と一緒に昼を食べる兵達、もちろんその時に周囲の状況と安全確認は忘れてはいない。そんな兵達を見ながら自分も十六夜の元に向かう白帝、愛する人が作った弁当を楽しむにしながら向かう白帝である。

なんか今回誰かの事を忘れてるような・・・まあいいか。どうせたいした奴じゃないし。

烈「オイッ！！なんで出さないんだよ！！俺だつて出た・・・（うるさい！！）ゴハッ！！」

翡翠「全く！！少しは空気読みなさいよね。」

黄「そうだよ！！今回は主様と奥方様の二人がメインなんだから邪魔者は退場だよ！！」

翡翠「ちなみに私たちは白帝様達の邪魔にならない様に隠れて護衛していたわ。」

どうもありがとう双鬼、悪は滅んだよ。

とこうしてお昼に入るのであった。

第26話（後書き）

新キャラ

白雪・・・白帝の愛馬。白帝と自分が気に入った人しか乗せない。気に入っているのは今のところ 十六夜である。

身体能力も高くどんなに走っても疲れなし、敵も単騎で敵を散らすほどの大胆さを持つまさに最強の馬である。

とこんな感じですが、今回で十六夜の話が終わるかなと思ったんですけどやっぱり終わらなかつたんで次回も書きます。
ではまた次回。

第27話（前書き）

ついに来た・・・この時が！！

第27話

さてただ今お昼。みなそれぞれ班ごとに行動し、それぞれの家族達と楽しく会話している中、白帝はと言うとそれぞれの隊の中央に十六夜と共にいた、そして傍には神気で姿を隠している双鬼が護衛として控えている。白雪は草を食べている。

「すまん、十六夜。一週間も訓練とはいえ離れてしまって。寂しい想いをさせてしまった。」と申し訳なさそうに言う白帝。そんな白帝に十六夜は白帝の手に自分の手を重ねて

十六夜「いいえ、六花様。確かに寂しかったですけど傍に六花様を送ってくれた双鬼が居ましたから私は楽しかったです。」と笑顔で言う十六夜。確かにその顔には寂しさは感じなかった。

「そうか、双鬼を送って良かったよ。双鬼。」と静かに呼ぶ白帝
双鬼「はっ！！此処に！！」と白帝と十六夜だけが見えるようにして現れた。

「十六夜の事、これからもよろしく頼むぞ。」

双鬼「はっ！！お任せください！！主様！！」と片膝をつき答えた
「そんなに畏まらなくていい、何時も通りで構わないぞ。」と優しく言う白帝

翡翠・黄「分かったわ。(はい。)」といつも通りに話す双鬼
十六夜「これからもよろしね。翡翠ちゃん、黄牙ちゃん。」

「翡翠？黄牙？」と初めて聞く名前に首を傾げる白帝

翡翠「白帝様。その名前は十六夜様に私たちをそう呼んで言うたからよ。」

黄「そうだよ。僕たち同じ双鬼だし一緒だと都合が悪いからね。」
「確かに。個別に呼ぶとき苦労しそうだしな。うん、いいと思うぞ。」

翡翠・黄「ありがとう！！白帝様！！」と嬉しそうに言う式神で

ある

翡翠「さあ白帝様。早く十六夜様の作った弁当を食べなくちゃ！」

黄「そうだよ！！白帝様！！十六夜様、頑張って作ったんだから食べなくちゃダメだよ！！」

「ああ、そうだな、いただくとしようか。十六夜。」

十六夜「はい！！六花様！！」と自分が作った弁当を出す十六夜。

十六夜「さあ！！六花様、たくさん食べてくださいね！！」と出てきたには5段ほどのお重箱だった。中身はどれも手が込んでおり輝いていた。それを見ただけでどれ程、気合が入っているのが伺える。

「おお！！これは、どれもつまそうだな！！早速食べようか。十六夜」と十六夜の弁当を褒める白帝

十六夜「ありがとうございます／＼／＼／＼六花様／＼」と赤くなりながらも答える十六夜

そして、ある程度おかずをとりそれを白帝に渡す十六夜

「では頂きます。」と答えおかずを口に運ぶ白帝。が！！そこで

十六夜「あ、あの！！六花様！！」と十六夜が待ったをかけた

「んっ、どうした十六夜？」と手を止める白帝

十六夜「えと、あの／＼／＼／＼／＼／＼（頑張るのよ私

！！コレは妻として当たり前前の事なんだから！！・・・よし！！行くのよ私！！）」と赤くなりながら考えて何かを決意して白帝からおかずを取り上げ自分の箸でおかずをとると白帝に向かつて

十六夜「六花様！！アーンしてください！！／＼／＼／＼」と赤くなりながらも掴んだおかずを白帝に向ける十六夜。そんな行動に驚いたのか白帝は動けずにいたが、やがて少し赤くなりながらも口を開いてそのままアーンをしておかずを食べる白帝

十六夜「どうですか六花様、おいしいですか。」と不安になりながらも聞いてくる十六夜。

そんな十六夜に白帝は

「ああ。うまいぞ、十六夜。もっと食べさせてくれ。」と微笑んで絶賛し要求するのである。

十六夜「はい!!!六花様!!!ア〜ンノノノ」と笑顔になりながら白帝に食べさせる十六夜。

完全に二人の世界に入ってしまった、おかげで双鬼が空気である。翡翠・黄「別にいいんだけどね!!!ねえ白雪、二人の邪魔だからあっちに行つてようか。」と白雪をさそう式神

白「ブルル(そうね、二人の世界を邪魔しちやだなよね。)」と了承し双鬼と共に離れるのである、どこぞのKYよりも空気が読める主想いの式神と馬である。

ここらで無粋かもしれないが兵と家族の会話を聞いてみよう
とある兵とその家族の会話)

夫「しょ、將軍!!!な、なんて羨ましい事を~~~~?!!お、俺だつてされた事ないので!!!」と二人の行動を見て絶叫する
妻「ちよつと、あなた!!!な、なんてこと言うのよ!!!恥ずかしいでしょうノノノノ」と夫を叱る妻実はこの妻、結婚したての頃は二人の行動に憧れていたのだが自分でそんな行為や周りの眼があったので恥ずかしくて出来なかつたのである。

しかし、自分の夫がそんな行為を望んでいたのが分かつたので今回限りなのか分からないが十六夜のように夫に向かってア〜ンとしたのである、その行為に夫は喜んでかぶりつき

夫「うん!!!うまいぞ!!!やつぱりお前の作った料理が一番だ!!!」と大絶賛するが、

子供「わあ〜」。ととさまとかかさま仲良しだね!!!」と子供に騒がれる夫婦

夫婦「ノノノノノ」と赤くはなるがそれが嬉しいと感じ心が温まるのであった。

くその2く

兵「隊長！ここはちゃんと期待に応えないとダメです！！」と
白帝を応援する兵

彼女「そうです！白帝様！董伯様の想いを受け取ってください
い！！」とこちらも応援している彼女

この二人、今回の事がきっかけで恋人同士になった二人である。
なので何かと応援しているのである。

くその3く

烈「は、離せ！！お前達！！い、妹が食われる！！は、早く離せ
！！」とどこぞのKYが騒いでいる

兵1「董穿様、いい加減諦めたらどうですか？」兵2「そうです
よ、將軍。大体將軍、うちの隊長に負けて姫さんの事、認めたじゃ
ないですか。」

烈「それでも！！割り切れないものがあるんだよ！！」と叫ぶ董穿
兵1の妻「太守様。あまり騒ぎますと、董伯様に口を訊いてもら
えませんよ。」

兵2の妻「そうですよ、太守様。現に今でも董伯様、董轟様にも
口を訊いてないんですからね。」
それを聞いた董穿

烈「そうだった！！あの父上の用にはなりたくない。」と白く染
まった父を思い出す。

妻1「それに見てください。あの董伯様の幸せそうな顔を」と聞
いて見てみると

確かに手に持った箸は震えてはいるが顔は真っ赤になりながらも
笑顔でおかずに白帝の口に運ぶ姿の十六夜は幸せそうだった。

妻2「あんな幸せそうな董伯様の邪魔をするつもりですか？邪魔
したら最後、董伯様より太守様にこの世の終わりが見ることになり
ますよ。」となにやら物騒なことを言っているがそれが否定できな
い董穿である

と考えており傍にあつた水を飲む十六夜、しかし、なぜか飲んだ後の十六夜は顔がさらに赤くなり動きがふらついているのである。近くのいた兵が中身を確認すると

兵「隊長！この中身、水じゃなくて、わずかですが酒の匂いがあります！！」と叫ぶ兵、ちなみになぜ酒があるかという tonight は酒が飲める日なので酒の入った袋を食料庫の近くに置いた兵が立ち去った後に別の兵がなぜかその袋を水の入った袋と勘違いしたのか間違つて持つて来てしまったのである。なぜ今まで気付かなかつたという水の入った瓶にその酒の入った袋が混ざつてしまい濃度が薄まったからである、酒飲みなら酔わないが免疫がない十六夜なら十分に酔えるのである。

そんな事よりも白帝は十六夜の目の前で

「十六夜、大丈夫か？」と声をかけてはいるが

十六夜「えへへ／＼／＼大丈夫ですよ十六夜様、十六夜は平気ですよ／＼／＼」と答えてはいるが

十六夜「なんか六花様がたくさんいますねえ／＼。どれが本物の六花様ですか？」

「（全然、大丈夫じゃないな）」と冷静に対処しようとする白帝
十六夜「えへ／＼／＼／＼／＼六花様／＼／＼／＼（ギユウ）」
と十六夜が白帝に抱き着いてきたが今回は酒が入っているためか少し強めで白帝が押し倒されてしまった。（座っていたのであまり力が入らなかつたため）ちなみに二人の状況は白帝が当然下であり十六夜が馬乗りの形で白帝の上に跨る形である（十六夜の格好は動きやすい着物なのだが今はある程度乱れてしまつている）、そんな二人の状況を見て周りは

妻たち「見ちゃいけません！！」と子供たちの眼を隠す妻たち、
しかし、自分たちは二人のこれからの動きに目を光らせていた。

兵達「なあ、俺達は逃げた方がいいんじゃないか？」「そうだな、二人の邪魔したら悪いしな。」
「ていうか、此処に居たら隊長に殺される。」「よし！！いくぞ、

お前達！！」

「「おおおおお〜〜〜」と妻たちを連れて離れる兵達。しかし、ここでKYが登場する

烈「六花〜〜〜〜！！！！貴様と言つ奴は〜〜〜〜！！！！

！！」と顔を鬼の形相にして迫ってくる董穿。だが、烈「(ドカツ！！)ゴハツ?!(バチバチ!!)ぎいやああああ〜〜〜〜?!

(ビュウン!!)グフツ?!」と白雪の蹄、黄牙の雷撃、翡翠の風撃によりあえなく撃沈

翡・黄・白「白帝様と十六夜様の邪魔はさせないわよ。(ぞ・ません)！！」と悪を滅ぼした二体と一匹

とそんな周りの反応はほおつておいてこちらの状況は

十六夜「えへへ〜、六花様」と可愛く尋ねる十六夜

「なんだ十六夜」とあくまで冷静に対処しようとするが十六夜の格好をみてあまり冷静じゃない白帝

十六夜「六花様・・・口づけしてイイですか」と爆弾発言そんな十六夜に白帝は

「ああ、いいぞ。」

とこちらもなんか爆弾発言?!「(いやなんかここまで来たらもうドン!と来いって感じでさあ。もう行くところまで行こうかなと思つてなあ。それに、よくよく考えたら俺達キスしたことないしさ、しそうになつたけど邪魔されちゃったし、だからやれる時にやった方がいいかなと思つてさ。)」分かりました。それはしょうがないですね、後あまり主人公だから突つ込まないでくださいね。

「(ああ、分かっているって。)」と話がずれてしまいました。では、続きをどうぞ。

十六夜「えへへ／／／六花様、大好きです／／／」と告白する十六夜

「ああ、オレも愛してるぞ十六夜。」とこちらも告白し互いに近づく唇

「十六夜」

十六夜「六花様」とお互い囁きながら近付いて行きやがて

「チュツ」と重なった

がすぐ唇は離れたがまたしてもお互い近付き

「ん・・・くちゅ・・・ん・・・はぁ・・・。」

「んぁ・・・んむ・・・ちゅ・・・ん・・・。」

と少し激しくむさぼりあう二人やがてお互いの唇が離れる（体制はそのまま）

十六夜「えへへ／＼／＼六花様、私六花様と口づけしちゃったんですね／＼／＼」ふらつき目をトロンとさせている十六夜が白帝の胸に倒れてきた

「嫌だったか？」と倒れてきた十六夜を受け止めて優しく髪を撫でる白帝、髪を撫でられて気持ちがいいのか目をウトウトさせながら十六夜が

十六夜「いえ、私は六花様と・・・口づけが出来て・・・嬉しかった・・・です・・・すう・・・」と訊きたかった言葉を残して嬉しそうに眠る十六夜

「ああ、オレも嬉しかったよ。十六夜。」とそんな十六夜を白帝は何時までも優しく抱きしめていた。

ちなみにその後は帰ってきた部下たちと共に城に帰り皆を送ってきた。その時に董豪と董穿の殺気がこもった視線は痛がったが、董苑と侍女たちの視線は優しくかった、ちなみに十六夜は董苑たちの方に渡したその時に董苑が「孫の顔は見れるかしら。」と言った来たが華麗にスルーする白帝だった。

第27話（後書き）

よし！！何とか書き上げた！！

第28話(前書き)

さて今回は時間を飛ばして訓練最終日です。

では・・・行きます!!

第28話

さて今日は半月の山籠もりの最終日である。皆最初に比べて体力面、精神面が鍛えられた。他にも今回の目的でもある部隊編成と部隊の技術向上が出来たので計画は順調である。

ちなみに護衛部隊には、護衛に対する心構えと護衛対象者の安全確認などを徹底的に鍛えた、主に守護の訓練である。

隠密部隊には、諜報活動の仕方、隠密同士の連絡の取り方、暗器の使い方、夜の活動などを教えた

工作部隊には、あらゆる武器と兵器の開発の知識と状況に応じた罨や敵陣に対する工作活動を教えた。工作部隊にはすこし隠密の訓練も受けてもらった。

あとそれぞれの部隊に共通しているのは、兵の一人一人が体術や集団戦を得意としていることだった。そんな所これらの将よりも腕は上である。兵に対しては10人ほどでかかってきても倒せるほどである。

さて説明はこれくらいにして本題に入ります。

「今日でこの山籠もりが終わるわけだが、その最終試験としてお前たちには班合同で模擬戦をもらう！」と兵達の前で説明する白帝

「内容はこうだ。それぞれの部隊は半分に分かれてその中から大将を決めてもらう。」

(護衛が200、隠密100、工作100の混合部隊でその中から大将を1人決める)

「そして大将を決めたら、大将にはこのおなじみの皿を付けてもらう。」と出してきたのはこの訓練で皆に馴染んだ皿である。さら

に白帝はなにやら巻物を出してきた

「皿の他にも今回はこの巻物を付ける。」

兵1「その巻物をどうするのですか？」

「うん。この巻物は大將以外が持つようにすること。今回の訓練は大將の皿が割られるか、この巻物が奪われた時点で終了とする。

ここまでで質問はあるか。」

兵2「はい！皿を割ったり巻物を奪った時の合図はどうすればいいですか。」

「その時は皆に今から渡すものを使って知らせてほしい。」と言つて渡したのは球だった。

「使い方はこの上のひもを引っ張って上に投げる、そうすれば音が出る様になつているから、その音が鳴ったら終了だ。」

兵2「はい！分かりました！」

「あと同時に音が鳴った場合は互に残った兵の数で決めるからそのつもりでな。」

兵達「はい！分かりました！」

「その他の説明として、大將は別に戦闘にしても構わないし陣に引っ込んでいても構わない、ただし！！巻物を持った奴は戦闘に参加すること。巻物の設定は自分たちの情報が書かれておりそれが敵に盗まれ、自分たちはなんとかその巻物を取り戻すという設定なのでよろしく。後、畏についてだが畏は今回も同様に落とし穴と危険がないもモノで頼む。武器はそれぞれ訓練で使う木刀などを使うこと、もちろん手首についてる奴は外すなよ。小皿についてもいつも通り割られた奴はこの広場で待機。他に質問は？」

烈「すまんが六花殿。俺達はどうすればいい、これはあくまで六花殿たちの訓練だから、これにも参加して構わないのか？」

「ええ、構いませんよ。烈刃殿には途中から第3部隊として参加してもらい誰これ構わずに皿を割ってもらいます。無論大將の皿や巻物を奪つても構いません。」

烈「分かった。」

「訊いての通りだ、烈刃殿達が参加する前に勝敗を決めないとやばい事になるぞ。質問が他にないならば半分に分かれてもらい1時間後に開始する、なお両陣営の拠点は自分たちで決めること、あと罠を仕掛けても構わない。説明は以上だ。それでは1時間後に銅鑼が鳴ったら開始する、解散!!」

兵達「了解!!」と各部隊ごとに分かれて混合部隊が出来上がった

（1時間後）

「では始めるか・・・はあ!!」（ゴオオオンンンン）と勢いよく銅鑼を鳴らす白帝

その合図と同時にあちこちから怒号やら悲鳴が聞こえてきた

「うんうん。早速始まったか。さて、みなどれ程実感できるかな、お前たちはまだ一人前じゃない、この訓練はまだ通過点だ早く一人前になってくれよな。」と呟きながら訓練を見守る白帝である。

第28話（後書き）

今回は短めですが、次回は細かく行きます・・・内容は短いかもしれないけど（不安）

第29話（前書き）

遅れて申し訳ないです。

最近、資格試験の勉強で書けませんでした。

どうでもいいことですが、最近、携帯をスマートフォンに変えました。

第29話

ただ今より訓練の様子を説明します。

両陣営とも拠点が決まりお互いに相手の大将と巻物を奪つたために奮闘中です。

今回の部隊の区別として山の東に陣を張ったのが東軍とし西に陣を張ったのを西軍とします。

（ちなみに白帝は互いに陣営の場所は神気を使って把握済みです。

）
東軍の戦法について説明します。

東軍はどうやら大将自ら出陣して敵を倒しているみたいですね、その大将の護衛として何人かついていますが護衛達も負けずに大将に近付かせまいと敵の小皿を割って行きます。巻物の方はどうやら少数精鋭の隠密部隊で構成された護衛の用ですね、持っているのは隠密部隊で今回の訓練で頭角を現した隠密部隊の上位に入る人みたいですね。護衛も少なく対象に比べて僅かに5人。（ちなみに大将には10人程です。側近5人、隠密として5人）

しかも東軍は罾をあちこちに仕掛けたようので西軍の兵が罾に掛かっています。どうやら東軍の工作部隊は数で攻めるみたいですね。

（味方が掛からないのは印をつけているからである）

他の護衛部隊と隠密部隊はそれぞれ混合して少数で班を作りかく乱と相手の拠点の搜索を行っているようです。

西軍についての説明

西軍は大将は拠点に護衛達（20人側近10人隠密10人）と留まるようです。

巻物の方は、こちらにも上位に入る少数の隠密部隊で構成されている。

他の部隊は拠点を中心として10人単位の班を作り配置している。(四方に囲むようにある程度に距離を開けながらの配置) 罫についてはあいている距離に罫を設置しており拠点を中心に罫を設置し、ところどころに妨害用だろうか柵も造ったようだ。

さらに、隠密部隊の班を大量に使っての相手の拠点搜索・死角からの不意打ちによる攻撃で相手を撃破する戦法のようなのだ。

全体的にみて東軍は攻めで西軍は守りという分かりやく別れたようだ。

白帝が両軍の状況が分かるのは神気を使っているからである。

「さて、状況は方は攻めで方は守りか。お互い数は未だ五分五分だが、全体的に攻めている東軍が大将と巻物を見つけるのが早いか守りで時間を稼ぐ西軍、どちらが勝つか？ 戦法としては東軍が勝つ要素はあるが大将の皿が割れたらその時点で終了になる不利な条件があるが。どうなるかな。」と静かに戦闘を見ている白帝

烈「六花殿。俺達は何時頃出番になるんだ？」と戦いたくてウズウズしているのか董穿が尋ねてきた。

「ああ。心配しなくても大丈夫ですよ。烈刃殿たちの隊はそれぞれ、どちらかの部隊の数が半分になった時が出番ですのでもししばらく待っていてください。」と董穿達の出番の説明をする白帝

烈「そうか、分かった。今の状況から東軍が勝っているように感じるんだがどうなんだ？」と小皿が割られた西軍の数を見て戦況の判断をする董穿

「そうですね。大体はあっていますが、守りの西軍は情報収集を基本としているようで攻めている感じはありませんが、西軍が相手拠点・巻物の所持者を見つけた時の対応で状況は大きく変わると思うのでまだ分かりませんね。」と董穿の答えを肯定するが戦況の行方を見守る白帝

烈「そうか。」とこちらも戦況を見守る董穿

1時間後、そろそろ西軍の数が半分になつてきたところで

「烈刃殿。そろそろ出番ですので準備をお願いします。」

烈「分かった。やっと出番か！腕が鳴るぜ！！」

「銅鑼を鳴らしたら出撃して構いませんので思う存分暴れてください。」

烈「ふ。言われるまでもない。・・・聞いたかお前達！！この半月の訓練でどこまで強くなつたか確かめるぞ！！」

兵達「オオオオオ~~~~」

と兵達と共に準備する董穿

そして、山全体に響かせるように

「これより！！董穿將軍が出撃する！！全員！！気を引き締めるよ！！・・・つはあ！！」

（ゴオオオオオンンン）

と銅鑼が鳴ると共に董穿達が出撃した。

「さてと」白帝が広場に集まっている兵を見渡して

「お前たちは、城に連絡を取ってくれ。」

兵1「はっ。城には何と？」

「夕方には帰る、と伝えてくれ。」

兵1「了解です。行くぞ！」と言って数人の兵と共に城に向かう
兵達

「残つた者は、帰る準備と食料をまとめといてくれ。」

兵達「了解です！！」と準備する兵達

と周りに誰もいない事を確認した白帝

「もういいぞ。卑弥呼に貂蟬。」と静かに呼ぶ白帝

卑「うむ。流石じゃな。」

貂「ほんとよね。今回はあの時より気配を消してただけだね。」
「まあ。確かに気配は薄かつたけどね。それで、何かあったのか

？」

卑「うむ、わしらはあの後、情報収集のため色々な場所で情報を集めていたんじゃないが。」

貂「集めた情報で気になるのが洛陽の事なのよ。」

「洛陽？あの皇帝が居る？」

貂「そうなのよ。あくまで噂なんだけどね。なんでも今度、大規模な宴があるらしいのよ。」

「宴？それが気になる情報か。」

卑「宴自体。洛陽の貴族どもは毎日のようにやっておるが、今の時期に宴をするのはおかしいとは思わぬか。」

「・・・！？ 確かに今の時期、悪魔の影響で賊どもの数がおかしいぐらいに増えている時期で何処の軍もその対応に追われているはず、なのにあえてこの時期に宴はおかしい。それに大規模な宴ならその金は何処から出てくる。今の皇帝はそんなに酷い奴じゃないはずだが。」

卑「そうじゃ。今の皇帝は”劉高”（りゅうこう）殿が務めている、決してこのような事はなさなぬ人じゃ。」

貂「おそらく、臣下の誰かが言ったと思うんだけど、劉高様を影から操っている者がいるかもしれないわね。」

「なるほど、分かった。宴が始まる前にその劉高殿に会ってみるか。もちろん洛陽の様子を見るけどな。」

卑「うむ。そうしてくれるとこちらも助かる。ワシらは洛陽に留まり情報を集める、洛陽についたら会いに来てくれ。」

貂「場所は大丈夫かしら？」

「問題ない。二人の気は覚えたから神気で探せられるからな。」
卑「うむ、分かった。宴は後2か月後だと思うがそれまで気を付けるのじゃぞ。」

「ああ。分かっている、そちらも気を付けるよ。」

卑「心得ておるわ。ではまた洛陽でな。」

貂「じゃあね〜。十六夜ちゃんによろしくね〜」

と言つて二人は姿を消した。

「洛陽か。神王様達に調べてもらつか。どうやら、羌族に続いて洛陽か問題が増えるな。」と呟く白帝の言葉を東軍の勝鬨が消していく。

「どうやら終わったか、勝つたのは東軍か。まあ、俺に出来るのは少しでもあいつらに生き残る術を教えるだけかな。さて、城に帰ったら数日休ませて、後は実践を積ませるか。」と呟きながら兵達の元に向かう白帝である。

〔洛陽のとある屋敷〕

その部屋は暗く明かりも何もない部屋である。その中とある中年の男が一人でいる

男「まだだ。まだ足りない。魂・・・人間の黒い魂が・・・」という男の後ろには何体もの死体があつた。

男「クックック。待っているオレをこんな目に合わせた礼は必ずしてもらつからな。神どもよ。」

と言つ男からは黒い邪気が溢れ出ていた。

第29話（後書き）

てなわけで、やっと投稿できました。

今回最後に出てきたのは目的の悪魔です。

ただ今、悪魔は人間の身体に憑依しており、その人間が死ぬまで離れることは出来ません。また、憑依する人間も野心や黒い感情を持った者しか憑依は出来ません。黒い魂とは悪党や憎悪にまみれて死んでいった負の人間達の魂です。

第30話

山籠もりが終わり帰ってきたのが夕方です。城の城門まで来ると董家と兵達の家族の何人かが出迎えてくれました。もちろんその中には、愛する十六夜の姿がありました。十六夜は白帝の姿が見えるなり走りだすと

十六夜「お帰りなさい！！六花様！！」と叫んで白帝の胸に飛び込む十六夜

「ただ今、十六夜。」と十六夜を優しく受け止め抱きしめる白帝、そんな二人を優しく見守る人たちが・・・（烈「コラアアア」）！！妹に触る（ドカツ！！）ゴフツ！！」（1人だけ白雪の蹴りに沈む者以外いた。（全く懲りないんだから、あのシスコンKYは）

董苑「2人とも。見せつけてくれるのはいいんだけどまずは、報告をお願いします。」

「そうですね、では報告します。白帝 六花並びに訓練兵800人、半月の山籠もりの訓練より無事に帰りました。これより3日間休ませた後、実践に移ります。」

董苑「はい。報告は分かりました。ではみなさん、今宵は囁かではありますが城の中庭に宴の準備がしてありますのでそちらに移動してください。あつ！でもその前にお風呂に入ってきてくださいね。」と聞いた兵達

兵達「ウオオオオオオオオオオ！！！」と歓喜した。

「いいんですか？董苑様。」

董苑「構いませんよ。みな最初に比べて顔つきが変わっています。それにこれは六花君に感謝を伝えたいのです。」

「感謝ですか？むしろこちらが感謝する方だと思うのですが。」

と困惑する白帝

董苑「六花君が出発前に渡してくれた案件で、少しではあるんだけど、実現出来そうなモノを試してみたんだけど、それがみんな期待以上の成果が出てね。その感謝よ。本当はこれ位じゃ足りないぐらいなんだけどね。」と少し困った顔をする董苑

「いえ十分すぎますよ。しかし、よく出来ましたね、あの書いてある説明で大丈夫でしたか。」

とそこに十六夜が話に加わり

十六夜「はい！大丈夫でしたよ。でも、長い目で見る案件もあったのでそれは六花様から説明をお願いしますね。」

「ああ。分かったよ、十六夜。」

轟「こらこら、お前達、六花殿を離しなさい。兵達が六花殿からの指示を待っているんだから。」と董轟が会話に入り込む。確かに振り向けば兵達が白帝の指示を待っていた。

「ふむ。ではこれより、中庭に移動し宴を始める。みな今日までの訓練ご苦労だった。先程も言ったが明日より3日間は休みにするので、しばらく会えなかった家族と触れ合えよ。だからと言ってだらけず休んでる最中も自主訓練は怠るなよ。ではまた訓練所でな。以上だ！！では・・・騒いで来い！！」と言つな否や中庭に駆け出す兵達

「すみません。騒がしい連中で。」と駆け出す兵を見て呆れる白帝

轟「いや、構わんよ。それにみな、いい面になったようだしな。」

「ありがとうございます。轟胡様。」

「気にする事はない。さあ六花殿、貴方も中庭で宴を楽しんでくだされ。十六夜、六花殿の傍に。」

と十六夜を促す董轟

「はい、お父様。さあ、行きましよう六花様。」と白帝の手を引く十六夜

「ああ、轟胡様、董苑様では後ほど。」と二人に礼をして宴に向

かう白帝と十六夜

白帝は宴の前に風呂に入った（十六夜は一緒ではありませんそんな話は何時か書いてみたいです）

（中庭）

そこでは、兵達が思い思いに酒を飲み語っていた。

そんな騒ぐ兵達から離れた場所で白帝と十六夜の二人は肩を寄せ合っていた。

十六夜「六花様／＼／＼／＼」と酒を注ぎながら訊いてくる十六夜
「ん、どうした。十六夜。」と酒を一口飲んで答える白帝

十六夜「えっと、あの／＼／＼／＼お礼が言うのが遅くなりましたがこの藍玉（あまぎく）ありがとうございます／＼／＼」と自分の手首についている玉を見せながら礼を言う十六夜。

「ああ、気に入ってくれてるみたいで安心したよ、本当は直接渡したかったんだけど、双鬼に贈らせることになってしまった。すまん。」

十六夜「いえ！そんな、私は六花様からの贈りものが受け取れて嬉しいです。」

「そうか、ありがとう十六夜」と言つて十六夜の肩を抱く白帝

余談だがこんなことがありました。

最初の週に白帝とキスした次の日の朝、十六夜が目を覚ますと白帝とキスしたことを思い出したのか顔を真っ赤にして悶えておりその日は政務が出来る状況じゃなかったわけである。

ちなみにその日の朝の出来事

（十六夜の部屋）

「（うううう／＼／＼／＼私ったらお酒が入っていたとはいえ六花様の事を押し倒して、く、く、口づけをしてしまうなんて／＼／＼／＼もう／＼／＼私のバカバカ／＼／＼あまつさえそのまま寝てしまうなんて／＼ううう／＼恥ずかしいよ／＼／＼／＼／＼）」と悶える十六夜

翡翠「やったわね！！十六夜様！！ついに白帝様と口づけが出来て！！」と嬉しそうに言う翡翠

「ううう。でも私、あの後寝ちゃったし六花様怒ってなかった？」
黄「大丈夫だと思っよ。白帝様十六夜様の寝顔を見ながら髪を撫でていたよ。」と幾ら離れていたとはいえ式神には見えているのである。

「（ボフン／＼／＼）寝顔を見られてた／＼／＼キュウウウウ／＼（ドサ）」と寝台にあまりの恥ずかしさに倒れこむ十六夜

翡翠「ありやりや。流石にそれを言われるとダメか。」

黄「そうだね。でも十六夜様、幸せそうに寝ているよ。」

翡翠「まあ。幾ら恥ずかしくても、好きな人にあんなことされれば幸せになるわよ。」

黄「そういうもん？」

翡翠「そういうものよ。」

とそんな朝の出来事

では戻りまして宴です。

十六夜「あの六花様。明日はどう過ごされるのですか？やはり、お部屋でお休みですか。」

「明日は、約束通り城下に行こうか。オレも城下はあまり知らないから案内してくれよ。十六夜」

十六夜「はい！！」と笑顔で答える十六夜

しばらく二人は語り合っていたのだが、二人の間に冷たい風が吹いてきた

十六夜「つくしゅん！」と風に当たったせいか十六夜が可愛らしくくしゃみをした。

「大丈夫か十六夜、少し冷えて来たな、コレを着ていなさい。」と渡されたのは白帝が着けている温かそうな獣の毛で作られた白いマントだった。

十六夜「ありがとうございます／＼／＼（えへへ、六花様の匂い

がする、とても暖かいなあ〜」と顔を緩める十六夜

「今宵は少し冷えるかな？」と風を感じて考える白帝

十六夜「そうですね、でしたらあまり外に居ては身体に悪いのでそろそろ中に入りましょうか。」

「そうだな、愛しい人に体調を崩されては困るからな。」と立ち上がり十六夜を抱え込む（お姫様抱っこ）白帝。

十六夜「キャツ?!り、六花様?!あ、あの!みんなが見てますからノノノ降ろしてくださいノノノ」と顔を赤くしながら抗議をしてくれるが白帝にはそれが可愛く見えた

「ダメだ。週一で会っていたとはいえ、こうして十六夜の温もりを感じる事が俺にとっての幸せなんだよ。それでも十六夜は嫌か。」と十六夜の顔を覗き込む白帝

そんな事を言われたなら

十六夜「（ボフンツノノノノ）わ、私もノノノこうして六花様の温もりを感じることが出来て幸せですノノノ」と赤くなりながらも答えてくれる十六夜

そんな二人を周りは優しく見守っていた。（ちなみにシスコンK

Yは白雪に踏まれて動けないでいた、GJ白雪!）

十六夜の部屋に前へ

「では十六夜、今夜はもう遅いから明日に備えて早く眠れよ。」と部屋の前で降ろす白帝。

十六夜「はい、六花様。おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ」

と互に挨拶を終え自分たちの部屋に戻るだけなのだが、そこで

十六夜「六花様!」と振り向く白帝の口に柔らかい感触

十六夜「えへへノノノ今回はお酒の力は借りてないですからね。ではおやすみなさい。」と言つな否や素早く自分の部屋に飛び込む十六夜。

片や不意打ちにキスされた白帝は

「十六夜、大胆になったな。」としばらくその場から動けないの
であった。

第31話（前書き）

今回は休日パートに入る一歩手前です。

第31話

（休日1日目の朝 中庭）

さて、ただ今誰も起きていない早朝、そんな時間に中庭で春風を構えて立つ白帝の姿があった。

「よし、やるか。」と春風を振るう白帝、その太刀筋は時には個人戦に、またある時は集団戦を意識した太刀筋である。その姿は舞を舞っているかのように美しく少し霧が残る早朝には幻想的に見えた。

「はああつ！」と最後に一振りして朝の鍛錬は終わり一息つき地面に座る白帝

「ふう〜。朝はここまでかな、少し休んだら部屋に戻るか。」と休んでいる白帝の傍を風が通る。その風に何かを感じ取ったのか白帝が

「ん？輝鬼と剛鬼か。」と式神を呼ぶ白帝、すると目の前に巨大な姿が現れた

輝「主様、この辺の土地の浄化が終わったので報告します。」と頭を垂れる輝鬼

「そうか、ご苦労だったな。それでどうだった？」

剛「はっ。わずかではありませんでしたが邪気がありました、ですがそれほど強いモノではなくすぐに浄化が出来ました。」とこちらも頭を垂れる剛鬼

「分かった。あいがとう。お前たちは神界に戻り神王様と魔王様に今回の報告と洛陽について書かれたこいつを渡してくれ。」と差し出す白帝

輝「はい。確かに受け取りました。」

「それから、近いうちに洛陽に行くかもしれないから、その時はお前達の力が必要になるから頼んだぞ。」

輝・剛「はいっ！お任せください、主様！」

「ではその時が来るまで神界で休んでいてくれ、神王様と魔王様によろしくと伝えてくれ。」

輝「分かりました、では。」と紙に戻る輝鬼

剛「あまり無理はしないでくれよ。」とこちらも紙に戻る剛鬼

「分かっているよ。」と紙を回収して呟く白帝

「さて。部屋に戻って食堂でも行くかな。っと、その前に身体を綺麗にしなきゃな。今日は十六夜と城下に行くからな。」と顔を緩めながら部屋に向かう白帝である。ちなみに白帝は神気で空気中の水分を人ひとり分が入る瓶に集めて五右衛門風呂風にして入った。場所は中庭の隅である、人は通りません。

「（この時代で風呂は贅沢だしな、そのうち城内に毎日風呂に入れるように何かしらするか。それから城下には銭湯のようなモノを建てるか。後で轟胡様と董苑様に相談するか。）」と女性である董苑が聞けば即答でOKをだすであろう案件を白帝は考えていた。

く十六夜の部屋く

一方でこちらは十六夜の部屋、その部屋の主は未だ寝台の上で安らかにお休み中なのだが、その顔が緩みきっているのである。何かいい夢でも見ているのだろうか？

ここからは、十六夜の夢の中です。では行ってみよう。

十六夜「六花様、今日は楽しかったです。」と白帝の部屋の寝台で白帝と一緒に座って並ぶ十六夜

「オレも楽しかったよ十六夜。また2人で行くこうな。」

十六夜「はい、六花様！」と嬉しそうに答える十六夜

「十六夜。少しジツとしていてくれ。」と懐から何かを取り出す

白帝

十六夜「六花様。それは？」

「今日、店の中を見ていたら十六夜に似合いそうな簪があったから買っておいた。」と言って見せてくれたのは決して派手ではなくかと言って地味でもない簪である。

十六夜「？でも六花様。簪と言っても何か象徴的になるような装飾はされていませんが。」

そう普通なら何かしらのモチーフになるようなモノが入っているのだが白帝が持つ簪は何もついていないただの棒にしか見えない。

「心配ないそれを今から作る。」そう言つと白帝は簪に神気を集めて簪の形を変えて行く、やがて作業が終わつたのか白帝が一息ついて簪を見せてくれた。そこには先程とは違い美しく銀色に輝く六つの花びらが装飾された簪があつた。

十六夜「わあゝ綺麗。この花は何ていう名前なのですか？」

「オレの名前の由来となつた六花と言つ名前だ。」

十六夜「六花様と同じ名前の花・・・えへへ、嬉しいです。」

「気に入ってくれて嬉しいよ、では早速髪に挿してみるか？」

十六夜「はい！お願いします、六花様！」と言われて簪を十六夜の髪に挿して鏡を見せる白帝

「うん！よく似合つているぞ。」

十六夜「えへへ／＼／＼ありがとうございます、六花様／＼／＼この簪、大事に使いますね！」

「ああ。そうしてくれ。」

十六夜「でも、私ばかり貰つてばかりで、なんだか六花様に悪いです。」とうつぶく十六夜

「そんな事はない。こうして十六夜が傍に居てくれるだけで、オレは十分なんだよ。」と十六夜の肩を抱き寄せる白帝

十六夜「六花様／＼／＼」と白帝を見つめる十六夜

「十六夜。」とこちらも十六夜を見つめる白帝、やがて、そんな二人の顔が近付いて行き

「十六夜、愛してる。」と囁く白帝

十六夜「はい、私もお慕いしております／＼／＼」と言葉を交わす二人の顔が重なり

十六夜「（パチ）」と目を覚ます十六夜、

十六夜「うう／＼／＼（私つたら朝からなんて夢を見てるのよ！！）これじゃ、今日六花様の顔がまともに見れないよ／＼／＼」と一人寝台の上で赤面して悶絶する十六夜の姿を式神の双鬼が温かく見守っていた。

第31話（後書き）

今回は一歩手前です。

次回からは休日パート頑張って書いていきます!!

番外編1（前書き）

今回は、何時ぞや話した（25話）の番外編を書いてみたいと思います。

本編にはちよつと係わるかな？

十六夜視点です。

番外編 1

十六夜の部屋 昼

今、十六夜の部屋では、白帝の式神である双鬼が十六夜に白帝がこの世界に来る前の不知火 京谷のころの話聞かせている。

翡「ええ」と。白帝様には、ご両親と弟君が居るのよ。」

「弟さん？」

黄「そうだよ。流星っていう名前なんだよ。」

「六花様の弟で流星君。・・・どんな子なの？」

翡「ううん。どんな子か。そうね・・・」と少し考える翡翠

黄「お兄ちゃんっ子で甘えん坊かな。」と先に言う黄牙

翡「そうね。私たちの記憶に残っている光景からいつも白帝様の後ろをついてきているしね。」と同意する翡翠

「へえ。やっぱり六花様に似てカッコいいの？」と今度は容姿を聞いてくる十六夜

翡「どうかしらね。その時はまだ小さかったし、どちらかと言うと可愛い方ね。」

黄「そんな弟君を白帝様は可愛がっていたよね。」

翡「そうね。基本、白帝様はブラコンだったわね。」

「ブラコン？」と聞かない言葉に反応する十六夜

翡「ブラコンって言うのは弟や兄が大好きって意味ね。」と簡単に説明する翡翠

黄「ちなみに、董穿様のように妹や姉の事が大好きな人の事をシスコンって言うんだよ。」とこちらも説明する黄牙

「なるほど。じゃあ、お兄様はシスコン？」

双鬼「もちろん！！何時まで経っても妹離れ出来ないシスコンK Y野郎よ（だよ）！！」と声をそろえて答える双鬼。（董穿・・・

哀れ也）

「ええ。否定はしないわ。お兄様は過保護すぎるのよね。」と実の妹からも肯定された董穿。(頑張れよ、董穿)

「弟さんの事は分かったから、今度はご両親様の事を教えて。」

翡「いいわよ。白帝様の父親は剣術の達人でボディーガードって言う護衛の仕事をしているわ。」

「ボディーガード？」

黄「主に偉い人の安全を確保したり危険人物から守ったりする仕事で常に身体を張ってるから命の危険がある仕事だよ。」

翡「ちなみに父親はある組織に狙われた護衛対象者を弾幕・・・

矢の雨から見事無傷で守り通したらしいわよ。しかも剣だけで、その剣は白帝様も使えるけどね。」と説明する翡翠

「す、すごいわね(汗)・・・お、お母様は何をされている方なの。」

黄「ううーんとね、基本は家で家事をしているんだけど、翠屋って言う喫茶店・・・お菓子屋でいいのかな？でお菓子を作ってるんだよ。すっごく美味しいよ!!!」

「そう、一度でいいから食べてみたいわね。」

翡「大丈夫よ。それなら白帝様も作れるから、今度白帝に頼んで作ってもらえば。」

「本当?!」と驚く十六夜

黄「そうだよ。白帝様、料理も出来るんだよ、今度作ってもらおうといいよ。」

「ええ!!!今度六花様に頼んでみるわね!!!」とはしゃぐ十六夜

翡「後はそうね、こんな事もあったわね・・・」

とそんな午後を十六夜と双鬼は過ごすのであった。

番外編 1 (後書き)

とまあこんな感じで番外編を書いてみました。

両親の仕事は何でもよかったんですが、こんな設定で行きたいと思いません。

本編なのですが城下でデートのネタが思いつきません！

なんか面白いネタがあればお願いします！あれば自分なりにアレンジして書いていきたいと思えますのでよろしくです！

では待っています！

第32話(前書き)

書きなおします。

第32話

（休日1日目）

ただ今朝の9時。その後、董家の人たちと朝食を済ませ今は十六夜の部屋まで迎えに行っている白帝

「（コンコン）十六夜、入るぞ。」とノックする白帝

十六夜「は、はい！六花様、どうぞ！」と何やら慌てて返事を返す十六夜

「では、失礼する。」と言つて入る白帝、中に入ると鏡の前で何やら悩んでいる十六夜の姿があつた

「どうかしたのか十六夜。」と気になる白帝

十六夜「あ、あの！六花様、お願いがあります／＼」

「何だ、十六夜。」と十六夜の傍による白帝

十六夜「ええ／＼とですね／＼髪を梳いてほしいんです／＼」
と恐る恐る櫛を差し出す十六夜

そんな愛しい人の願いを白帝が断るはずもなく

「ああ、いいぞ。」と櫛を受け取り十六夜の髪を優しく梳く白帝

「十六夜の髪は何時見ても綺麗だな。」と髪を梳きながら言う白帝

十六夜「あ、ありがとうございます／＼六花様／＼」と好きな人に褒められ赤くなる十六夜

「こんなものでいいか、十六夜。」と梳き終える白帝

十六夜「はい！六花様、ありがとうございます！」と笑顔で答える十六夜

「ところで十六夜、今日の予定は決まっているのか。」と今日の予定を確かめる白帝

十六夜「はい。まずは、日課である神木に祈りを捧げに森に行きます。その後に帰りながら城下の案内をして行きたいと思つています。」と説明する十六夜

「分かった。では白雪に乗っていくか、準備は出来ているか十六夜。」

十六夜「はい、来ています。」

「では、行くか。」と十六夜と共に部屋を出て馬小屋に向かう二人

馬小屋

兵「ん？白帝將軍に董伯様、何か用ですか？」と馬小屋の管理をしている兵が聞いてきた

「ああ。これから十六夜と共に神木のある森へ行くため白雪が必要でな、いいか。」と目的を話す白帝

兵「はい、分かりました。少し待ってください、連れてきますので。」とその場を離れる兵

しばらくすると兵が白雪を連れて戻ってきた

兵「お待たせしました、白帝將軍。」

「ありがとうございます。」と白雪の手綱を受け取る白帝、そのまま白雪は白帝に近付き甘えてくる

「よしよし」と白雪を撫でる白帝。そんな様子を見る十六夜は十六夜「（いいなあ）。私もあんな風に・・・」

「六花様」と白帝に駆け寄り白帝の胸に顔を埋めて甘えてくる十六夜、そんな十六夜を白帝は優しく抱きしめ髪を撫でる白帝

「どうした、十六夜。」

「えへへ／＼／＼ただ六花様とこうしていただいです。」と顔を上げる十六夜

「そうか、オレも十六夜とずっとこうしていたいな。」と十六夜の眼を見つめる白帝

「六花様／＼／＼と顔を赤く染め目を瞑る十六夜

「十六夜・・・」と十六夜に顔を近づける白帝。やがて二人の顔が重なり・・・

(ボンツ!!!)と顔を真っ赤にして慌てふためく十六夜

十六夜「(もう~~~~/~/私ったら何を考えているのよっ!!!これじゃあ今朝の夢と同じじゃない/~/~/)」と何やら思っている十六夜をその場に居る者達が見ていた

「十六夜、大丈夫か。」と十六夜の顔を覗き込む白帝

十六夜「はい!大丈夫です!!六花様/~/~/」と答える十六夜

「そうか、あまり無理はするなよ。気分がすぐれないならすぐに言っただぞ。」

十六夜「はい、分かりました。」

「では、行くか。白雪、頼むぞ。」

白雪「ヒヒン(任せなさい)」と鳴いて膝を折り白帝と十六夜を乗せる白雪

「では、行ってくる。森へは昼前には戻って来ていると思う、その後は城下の散策をする予定だから何かあれば知らせてくれ。」と兵に言う白帝

兵「分かりました。では気を付けて。」

「ああ。行くぞ十六夜、しっかりと捕まっているよ。」と白帝の腰に捕まる十六夜

「よし、行くぞ白雪。はああ!」と白雪が駆け出す

白雪を駆り森へと来た白帝たち(えっ、飛ばしたなって。失礼な!書くことがなかったんだい!!!多分)は目的地である神木がある開けた場所に居た

「此処に来るのも久しぶりだな。」とあたりを見渡す白帝

十六夜「そうですね。私は双鬼と共に毎日来ていますが、六花様とは訓練で来られませんでしたしね。」

「すまなかつたな、十六夜。これからはこうして十六夜と共にすごせると思うから。」と十六夜の肩を抱き寄せる白帝

十六夜「はい。六花様。」と白帝に寄りかかる十六夜。

そんな二人を姿を隠している双鬼と白雪が見ていた

翡翠「まったく幸せそうな顔しちゃってこっちが恥ずかしいじゃない。」

黄「でも、二人とも本当に幸せそうだよね。」

白雪「ブルル（そうですよね）」

翡翠「これであの方たち二人が加わったらどうなるのかしらね？」

黄「あの方たちについてもしかして・・・主様の奥方様である天香様と月読様のこと？」

翡翠「そうよ。天香様と月読様が加わったら、さらに甘い世界が出来るちゃうわよ。」と空を見上げる翡翠

黄「そうだよね。ただでさえ、あの二人であだもん。それに天香様と月読様も主様の事ほんとに好きだから心配だよね。」

翡翠・黄「主に恋人がいない董穿様と兵達が！！」（って他の人に心配?!）

翡翠「そうなのよ！十六夜様も美人だしそれに天香様と月読様も綺麗でしょう。」

黄「間違いなく、嫉妬に狂う人たちが出てくると思うんだよね。」

翡翠「でも、返って諦めるかしら白帝様には男として勝てないって思わせるにはちょうどいいかもね。」黄「そうなるかなあ〜？」

白雪「ヒヒン（不安です）」

とそんな会話を式神たちがしている中、十六夜は神木の前で祈りを捧げており白帝は十六夜の傍で護衛に付いていた、やがて祈りを終えた十六夜が立ち上がり白帝の元に向かうため歩き出すと、神木の前に扉が現れた。

十六夜「六花様、あれはもしかして。」と白帝の後ろに隠れる様になっている十六夜

「大丈夫だ、十六夜。多分出てくるのは・・・」と言葉を続けようとする白帝だがその前に扉が開き、中から出てきたのは白帝に妻

たちである

天「えへへ、久しぶりだね。白帝様！！十六夜ちゃん！！」と言
う天香と

月「お待ちせしました、白帝様、十六夜様。」と言う月読が現れた

そんな二人を白帝と十六夜は優しく迎え入れた。

第32話（後書き）

とこんな感じで書きなおしました。

天香と月読の登場は変わらずです。

あと以前に聞いた城下のデートですがまだまだ待ってます。

城下に関わらずいろんな甘い話のネタ待ってますのでよろしくです！

さらにこんな展開もいいんじゃないかなあ〜って言うものがあったらお願いします。自分なりに書いてみますんで。

遅くなっただうえに申し訳ありません！

第33話（前書き）

今回は天香と月読の話です。

第33話

（神界）

ここは神々が住まう神界の宮殿、その中の一室に白帝の妻である天香と魔界から魔王と共にやって来た月詠の姿がある。2人はただ今、数日後に白帝が居る人間界に降りるために準備中である。

天香「ねえ、月詠ちゃん」と荷造りをしながら月詠に話しかける月詠「？なんですか天香様。」と手を休めて聞き返す月詠

天香「荷造りが終わったら外でお茶にしない。」と月詠に振り返り話す天香

月詠「はい、いいですよ。私も、もう少しで終わりますから。」と了承する月詠

本来なら神族と魔族がこれほどまでに仲良くなることは少なくとも最近では考えられなかった。

天香と月詠がお互いに幼馴染もあるが、ここまで仲良くなる事が出来たのは、今、神界を総べている神王と魔界を総べている魔王のおかげでもある。それはこの幾星霜にもわたる長い神族と魔族間の戦いが終結させたのが大きいからだ。神王と魔王はお互いに協力し合い手を結んで行こうと誓いを立てたのである。

最初はうまくいかなかったが、最近では娘たちのおかげか、お互いに仲が良いからか両者のわだかまりが少しずつ薄れては来ており、今では神族が魔界に行ったり魔族が神界に遊びに来たりすることがあるらしい。それに最近では神族と魔族の混成部隊が組織されたらしい、これは前に起きた悪魔脱走の事件が関係しているらしいのであるが、最初は、今までの敵と組むことで何か問題が起これると思われたがその心配はなく皆打ち解けたらしい。

天香「よし！終わった！！」と荷造りが終わり寝台に倒れこむ天香
月詠「もう天香様ったら、此方も終わりました。さあ、お茶にしまし
ましょうか天香様。」と寝台に寝ている天香に手を差し出す月詠
天香「ありがとう。そうね、早く行きましようか、今日は天気が
いいし気持ちのいい風が吹いてるしね。」と月詠の手を取り寝台か
ら起きる天香はそのまま月詠と共に部屋を出る

二人がやって来たのは宮殿の庭にある四方が見渡せる休憩所によ
うな場所である。二人は椅子に座り侍女たちが用意してくれたお茶
を飲みながらこれからの話を始めた

天香「いよいよね。」とお茶を置き呷く天香

月詠「そうですね。もう少しで白帝様の元に行けますね。」と目
を細め愛しの人を想う月詠

天香「ええ。あつちに行ったら白帝様の為にやるべきことはたく
さんあるわよ。」

月詠「もちろんです。それに十六夜様の負担を減らさないといけ
ませんしね。」

天香「そうよね。十六夜ちゃん1人に白帝様を任せきりだし、向
こうに付いたら、これからは3人で白帝様を支えましようね。」と
月詠の手を重ねる天香

月詠「はい。」と力強く頷く月詠

そんな二人に近付いてくる二つの足音、それに気づいた二人は音
の方に顔を向けると自分たちの父達が来ていた

神「おお。やっぱりここに居たか、二人とも。」

魔「部屋に行ったら居なかったから、もしかして此処かなと思っ
てね。」

天香「どうかしたのお父さん？」

月詠「お父様もお揃いで、何かありましたか？」

と不思議に思う娘たち、そんな娘たちに父たちは

神「うん。実はお前たちを行かせるのが早くなるかもしれない。」

と神妙な顔つきで答える神王

天香「えっ?!まさか白帝様に何かあったの?!」と慌てる天香、月詠もどこか落ち着かない様子だ

月詠「お父様?」と魔王に向かつて小さく呟く月詠

魔「ああ、心配しなくても大丈夫だよ。六花君には何も無いから。」と安心させる魔王

月詠「では何があったのですか?」

魔「先程、六花君の式神である輝鬼と剛鬼が戻って来てね、報告書を貰ったんだけど。」

神「その内容が、土地に僅かながらに邪気があったり洛陽と言う都が怪しいと言う事が書かれた報告が書いてあったから二人を急ぎ送った方がいいと思ってな、いくら向こうに協力者が居てくれるとはいえ六花殿では対処が出来ないかもしれない。」

魔「そこで二人を送るついでに最近、組織された混成部隊を送ろうと思うだ。手駒は多い方がいいからね。」

月詠「でもお父様。あの部隊はまだ実践投入には時期が早すぎるのではないですか?」

天香「そうよね。まだ十分な連携も出来てないし返って危険な気がするのだけれど?」

と指摘する娘たち

神「心配ない、送るのは実践部隊ではなく情報収集に優れた人員だけだ。お前たちの言うとおりまだ実践には早い、まずは相手の情報を掴むのが目的だ。」と説明され納得する二人

天香「そういう事なら納得よ。で、出発は何時?」

神「うむ。部隊の準備が出来次第行ってもらうぞ。」

天香「分かったわ。じゃあ私たちは部屋に居るから準備が出来たら呼んでよね、お父さん。」

神「ああ、それまで部屋で休んでいなさい。多分夕方には準備が出来ると思うから。」

天香「分かったわ。行きましようか、月詠ちゃん」と月詠の手を

引く天香

月詠「ええ。ではお父様、神王様、失礼します。」と二人に頭を下げ天香と共に下がる月詠

二人が離れたことを確認して

神「では、俺達も準備を急がなくてわな。」

魔「そうだね。六花君と娘たちに任せっきりは良くないしね。僕たちが出来ることをしようか。」

神「おう！」と言って二人は準備のため足を進めた。

（転移の間）

神王が言った通り夕方には部隊の準備が整い皆整列して待っていた。混成部隊の人数は30人程度で少数ではあるが精鋭である。

神「ではこれより、お前たちを人間界に送る、最初にも言ったともうがお前たちの目的は戦闘では無くあくまで情報を掴むことにあつる、その事を忘れるなよ。尚部隊の指揮については天香と月詠に任せる。」と説明する神王

天香「分かつたわ。」月詠「承りました。」と了承する二人

神兵「あの神王様。」と神族の兵が手を上げる

神「なんだ。」

神兵「人間界に居る白帝様の指揮下ではないのですか？」

神「六花殿の指揮下でも構わないのだが、お前たちが良いなら六花殿の指揮下にするが、どうする？」と他の兵達を見渡して言う神王

神兵「オレは白帝様に指揮して貰いたい！」「ああ、あの魔界の五指に入るサタンを退かせたお方を見てみたい！」「オレは、戦ってみたいぜ！」

魔兵「神界と魔界を繋ぐ可能性を秘めた奴の指揮下に入るのも悪くはないか。」「オレは本当に姫様の相手にふさわしいか見極めるぞ！」「オレはご指導してもらいたな。」

と反対意見はなくすぐに受け入れられた。その様子を見た二人の王と娘は

神「コレは六花殿に感謝だな。」

魔「ええ、両者とも六花君の事を反対していない、むしろ賛成して協力しようとしている。コレはいい傾向ですね。」

神「ああ、神界と魔界、この二つが本当の意味で一つになるのは近いかもしれないな。」

天香「凄い。神族も魔族も白帝様に協力しようとしている。」

月詠「ええ。流石は私達がお慕いしている白帝様、こつも両者の心を掴むのですから驚きですね。」 天香「でも、だからって白帝様1人に背負わせないわよ。」

月詠「ええ。私達3人で白帝様を支えて行くんですから。頑張りましょうね。」

天香「もちろん。」と二人は固く手を握る

神「ではお前たちを送る。武運を祈る。」

天香「心配しないで、私は神王の娘よ。」

魔「気を付けて行くんだよ。僕たちも出来る限りのサポートはするから。」

月詠「はい。お父様。」

神「では行くぞ！」と言って光が辺りを包み込み、やがて光が収まると娘の姿と兵達の姿はなかった。

神「娘たちを頼んだぞ六花殿。」

魔「どうか神界と魔界の光になることを」

と呟く二人の言葉が部屋に残った

第33話（後書き）

とこんな感じですよ。

城下のデートを4人でデートにしていきたいと思います。

もちろん、1人1人にデートさせる予定もありますので何か希望があればお願いします。

第34話

神木の前で再会を喜ぶ4人。そこに天香と月詠と共に来た神族の1人が白帝に声をかけてきた。

神兵1「白帝様。」と静かに名を呼ばれ振り向く白帝

振り向けばそこには神族と魔族が膝をつき白帝を見ていた。

「貴殿らは何者か？」と質問する白帝、そこに天香と月詠が説明してくれた。

天「白帝様、彼らは混成部隊です。」

「混成部隊？」

月「はい。混成部隊とは、先の事件から発足された神族と魔族の部隊です。」

天「混成部隊の幾つかある中で、彼らは情報収集を専門とする部隊で、今回は敵の情報を集めるために私達と共に来たのです。」

「なるほどな、確かにオレが作るうとしている部隊にも情報専門の隊はあるが、機能するには、ほど遠いから正直、助かる。神王様と魔王様に今度お礼を言つとかないとな。」

月「それで、白帝様。彼らの指揮をお願いしてもよろしいでしょうか。」

「それは構わないが、いいのか？行き成り知らない奴に指揮をやらせて？」

天「それは大丈夫だと思いますよ。ねっ、みんな。」と兵に聞く天香

神兵「はい！」「我らは白帝様の指揮下に入りたいのです。」

魔兵「なのサタンに一撃を入れた者なら構わない。」「ああ。」

「分かった。では、貴殿らの指揮はオレが執らせてもらう。ちなみに一つ聞きたいのだが・・・」

と兵を見ながら言う

神兵1「はい、なんでしょうか？」

「なぜ、皆は会って間もないオレの指揮下に入ることを許したんだ？」

神兵1「それは、あのサタンに一撃を入れられ、なおかつ貴方の魔力が我ら神族・魔族を上回っているからです。」

「魔力は分かるが、サタンに一撃を加えたことが関係あるのか？」

魔兵「それは、ある。」「何せサタンは魔界の中で五指に入る最強クラス。」「戦いを好み、相手を必ず殺す。」「そのサタンに一撃を加え生き残る、我らがそなたの指揮下に入るのには十分な理由だ。」

と説明してくれた。

「なるほど、サタンはそれほどの敵だったのか。あの時は家族の仇を取るのに必死だったからな。」

とその時の事を思い出し空を見る白帝

「まあ、いいか。では早速だが頼みがある。」

神兵1「はっ！何でしょうか。」

「これより、半分の人数で洛陽に向かい現地の協力者と情報を集めてもらいたい。協力者の名前は卑弥呼に貂蝉と言う。場所は洛陽の此処だ。（以前二人から場所を聞いていた白帝）」と地図を渡す

「他の者達は洛陽行の者達と連絡役として此方に留まってもらいたい。」と説明する白帝

魔兵1「その洛陽行の人選は？」

「出来るなら手練れの者達と隠密に長けた者達が好ましい。今、洛陽は敵の拠点として考えているから何が起きるか分からない、それでも行ってくれる者達は居るか。」

神兵2「もちろんです！」

魔兵2「ふ。我ら魔族を舐めてもらっては困るな。」

魔兵3「左様。我ら魔族は闇の者、隠密行動は得意だ。」

神兵3「それに白帝様は俺たちの大将。大将に従うのは当然です。」

「ありがとう。では人選は任せる、人選と準備が出来次第、洛陽に向かつてくれ。」

神兵1「分かりました。他に指示は？」

「指示としては、情報を集める際に城内に潜入する者と城外からの情報を集める者に分かれてもらい城外の者達は潜入する者達のサポートを頼む。」

神兵1「承知しました。では我らは人選と準備がありますので此処で失礼します。決まりましたら、そのまま洛陽に向かいます。他の者達は白帝様の元に行かせますので。では天香様・月詠様、失礼します。」と言って神族と魔族は消えた。

「ああ。頼んだぞ。」と神族と魔族が居た場所を見ながら呟く白帝、そんな白帝の背中から

天「白帝様。洛陽の事はあの者達に任せて大丈夫ですよ。」

月「そうですね、何も心配はいりません。」

と天香と月詠が話しかけてきた。

「天香、月詠。」と振り返る白帝

十六夜「そうですね、六花様。それに今は休暇中ですよ。あまり考えすぎると休めませんよ。」

「そうだな、十六夜。よし！じゃあ、城に帰るか。」と3人に近づく白帝

十六夜「そうですね。今度は城下の案内がありますからね。」

天「あっ！それなら私も案内してほしいな。」

月「そうですね。これから此方で過ごす訳ですから、案内してもらった方がいいですね。」

十六夜「ええ、構いませんよ。それに天香様と月詠様とも、もっとお話ししたいですね。」

と女の子トークをしている中で白帝は

「(なぜだろう、何か悲しいな。)」と白帝の心はブルーだった。そんな白帝の心情を察したのか白雪と双鬼が近付いてきて

白雪「ブルル(大丈夫ですか、ご主人。)」とじゃれて来たり

黄「白帝様、元気出して。」と黄牙には頭を撫でられ

翡「まっ。女の子の会話には男が入れるものじゃありませんよ。」と翡翠からは止めの一言を貰う白帝だった

「(これも嬉しんだか悲しんだか、分からんな。)」とさらにブルーになる白帝

そんな白帝の様子も気にした様子もなく3人娘は楽しく城下には何があるのか、可愛いモノはあるのかとか女の子特有の会話をしていた、そんな光景を見ながら白帝は

「(まあいいか、愛する者達があんなに幸せそうな顔をしているんだから。)」と3人の顔を見ながら思う白帝である

第34話（後書き）

書いてほしいイベントはありませんか？

何時でも待ってますよ。

次でやっと4人デートが書けるかな？

第35話（前書き）

とらあえず城下のデータ書いていきます。

第35話

その後、森から白雪に乗り城下に戻った白帝たち。彼らはそのまま十六夜に城下の案内をもらうことにした。(十六夜、天香、月詠は白雪に乗り、白帝は徒歩で白雪の手綱を引きながら城下を移動中である)

天「ごめんね、十六夜ちゃん。」と急に天香が十六夜に誤ってきた

十六夜「何がですか。天香様。」

天「本当は白帝様と2人で逢引きする予定だったんでしょ？」

十六夜「そつ、それは！そうなんですけど／＼、でつ、でも！こうして御二人とお話しできましたし、何より私たちは六花様の妻ですよ！そんな遠慮なんてしなくてもいいんですよ。」

天「ありがとうございます。十六夜ちゃん。」

十六夜「それに、天香様と月詠様の方が六花様との時間を多く過ごしたいのではないですか。」

月「あら。それはどうしてですか。」

十六夜「だって、私ばかり六花様と今まで過ごしてきたわけですから／＼その・・・二人にも六花様と過ごしてもらいたいわけですよ。」

月「ふふ、十六夜様も私たちの事は言えませんか。」

十六夜「えつ。」

月「私達は白帝様の妻なんですから、お互いに遠慮はいけませんよ。」

天「そつだよ、十六夜ちゃん。お互いに遠慮なんかしてちゃあ仲良くなんかできないよ。せつかく3人で白帝様を支えて行くんだから。それに、こうやって4人でデートも悪くないしね。」

十六夜「デート？」

天「ああ、デートって言うは逢引きの意味ね。」と説明する

月「そうですね、こうして4人で過ごすのもいいモノですしね。」
と女の子の会話を聞いていると白帝が

「なあ、天香に月詠。」と振り返り二人を見上げる白帝

天「はい、何ですか白帝様？」

月「何かありましたか？」

「いや、大したことじゃないんだが、白帝ではなく六花と呼んでもらいたいんだが、自分の妻から白帝と呼ばれるのはなんか他人行儀の気がしてならないんだよ。後、いつも通りの口調で構わないから敬語はなくてもいいから話してくれて構わない。」と二人に提案する白帝

天「でも白帝S・・・分かったわよ。じゃあこれからは十六夜ちゃんとかブルけど”六花様”って呼ばせてもらうからね／／／」

月「私は元よりこの口調なので直しようがありませんが、白帝様の事は皆様と同じになります」六花様”と呼ばせて頂きますね／／／」

「ああ。それで構わないよ。」と二人に笑みをこぼす白帝

天「うう／／／何か私達だけ不公平だから・・・そうだ！十六夜ちゃんも私達の事は様付やなくて読んでよ！」となぜか十六夜に火の粉が飛んだ

十六夜「ええ／。なぜ私なんですか！？」

天「だって、十六夜ちゃん、私たちのこと様付で呼ぶんだもん。

神王とか魔王の娘は気にしないでって言ったのに、だから十六夜ちゃんも私たちの事は様付じゃなく呼んで！」となんか無茶苦茶言っている天香

月「そうですね。私は元より様付で相手呼びますから仕方ありませんが、出来れば十六夜様には私たちの事を呼び捨てかあるいは”さん”付でもいいので呼んでもらいたいですね。」

十六夜「うう／。六花様／助けてくださいよ／。」と白帝に助けを求め

「いいじゃないか十六夜。二人の事をさん付けでもいいから呼ん

でやれば、それにオレとしてはこうして3人が仲良くしてくれるのは嬉しいんだよ。」と微笑みながら十六夜をなだめる白帝

十六夜「うう〜。分かりました、では天香さんと月詠さんとお呼びしますね。」

天「ええ。構わないわよ。」月「はい。」

と話が終わり城下をある程度回ったところで時間はお昼を回った
1時頃

「さて、そろそろお昼にするか。」と3人に確認する白帝

十六夜「そうですね。でしたらこの先に美味しいお店がありますからそこに行きましょようか。」

天「私は構わないわよ。」

月「ええ。どんな料理か楽しみです。」

「オレも楽しみだ。よし！その店に行くか。」と言って白雪の手綱を引きながら移動する白帝たちである

第35話（後書き）

申し訳ないです。変な所で区切ってしまった。

第36話

十六夜が言う人気の店に来た白帝一行、店に入れば店の人が現れて席に案内してくれた。店内はお昼を過ぎても込み合っており繁盛しているようだった。(白雪は店の前で店員が出してくれた草を食べています)

「さて、何にするかな。」

十六夜「そうですね。天香さんと月詠さんは何が良いですか？」と二人に聞く十六夜

天「そうですね。私は、中華料理はあまり食べたことがないから迷うわね。」とメニニューを見て答える天

月「私は、久しぶりに棒棒鶏でも食べてみましょうか。」

「二人は中華料理を食べたことがあるのか？」と二人にお会話から推測する白帝

天「ええ、あるわよ。」

月「人間界の料理は神界と魔界にも人気があるんですよ。ちなみに私は和食が好きですね。」

天「私は洋食派ね。」

「神界と魔界の食のイメージが今崩れた気がするよ。」と少し肩を落とす白帝

十六夜「あの、中華料理って何ですか？」

「ああ、中華料理って言うのは俺達の国で言うところの国の料理の総称かな。」と説明する白帝

十六夜「なるほど。では和食とは？」

月「和食は六花様が住んでいた国の料理の総称ですね。」

天「ちなみに洋食って言うのは六花様の国とは違う国の文化、西洋って言う文化から来たことから洋食って言うのよ。」

十六夜「なるほど、そういう事ですか。」

「分かったなら早いとご注文しようか。ちなみにオレは麻婆豆腐と白飯でいいかな。」

十六夜「では私は白飯とエビチリにしましょう。」

天「ううん。私は白飯と青椒牛肉にしようかな。」とそれぞれが決まったところで注文する。(誰一人としてラーメンを頼んでいないのは悲しい事だが。)

十六夜「そう言えば六花様。」と料理が来るまで会話をする白帝たち

「何だ十六夜。」とお茶を飲みながら聞く白帝

十六夜「以前、翡翠ちゃんと黄牙ちゃんから聞いたのですが。六花様はお菓子が作れるそうですね。」

「ああ、作れるぞ。腕は母に劣るけどな。それがどうかしたのか？」

十六夜「いえ・・・ただ六花様が作ったお菓子を食べてみたいなあくなんて。ダメですか？」

そんな可愛らしいお願いを白帝が否と言うはずもなく

「それくらいどうと言うことはない。十六夜が食べたければいくらでも作ってやるよ。もちろん天香と月詠の分もな。」

十六夜「あ、ありがとうございます！六花様！」

天「へえ」。六花様ってお菓子作れるのね。」

月「それは楽しみですね。作り方は母君様から？」

「ああ、母の仕事が喫茶店の菓子職人でな、よく家で新作のお菓子を作っているのを見かけてな、それで母の手伝いがてらしていたら何時の間にか作れるようになっていたんだよ。」とお茶を見ながらその時の事を思い出す白帝

月「すみません六花様！ご家族の事を思い出させてしまって！」

と謝る月詠

「気にするな、それにオレの家族は生きているから問題はない。」と月詠の髪を撫でる白帝

月「（カアアア）／＼／＼はい、六花様／＼」と髪を撫でられたのが恥ずかしかったのか顔を下に向ける月詠

十六夜・天香「むうっ」とそれを見て少しやきもちを焼く二人

「それに十六夜にも言ったことだが、こうして新しい家族が出来たんだから寂しくはないよ。」

そう言われ3人は赤くなりながらも嬉しそうに微笑んだ

会話をしているうちに頼んだ料理が来たようなので会話を中断してお昼にする白帝たち

「では頂くとしようか、頂きます。」

3人「頂きます」と手を合わせ料理に手を伸ばす

「おお、久しぶりの麻婆だな、うまい！」と舌を唸らせる白帝

十六夜「喜んでいただけ嬉しいです。（パク）ううん。やっぱりこの店の料理はおいしいですね。」

天「ホントね。流石は人気料理店。」

月「ええ。毎日でも通いたいですね。」

とそれぞれが絶賛する。

そんな中で天香が白帝の前に箸でつまんだ自分のおかずを持ってきて

天「はい。六花様、アーン。」と言ってきた

それを見た十六夜と月詠

十六夜・月詠「な？！天香さん（様）！！何をしているんですか？！」と天香に怒鳴る二人

天「何って見ての通りのアーンだけど。」と説明する天香

十六夜「そ、そんなうらやま・・・人前でやることではないですよー！」

月「そうですよ！私も六花様にしようとかんが・・・とにかくやめてください！」

二人とも本音がダダ漏れである。

天「嫌よ！それに十六夜ちゃん。人の事言えないんじゃないかし

ら。」と箸を戻し十六夜に微笑みかける天香

十六夜「な、何がですか。」

天「十六夜ちゃんもやったでしょう。お弁当作って六花様の部隊の人前でアーンって。」

十六夜「（ボフン）／＼／＼、それは・・・。」とその事を思い出す十六夜

天「それに、アーンだけじゃく／＼／＼あんなことも／＼／＼六花様を押しなお・・・。」

十六夜「ワアーワアー。い、言わないでください／＼／＼」とその時に起こったことを思い出し慌てる十六夜

月「十六夜様?!その事、詳しく聞かせてください!!」

「3人とも落ち着け」と3人を落ち着かせようとするが

3人「六花様は黙っててください!!」

「はい・・・。」と逆に黙らされてしまった。（やはり旦那さんは奥さんには勝てないんだろうか?）

「すみません店内の方々。」と周りに頭を下げる白帝

客「何、気にすんなよ若いの。」「そうだぞ。この店は賑やかな方がいいんだからな、喧嘩は勘弁だが痴話喧嘩なら構わないぞ。」

「そうだ、そうだ。それにあんな美人さん3人も連れ回しやがって!少しは苦勞しやがれ!」

と気になることも言っていたが客は許してくれた

店主「モノを壊さなければいいよ。」

と店主も心が広いのか許してくれた

「ありがとうございます。みなさん。」

そんな白帝の様子を気にした様子もなく3人の争いは続く

第37話

お昼を済ませ後は城に帰って天香と月詠の事を董家の方々に説明するだけなので、今は城に続く店などを見ながら帰っている白帝一行。その店の中で一行が居るのは装飾品や雑貨・小物等を取り扱っている店である。

店内はそれほど広くはなく落ち着いた感じの店で、主に女性客が多くいる感じである。

「何か、こんな店。家の近くにあつたきがするなあ。」と店内を見渡して思う白帝である。

そんな事を気にせず十六夜たちは、店内の品を見ている

天「うわあ。どれも皆綺麗ねえ。」と品を見ながら言う天香
月「そうですね。どれもみな手が込んでありますねえ。」と品をとって言う月詠

十六夜「あつ！コレなんか可愛いですね！」と絶賛する十六夜

そんな3人を優しく見つめる白帝

「やはり女性は皆、宝石とかが好きなんだろうか。うん、ここはやはり旦那として皆に買ってやるべきだろうか・・・」と白帝が悩んでいると、店の奥から店主らしき女性の人が見れた

店主「いらっしやいませ。何か気に入ったモノはありましたかあ。」と何ともほのぼのした人だった

天「そうね、どれも綺麗で迷っちゃってるのよねえ。」

月「どの品も心がこもってる品なので迷ってしまいます」と言う二人（お金は此方に来る前に親たちからある程度は渡されたのである。）

店主「あら、そう言ってくださると嬉しいですね。」

十六夜「この店は女の子に人気があるって城の侍女たちが言っていました。」

天「そうね。確かに店内を見る限り女の子が多いわね。」

月「それに、落ち着いた感じですし女性が喜ぶようなこしらえですよね。」

店主「この店は女性を中心に考えて品を作ったり店内の配置を考えましたから。」

「（それを聞くとますます、現代の店だな。）」と思う白帝

店主「それでお客さん達は何か気に入ったモノはありますか。」

後この店は、殿方が女性に贈り物をするために買いに来られる殿方もいるんですよ。」と店主は白帝を見る

「なるほどな、オレも3人に何か贈ろうと思っていたところだから、気に入ったモノがあれば買っぞ。」と3人に言う白帝

天「ううん・・・よし！六花様、私に似合うモノを選んでください！」と少し考えて白帝に向き直り白帝にお願いする天香

「オレが選んでいいのか？」

天「はい！」

月「あっ、あの六花様／＼／＼それでしたら私にも選んでください／＼／＼と顔を赤くしてソワソワする月詠

「十六夜もオレが選んでいいのか？」と十六夜に確認する白帝

十六夜「えっ、でも私は六花様からこの藍玉を・・・」と手首にまかれたアクセサリーを見せる十六夜

「気に入るな、それにコレはオレが贈りたいから贈るんだよ。」

十六夜「はい！ではお願いします、六花様！」

「任せる、妻たちに似合うモノを買ってやる。」と意気込む白帝

十六夜「何度聞いても照れちゃいます／＼／＼えへ／＼／＼」

天「改めて六花様から聞くと恥ずかしいわね／＼／＼」

月「妻・・・／＼／＼はう／＼六花様／＼／＼」

とそれぞれ赤くなる3人

店主「（コレは・・・てっきり恋人だと思っていたんですけどねえ）。まさか奥さんとは思いませんでしたねえ）」と内心驚いている店主

そんな事を気にせず店内に並んでいる品を眺めながら何にするか悩んでいる白帝

「(さて、どれにするかな。まず十六夜には簪で・・・天香にはピアスかな・・・月詠には指輪にするか・・・)」と考える白帝
まずは、十六夜の贈り物から選ぶ白帝

「(となると後はデザインと色か・・・十六夜の髪は黒髪だから明るいのがいいかな、デザインは派手すぎず落ち着いた感じがいいだろうか?)」と考えて簪が並んでいるのを見ながら考える

「(十六夜には・・・んっ。)」と白帝の眼の止まったのは美しく銀色に輝く六つの花びらが装飾された簪であった。

「(コレは・・・六つの花びら・・・オレと同じ六花か・・・デザインもシンプルだし・・・よし!十六夜のはこれにしよう。)」と簪を決め十六夜の髪に挿す白帝

「どうだ十六夜。」と鏡を見せる白帝

十六夜「あつ、(コレ夢で見たのと同じ・・・)」

「十六夜・・・もしかして気に入らなかったか。」と聞き返す白帝

十六夜「いつ、いえ!とっても嬉しいです六花様ノノ/ノ/ありがとうございませすノノ/」

「良かった。よし!次は天香だ!」と次は天香の贈り物を決めに行く白帝

「(天香にはピアスだが玉の色は真紅にするか明るいし・・・デザインは・・・羽の形のデザインで・・・よし!これにしよう!)」と目的のモノを決め天香に見せる

「コレなんかどうだ天香。」と対のピアスの一つを渡す白帝

天「?ええ。私の好みだわ、なぜ片割れだけなの?」と首を傾げる天香

「それはこうする為だ。」と言って片方のピアスを自分の耳に付ける白帝、そしてもう片方を天香の耳に付ける

「こうすればお互い離れていても想い合えるだろう。」

天「ノノノノ(もう)なんて六花様はこんな恥ずかしい事が出来

るのよ！）・・・ありがとね・・・六花様／＼」と白帝の顔を直視できずチラチラと白帝の顔を見ながら礼を言う天香

そんなやり取りを見た二人

十六夜・月詠「（むうっ）」とちよつとご立腹な二人

月「六花様！今度は私の番ですよ。お願いしますね。」と何か迫力ある月詠

「っう！分かったよ。（恐いぞ！月詠！）」

「（月詠は指輪で・・・色は・・・金色で・・・デザインは・・・んっ、この蝶なんかいいかな。）」と月詠に向き直り

「月詠、これなんかどうだ？」と指輪を見せる白帝

天・月「っ！ゆ、指輪ですって（っか）！？」と二人は驚き

十六夜「？」と驚く二人を見て首を傾げる十六夜

「ああ、勘違いするなよ。それはそれで渡すから、その時を楽しみにしているように。」と何に驚いたのかに納得して先を読んで答えた白帝

天・月「／＼／＼」白帝に言われ顔を赤くする二人

「それで月詠、どうだ？」と改めて聞く白帝

月「はい／＼／＼とっても可愛いと思います、六花様／＼」と顔を赤くしながらも答える白帝

「よし！これで決まったな。と言う訳で会計をお願いしますね。」

と店主である女性に言う白帝

店主「はい、お買い上げ、ありがとございます。」とそろばんを見せる店主

「いいのか？何やら品と値段があっていない気がするのだが？」

店主「構いませんよ、コレは私からあなた方にこれからの祝福としての祝いです。」

「そういう事なら厚意に甘えるでしょうか。」と言って会計を済ます白帝

店主「これからもどうぞ、鼻屑に。」と言って一行を見送る店主

こうして城に戻る白帝一行

ちなみに十六夜が「なぜ六花様が指輪を選んだ時に驚いたのですか」と二人に聞いたところ、返ってきた答えを聞いて顔を赤くしたそうだ

「今度は結婚指輪か・・・」と悩んでいる白帝である

第37話（後書き）

久しぶりの投稿だぜ！
こんな内容ですみません。

第38話

買い物済ませ城に帰ってきた白帝一行。今は白雪を馬小屋に戻し十六夜、天香、月詠と共に董轟と董苑が仕事をしている政務室の前に来ている。(双鬼は隠れて護衛中です)

”コンコン”と政務室の扉を叩く白帝

董苑「はい、何方?。」と中から董苑の声がする。

「轟胡様、董苑様。白帝です。報告したい件と会わせたい人たちがいるのですが。」と声をかける。

董苑「あら、六花君?帰って来てたの。いいわよ、入りなさい。」と許可を貰った白帝

「失礼します。さつ、行くぞ。」と3人に声をかける

天・月「ええ。(はい。)」と白帝と共に部屋に入る天香と月詠中に入れば董豪が書類の山をせっせと片付けており、董苑はそんな夫の姿を見ながらお茶を飲んでいた。(仕事してください。)

轟「おお。六花殿、十六夜。帰って来てたのか、どうだった城下は?楽しんできたかな。」と白帝に気付いた董轟が白帝に話しかけてきた。(筆を動かしながら。)

「ただ今、帰りました。轟胡様、董苑様。ええ、楽しんできましたよ。民たちの活気もいい感じですよ。」と答えを返す白帝

十六夜「はい!久しぶりの城下は楽しかったです!」

轟「それは良かった。それで報告と会わせたい人たちと言うのは?」

「はい。報告は紹介が終わってから話します。先に二人を紹介しますね。天香、月詠。」と名を呼ぶ白帝

天・月「はい。」と呼ばれ前が出る

天「初めまして、董轟様、奥方様。六花様の婚約者で神王の娘の

天香と申します。」と前に出て頭を下げる天香

月「初めまして、同じく六花様の婚約者で魔王の娘の月詠と申します。」と静かに頭を下げる月詠

轟「そうですね、あなたの方が。話は娘から聞いております。先代の太守で董轟と申します。六花殿と一者に真名の轟胡と呼んでください。」

董苑「ええ。早く会ってみたいと思っていました。私の事は董苑と呼んでください。」

と答える二人

天・月「はい、分かりました。轟胡様、董苑様。」

と一通りの挨拶が済んだので次に進める白帝

「二人の紹介も終わったところで報告したいのは洛陽の件についてなのですが。」

轟「洛陽の?」

董苑「あの賢帝と謳われている劉高陛下が納める洛陽で何か起こったのかしら?」とお互いの洛陽の単語に反応する

「起こったのではなく、起こるかもしれませ。」

董苑「どうゆうこと、六花君?」

「協力者の話では、近い内に洛陽で大規模な宴が行われるそうです。」と説明する白帝

轟「宴か、そのような催しは来ておらん。」

十六夜「六花様、宴が気になるのですか?」

天「そうじゃないのよ十六夜ちゃん。確かに気になるけど、今回はこの大変な時期に宴が行われるのがおかしいのよ。」と天香が十六夜に説明する

十六夜「この時期に?・・・あつ!賊の対応。」

天「そうよ。最近、何処も賊の対応で忙しいはずなのよ、それは洛陽も同じこと。」

月「それだけではありません。宴が催されるなら、それなりの費

用が必要になります。そのような費用、対応に追われている諸国と洛陽に余裕があるとは思いません。」

「その通りだ。おそらく宴は表向きで裏では何か狙いがあるんじゃないかと思っている。」

轟「なるほどな。確かに今の皇帝の劉高様は民たちを苦しめるようなことはしないお方だ。」

董苑「そんなお方が。今の現状を無視して宴を催すとは考えられないわね。」

「いずれにせよ、今は情報が少なすぎる。そこで轟胡様、董苑様。お願いがあります。」

轟「何かな、六花殿。」

「羌賊との戦が終わったら洛陽に行き情報を集めたいのですが。」

轟「それは・・・構わないが。しかし、羌賊との戦が何時起こるか分からないのだが。」

月「その事については、心配ありませんよ。」と月詠が話に入ってきた。

「月詠？どういう事だ。」

月「はい。お父様が言うには、近い内に羌賊との戦が始まるということです。」

轟「それは本当ですか、月詠殿!？」

月「はい。こちらに来る前にお父様から羌賊の動向を聞かされました。」

「なるほど。轟胡様、こちらの準備はどうですか?」

轟「此方の準備は、兵の数は大丈夫なのだが兵糧が問題でな。持久戦は無理じゃ、かと言って短期戦でもそこまで長くは持たない。」

天「それなら任せなさい。足りない分の兵糧は神界から送ってもらうから心配ないわよ。」

董苑「それなら安心ね。これで何とか戦には間に合うかしら。」

轟「そうだな、何とか間に合うかもしれんな。協力、感謝しますぞ天香殿、月詠殿。」

天「気にしないで、これもみんなの為なんだから。」

月「そうですね。それに気になるのが羌賊の事なのですが。」

「どうかしたのか、月詠。」

月「はい。お父様の話では羌賊から邪気を感じるとのことです。」

十六夜「邪気？」

「もしかしたら、悪魔と何か関係があるかもしれないな。」

月「恐らく。もしかしたら羌賊の皆さんは操られているのかもしれませんね。」

「可能性としてはあるかもな。そういえば、脱走した悪魔の名前は聞いたことがないのだが、何か知っているか？」

月「はい。悪魔の名前は”ブラド”と言います。人を操り魂を糧としています。」

「ブラドか。サタンと比較してどちらが上なんだ？」

天「それはもちろんサタンね。なにせ神界・魔界にその名を知らないモノは居ないわ。」

月「その通りです。サタンは魔界の中でも五指に入る強さですから、それに、そのサタンに一太刀浴びせ、生き残った六花様も神界・魔界の中で知らないモノは居ませんよ。」

「それは初めて知ったな。」

十六夜「凄いです、六花様。」

天「対するブラドは、まあ・・・サタンよりは劣るけど、あいつの場合はさつきも言った通り人を操るから強さ的には中級ぐらい何だけれど、厄介なのが魂を食らうことに強くなっているのよね。」

「魂を？」

月「はい。魂と言っても何でもと言うわけではありません。食らうのは汚れた魂、つまり悪党や罪人の魂なんです。ブラドはそう言った黒い魂を食らって力をためて行くのです。」

「なるほど、以前、神王様と魔王様が言っていたな。まあその対策は、二人と相談したから何とかなるかも知らないから大丈夫だとは思うんだが・・・。」

董苑「まあ、今は情報を集めるのが肝心なようね。六花君、余り背負いすぎと潰れちゃうわよ。」

「董苑様。」

董苑「ふふ。六花君は自分の兵達の訓練に集中してね。羌賊の情報は私たちの方で集めておくから大丈夫よ。」

「……分かりました。羌賊の情報はよろしくお願いします。オレの方で兵達を戦に役立つ用に厳しく訓練しておきます。」

董苑「ええ。それでいいのよ。お願いね。あ、後ね。六花君には自分で出した案件の処理をお願いするわね。もちろん全部じゃなくて私達じゃ分からない案件だけだから、よろしくね。」

「それは構いませんよ、元より全部を任せるようななんて思ってませんから。」

轟「所で六花殿。天香殿と月詠殿の事は他の者達に何と説明するのかな。」

天「それについては考えてあります。私達は姉妹でこの涼州に店を出しに来た商人で親が決めた六花様の許婚とします。もちろん、ちゃんと店は出すので心配ありませんしその費用は自分で用意するわ。」

月「私達は旅の人や他の町から情報を集めて行きます。」

「護衛はどうするんだ？」

天「大丈夫、近い内に神界と魔界から従業員と言う名の護衛の人が来るから問題ないわ。」

「それなら心配ないだろうが、余り無理はしないでくれよ二人とも。」

天・月「分かってるわよ。(分かっていきますよ。)六花様。」

月「それに、城にもある程度の兵糧と物資を運びますし、護衛の依頼として頼むかもしれませんね。」

轟「そういう事なら大丈夫だろう。」

董苑「ええ。ある程度の物資は必要だし助かるわね。」

十六夜「でもそんな店を出すような広い場所なんて会ったかしら。」

天「心配しないで十六夜ちゃん。」

月「今日、城下を回った時に使われていない大きな屋敷があったので、そこを買い取って修理して使いますから問題ありませんよ。」

十六夜「大きな屋敷？」

轟「それはもしかして、大通りにある屋敷かな？」

天「そうですね。」

轟「そこは先日、商人が屋敷を引き払って別の町に行ったから別に使っても問題はないだろう。」

董苑「では決まりですね。ではお二人は今夜どうしますか？落ち着くまでこの城に滞在しますか。」

十六夜「それでしたら、今夜は私の部屋で過ごしていただくいい！」

天「イイの。十六夜ちゃん？」

十六夜「はい！」

月「良いかもしれませんね。たまには女の子同士で過ごすというのも。」

天「そうね。それじゃあ今夜は十六夜ちゃんの部屋で過ごしましょうか。」

十六夜「はい！」

董苑「良かったわ。お互いに仲がよさそうで安心したわ。」

「ホントにオレはいい妻たちを貰いましたよ。」

轟「だが、他の娘たちに構うあまり十六夜の事は忘れるなよ。」

「それはもちろんですよ。」と3人を見つめる白帝

白帝が見つめる先の3人は楽しく話し合ったりしていた。それを見つめて

「（守ると決めたからな）」と心から想う白帝だった。

第39話

「さてと、あまり長居すると轟胡様の仕事が片付かないので、そろそろ部屋に戻るとするか。」

十六夜「そうですね。それに、天香さんと月詠さんは今日来たばかりですし、私の部屋で休んでもらった方がいいですよね。」

天「そうですね。流石に城下の散策で疲れたわね。」

月「そうは言いますが、実際は六花様の白雪で移動したじゃありませんか、天香様。」

天「うっ・・・まあそうだけど、六花様の方が疲れてるわよね。」

「あれ位どうと言うことはない、それより今日は十六夜の部屋でゆっくりと休んでくれ。明日は城の中の案内と城下に出す店の下見をした方がいいだろう。」

董苑「そうよね、明日も疲れると思うから、ゆっくりと休んだ方がいいわね。」

天「えっ！六花様、明日も付き合ってくれるの!？」

「ああ、問題はないな。明日は董苑様の元で案件の整理をすればいいと思うだけだと思うから、そうですね董苑様。」

董苑「ええ。それで構わないわよ。そうね、時間的には先に案件の方から片付けてもらいましょうか、下見の方が体力使うモノね。疲れた後に仕事はやりたくないだろうしね。」

「そうですね。では、オレが午前中に案件は終わらせている内に、二人には城の中を十六夜に案内してもらいましょう。いいか、十六夜。」と確認のため十六夜に聞く

十六夜「ええ構いませんよ。明日もお休みですし大丈夫ですよ。」

「すまんな、十六夜。」と本来なら明日も休みで十六夜と過ごすはずだった白帝は十六夜に謝る

十六夜「良いんですよ、六花様。私よりも六花様の方が心配です

よ。」

「オレの？」

十六夜「そうですね。もっとうご自分の身体を大事にしてくださいね。訓練で山から帰ってきたのはつい最近なんですから。」と腰に手を当てる白帝に注意をする十六夜

「分かつてはいるんだがな。今度は十六夜の好きな所に連れて行ってやろう。だから、今回はこれで我慢してくれ十六夜。」と言って十六夜を抱きしめる白帝

十六夜「ツツツ／＼／＼もう、六花様はズルいです。」と赤くなる十六夜

天「コホン。二人ともイチャつくのはいいんだけど、余り人目のない所でやってよね／＼／＼（羨ましわね。十六夜ちゃん）」

月「そうですね。余りそういうのは、人目に触れない所でやるモノですよ／＼／＼（うう／＼私も今度六花様にやってもらおう。）」と二人がやきもちを焼いていた。

十六夜「／＼す、すみません。二人とも。」と白帝から離れる天「まあ、今回は私たちが来たことが原因だから許すけど、次は抜け駆けはダメだからね十六夜ちゃん。」

月「そうですね。1人だけ六花様と抱きしめあうだなんて、同じ妻として許しませんからね。」

十六夜「はい。」

董苑「さて、みなさん。そろそろ熱い夫婦漫才はやめて、部屋に戻りなさい。天香さんと月詠さんは十六夜と一緒に居て頂戴ね。夕食はみなさんと一緒に頂きましょう。その時に息子の董穿を紹介するわね。」

十六夜「はい。お母様、じゃあ二人とも私の部屋に行きましょうか。」

天「そうですね。夕食まで十六夜ちゃんと話でもしていきましょうか。」
月「そうですね、私たちが来るまでの六花様の様子を聞きたいですわね。」

天・月「それでは、轟胡様、董苑様。失礼します。」と言って3人は政務室を出た。

そこに残ったのは、白帝と董轟、董苑の3人

轟「さて、六花殿も自分の部屋に戻られよ。」

「そうですね。では最後に一つだけ。」

董苑「まだ何かあるのかしら？」

「すぐに済みますよ。お前達もういいぞ。」とその場で言う白帝、すると

スウ・・・と目の前に頭を垂れている者達が現れた

轟・苑「！！??」と突然のことに驚く二人

「頭を上げて構わない、それで人選は決まったのか。」

神兵1「はい。魔族の者達を中心に隊を編成しました。」

「そうか。ご苦労さん。さてお二人に紹介しますね。この者達は神界と魔界の者達で情報を集めるために天香たちと共にやって来ました。」

神兵1「お初にお目にかかる、我らは白帝様の指揮下にある神族と魔族の者達です。」

魔兵1「我らの目的は敵の情報を集めることにある。人間たちには危害を加える気はないから心配ない。」

「お二方には、紹介しておいた方がいいと思いましたが。もしかしたら、二人との連絡役に使うかもしれませんので。」

轟「まあ、確かに紹介してもらった方が都合はいいが。」

董苑「行き成り、現れるのは勘弁してもらいたいわね。」

「まあ、それは仕方ありませんが、2人にはそれぞれ、護衛兼連絡役として1人付けます。余り戦闘専門と言うわけではありませんが、それでもそこら辺のやつよりは強いですよ。」（どれくらいかと言うと夏候惇の上に行く実力を持つ、それでも神族魔族の中では弱い部類に入ってしまう。）

轟「それは構わないが、なぜワシらに？」

「あくまでも要人の為ですよ。少なくとも羌賊との戦が片付くま

「ですかね。」

董苑「そうね。幾ら城の中とはいえ、暗殺を企てる者がいるかもしれないから要人にこしたことはないわね。」と納得する董苑

「その通りです。敵は何処に潜んでいるか分かりませんから。聞いた通りだ。すまないが人選を頼んだぞ。」

神兵「分かりました。」

魔王「任せろ。」

と言つて姿を消す。

「これでオレの報告は終わりかな。では、轟胡様、董苑様、オレは部屋に戻りますので失礼しますね。」と二人に頭を下げ部屋を出る白帝

部屋に戻り紙と筆を用意する白帝

「さてと、あいつらに連絡をしとかないな。」と言つて紙に何かを書く白帝

やがて書き終え、その紙を鳥の形に折り神気を流し込む、すると（ヒラヒラ）とその折り紙が飛んだ

「戦鬼と水鬼の元まで頼んだぞ。」と言つて式神を放つ白帝
その紙には

”現在の賊の居場所の報告のため戻つてこい”と書かれていた。
どうやら、実践を積ませるために呼び戻すようだ。

「さて、羌賊との戦に間に合うかな。もし羌賊が操られていた場合・・・互に血を流さずに済むだろうか。」とこれからの戦いに、もしもの可能性を望む白帝であった。

第40話

時間は6時頃、皆が食堂に集まり楽しい夕食の時間のはず、なんだが・・・

天「さあ六花様、アーンしてくださいね。」と白帝に迫る天香、そこに

十六夜「ちよつと、天香さん！何をしているんですか！？」

月「そうですよ！大体、天香様は今日のお昼に六花様にしていたじゃないですか！だから今回は私ですよ！」と天香の行動を見て騒ぐ二人

天「お昼の時つて・・・あの時は貴方たちに邪魔されて出来なかつたじゃない！だからその時の続きよ！」

月「いいえ！いくら天香様といえどもこればかりは譲れません！私も六花様の妻としての役割があるのでですから！」

十六夜「月詠さんも何を言っているんですか！今度は私の番ですよ！」

天「十六夜ちゃんはもう六花様にやっただでしょう。だから今回は無しよ！」

と騒ぐ3人、それを見る白帝

「（何かお昼にもこんなことがあったな。）」と離れたところから思つ白帝

烈「よう、六花殿ずいぶん苦労しているじゃないか。この幸せ者が。」と董穿が白帝の肩を掴む

「烈刃殿・・・そんなに肩を強く掴まないでいただきたいのだが？」と異様に手に力を込めて白帝の肩に力を入れる董穿

烈「うるせえ！何なんだ、お前は！？あんな美人な奥さん連れて

きやがつて！？彼女が出来ない俺への当てつけかコノヤロー！？
と騒ぐ董穿

「そんなつもりはないんだけどな。」と対応に困る白帝

昇「まあまあ、少し落ち着なさい烈刃様。」

紅「そつだぞ若。騒いだところで彼女は出来んぞ、そんなに彼女
が奥さんが欲しいなら早く見つけてくるんだな。」

と会話に入る董穿を落ち着かせる張安と呂畔

ちなみに夕食の席に来ているのは董家の方々と白帝、天香と月詠
の顔合わせの為に張安と呂畔達だけである。

烈「くつ。良いよな彼女や奥さんが居る奴は、俺だつて彼女が欲
しいのによお。」と部屋の片隅で膝を抱く董穿

「ん？お二人は既に奥方が？」と董穿の言葉が気になり二人に話
しかける白帝

昇「ええ。すでに8歳になる娘がいます。」

紅「オレはまだ結婚はしていないがな。」

「そうですか。」

と3人で話していると

烈「ウガアアア〜。六花！貴様の女運、オレが貰い受けるから
勝負しろ！」と復活して何か訳の分からない事を言う董穿

「女運つて・・・そのうち、女性いひごとと出会えると思ひませけどね。

焦ることはないと思ひますよ烈刃殿。」

烈「うるせえ！こうなりやあ関係なく勝負だ！？表に出・・・”

ベチイイイン”グハア！？」と壁に吹き飛ばされた董穿

「六花様に手を出すことは許しません！！」と今まで口論し
ていた十六夜、天香、月詠が董穿に近付き制裁を下したようだ。

「十六夜・・・最近、烈刃殿の扱いが雑になって来たな。しか
し・・・）どうやら烈刃殿には訓練をもう少し厳しくする必要があ
るみたいだな。」

紅「そつだな。幾ら女子3人とわいえあも簡単に張り飛ばせれ
手は太守の面目にも関わるからな。」

轟「全く我が息子ながら情けない、あれ位、受けて何事もなかったかのようにしなさい。」

「（そこは避けるんじゃない、受けること前提なんだ。）」
と誰一人として吹き飛ばされた董穿の心配をする者はいない。

烈「ねえ！誰か一人でもいいから、オレの心配してくれてもいいんじゃないか！？オレ太守だよね！？この扱い酷くない！？」と騒ぐ董穿

そんな事を気にした様子もなく皆は食事を続けるのだった。

烈「誰か！オレの心配してよ！？」

うるさいですね、貴方はそういうキャラなんですから仕方ないじゃないですか。

烈「テメエがそうしたんだろうが、作者！？何とかしやがれ！？」

仕方ないですね、じゃあお詫びに近い内にあなたに彼女が出来る様に書いて行きますから、それで勘弁してくださいよ。

烈「まあそれなら・・・」

納得してくれたところで後ろを見てください。

烈「ん？後ろ？」と振り向けば皆が董穿を痛い人を見るような目で見ていた

「烈刃殿は疲れているんですね。だから何も無い空間に向かって叫んでいるんですね。」

轟「そんなに太守らしい仕事はしていないはずなんだがな？」

董苑「それとも太守と言う責任がいけないのかしら？」

十六夜「お兄様・・・」

天「十六夜ちゃん・・・頑張るのよ。」

月「十六夜様・・・董穿様に早く良い人が出来る様に祈りましょう。」

昇「最近、賊の討伐に出ていないからだろうか？」

紅「それなら身体を動かして今からでも鍛錬をするか？」

烈「まつ待て違うんだこれは・・・」と弁解をする童穿

じやつ頑張つて誤解を解くんだよ〜

烈「あ！この野郎〜なんとかしら〜」と童穿の声が響いたの
であつた。

第40話（後書き）

ちよいと息抜きにふざけて書いてしまいました。

ごめんなさい。

次回からはちよいと展開を早めて行くかもしれません。・・・出
来たらいいなあ

第41話(前書き)

さて今回は真面目に書いて行きたいと思います。

第41話

休日2日目・・・何だけど仕事をやる白帝

白帝の部屋

起床して着替えを終えた白帝、部屋を出る前に神気を感じたので呼んでみる

「戦鬼と水鬼か。」

すると目の前に2体の鬼が現れた

戦「連絡を受けて戻った。」

水「ただ今戻りました。白帝様。」

「ご苦労、すまなかつたな、今まで賊の監視をやらせてしまって。それで、どうだった？」

水「はい。今現在の賊の居場所は地図に書いておきました。」

戦「今のところ賊どもは動いてはいない。」

とそれぞれの報告を聞く

「そうか、分かった。近い内に賊の討伐をする。それまで賊どもの監視を続けておいてくれ。」

戦「分かった。」

水「それと白帝様。こちらの方で何か動きがあったのですか？」

戦「そうだぞ。先日、大きな神気と魔力を感じたんだが、誰か来たのか？」

「ああ、天香と月詠。後二人についてきた神族と魔族の兵達だ。」

水「天香様と月詠様達がいらしたのですか!？」

戦「おうおう、追っかけ女房だね。それで、その兵達と言うのは？」

「諜報専門の部隊だ、すでに魔族を中心とした隊を洛陽に向かわせた。後の兵達は連絡役として此方に待機している。」

水「そうですね。洛陽に・・・白帝様は洛陽には？」

「周辺の賊退治と羌賊との戦が終われば洛陽に行く。今は先遣隊の情報を待つ。」

水「分かりました。では私たちは監視に戻ります。その前に天香様と月詠様にご挨拶してきててもよろしいでしょうか？」

「構わないかな？丁度2人は一緒だし、十六夜もいるから会ってやってくれ。」

水「ありがとうございます。白帝様。さあ行きますよ。戦鬼。奥方様達にご挨拶です。」

戦「何でオレまで。いいじゃないか水鬼だけで行けば。」

水「つべこべ言わずに行きますよ。」と言って水鬼は戦鬼と供に消えて行った。

「相変わらずだな。さて、朝食を食べに行くとするか。」と部屋を出て食堂に向かう白帝

十六夜の部屋

すでに3人は起きており互いに髪を梳きあっている。

十六夜「天香さんの髪は綺麗ですね。」と天香の髪を梳きながら言う十六夜

天「そう？ありがとね、十六夜ちゃん。でも十六夜ちゃんの黒髪も綺麗よ。」と十六夜の髪を褒める天香

月「そうですね。とつても綺麗だと思いますよ。こうして櫛にもかかりませんし。」とこちらは十六夜の髪を梳いている月詠

状況的には 鏡 天 十六夜 月 という状況である（無理があると云うツツコミはなしで！）

十六夜「ありがとうございます。」

と3人は楽しく会話をしていた。そこに、

翡「ん？天香様、月詠様、十六夜様。式神の・・・コレは戦鬼と水鬼ね、が来られましたよ。」と同じ式神である翡翠が言う。（久しぶりの登場だな。）

天「何か用かしらね？」と首を傾げる天香

月「多分、水鬼の事ですから私たちに挨拶に来たのではないかしら。」と予想する月詠

十六夜「戦鬼？水鬼？」と初めて聞く名前に首を傾げる十六夜

黄「戦鬼と水鬼はね、僕たちと同じで白帝様の式神で、今までは周辺の賊の事を調べてたんだよ。」と黄牙が説明する。

十六夜「そうなの。じゃあ私も初めて会うわけだし挨拶しないとね。」

翡「戦鬼に水鬼、許可が下りたからいいわよ。」と翡翠が言うこと目の前に膝をつく双鬼よりも二回り大きい鬼が現れた。（こちらが本来の大きさです。双鬼は子供サイズです。）

水「朝早く申し訳ありません。お久しぶりですね、天香様、月詠様。そしてお初にお目にかかります。私、白帝様の式神で水鬼と申します。以後お見知りおきを。」

戦「同じく式神の戦鬼だ。」

十六夜「いえ！そんな、初めまして私の事は十六夜と呼んでください！」

水「分かりました。十六夜様。」

天「久しぶりね、水鬼に戦鬼。」

月「これからは私たちもこの地に留まりますから、一緒に六花様を支えて行きましょうね。」

水・戦「はい（無論だ）。」

翡「ちよつと、戦鬼！奥方様達に何て口きいてるのよ！？」

戦「うるせえ！オレにはこの口調があつてるんだよ！」

翡「そう言う問題じゃないでしょう！」

水「御二人ともやめなさい。奥方様達が見ているでしょう。申し訳ありません、奥方様。」

と水鬼に言われやめる戦鬼と翡翠

十六夜「いえ、構いませんよ。それで、何か私たちに用があるの

かしら？」

水「いえ、ただ天香様と月詠様、そして初めて会う十六夜様に、挨拶として参りました。」

黄「やっぱり月詠様の言った通りだね。」

天「相変わらず水鬼は。」

水「ふふ。それでは私たちは戻りますね。双鬼、しっかり奥方様達を護衛するのですよ。」

双鬼「もちろん!!」

戦「では水鬼、先に行ってるぞ。」と言って姿を消す戦鬼

水「待ったく、戦鬼ったら。では皆さん失礼しますね。・・・あ、あ！あと一つだけ、早く白帝様のお子を産んでくださいね。では」と消える水鬼・・・爆弾を残していったな。

水鬼の爆弾を聞いた3人は、それぞれが赤くなり

十六夜「六花様との子供／＼／＼と頬を染め手を当てる十六夜

天「そ、それは・・・ほしいけど／＼／＼と手をモジモジする天香

月「まだ、そういう事もしていませんし／＼／＼何よりまだ、六花様はお忙しい身ですから・・・その・・・時期が来たら／＼／＼と白帝の事を考える月詠

天「そうよね。六花様は忙しいし！それに最初は・・・その十六夜ちゃんから／＼／＼六花様と／＼／＼」

十六夜「え！？なぜですか／＼／＼」

月「それは、最初に六花様と婚約したわけですから、順番的にそうなるわけですから。」

十六夜「ハウッ！／＼／＼分かりました。私が先に六花様と／＼／＼先に・・・キュウウウウウウ（ドサ）」と顔を真っ赤にしながら倒れた十六夜

月「十六夜様!!」と介抱する月詠

天「はあく。全く水鬼め、朝からなんてこと言っていくのよ。」と水鬼に小言を漏らす天香だった。

その後、朝食を食べに食堂に行った3人なのだが、そこで白帝に会ってしまい再び水鬼の言葉を思い出し白帝の顔をまともに見られない3人だった。

「どうしたんだ？あの3人は？」と首を傾げる白帝、それを見た式神である翡翠が朝の出来事を言うか迷っている

黄「どうするの翡翠？朝の事を言うの？」と黄牙

翡「いう訳ないでしょう／＼言ったら白帝様だって困るモノ。

それに言っていたでしょう。その時期が来たらって・・・白帝様には今日の前の事に集中してもらはないとね。それに、こういうのは・・・その／＼色々な心の準備があるわけだし／＼そんな行き成り・・・」とブツブツと呟いている翡翠

黄「（はあく）。女の人って分かんないな。白帝様、頑張っ！）」と心の中で白帝を応援する黄牙だった。

第41話（後書き）

前書きとは逆になっちゃいました！すみません！

次回こそは真面目に書いて行きますんで、よろしくです！

さて、お昼でも作ろうかな・・・ではまた次回に・・・今日、投稿出来るかな？

第42話（前書き）

頑張ります。

第42話

朝食を食べ終え、朝の報告を聞いた後にそのまま政務室に向かう白帝、やがて政務室の前に来て扉を叩く

”コンコン”

「董苑様。白帝です。」

董苑「ああ、来てくれたのね。入って構わないわよ。」と返答があつたので

「失礼します。」と政務室の中に入る白帝、中に入ると昨日と同じように董豪と董苑、後何人かの文官がいた。

董苑「ごめんなさいね、六花君。」

「いえ、自分で出した案件ですから、構いませんよ。それで、そこに居る文官たちは？昨日はみませんでしたか。」と気になる白帝轟「彼らは、六花殿の案件の製作を何個かやってくれている者達でな、今日は彼らの相談に乗ってやってくれ。」と説明する董轟

「なるほど分かりました。と言うわけだから、何でも聞いてくれ。」と文官に向かって言う白帝

文官達「はい！よろしくお願いします！白帝將軍！」と白帝に頭を下げる文官たち

「さて、何から聞きたいのかな？」と席に着き質問する白帝

文1「はい。まず報告ですが。白帝様から出された案件で市役所・交番？詰所は成果を出しています。」

文2「鉄の良質の生成や土地の改良も時間はかかりますが、鉄の方はすでに出来つつあります。」

文3「ですが、交通機関の整備と治水工事の方は何分人手と費用が動くので中々・・・」

と聞いた白帝

「なるほど。つまり、聞きたいのは人手不足の解消かな？」

文3「そうですね。申し訳ありません。白帝様。」

「何も謝ることはない、こればかりはどうしようもないしな。」

董苑「それで、どうするの六花君？」

「出来ることなら、交通整備と治水に関しては早急にやってもらはないと困ります。交通整備は貿易の要、また行軍の要でもありません。治水に関しても土地の改良にもつながるし、領民の生活にも関わりますからね。」

轟「だが人手と費用が足らんことにはどうしようもない。」

「費用については、先程言っていた良質な鉄を貿易の品として他国と貿易して利益をだし、人手については、城の兵の訓練として出します。後、仕事がない人たち・・・流民や貧しい人たちを雇えば何とかなるかな。どうか？」

文1「確かに、今までの鉄とは違いますから、利益は出ると思いますが。」

文2「ですが、流民たちにもともと住んでいた領民たちから土地を取り上げることは出来ませんし、領民は納得するでしょうか？」

「確かに、そこでだ、ある程度の人たちを兵・・・イヤ、警邏隊として雇う。」

文3「徴兵ですか？」

「イヤ、兵士としてではなく。あくまで城下の警邏隊としてだ。」

確かに兵として徴兵するのもいいかもしれないが、ろくに訓練・武器も持ったこともない人たちにそれは余りにも酷だ。もちろん、兵として雇って欲しいと頼んで来たら構わない。だけど、まずは基本を身体に覚えさせ為に警邏隊に参加してもらう。」

董苑「なるほどね。じゃあ、女子供はどうするの？」

「女子供については、これから行う政策の協力者になってもらいます。」

董苑「協力者？」

「はい。それは、また後で説明します・・・と、どうか。」

と文官たちの意見を聞く

文2「確かにそれなら問題はありませんが。彼らが住む土地はどうしますか？」

「土地については、雇った人たちに森を開拓させてそこに住まわせる。それまでは、オレが何とかしよう。とりあえず、急ですまないが、流民と貧しい人たちを・・・そうだな、轟胡様、城下に使われなくなった屋敷とかありませんか？」と董豪に聞く

轟「それなら、昨日言っていた他にも何件かあるが。どうするんだ？」

「使える力は使わないといけませんしね。」

轟・苑「！！」二人はなんの事なのか察して驚く

董苑「イイの、六花君？」と白帝の眼を見つめる董苑、見れが董豪も白帝を見ていた

「はい、御二人の心配はもつともですが、別に問題はありませんよ。」と返答する白帝

轟「分かった。六花殿が言うなら構わない。すまないな。」

「いえ。これも民たちの為です。」

董苑「ありがとう。六花君。」

「と言つわけだから、その屋敷に、そうだな数日では無理があるから1週間で流民たちを集めてくれよ、頼んだぞ。」と文官たちに頼む白帝

文3「？分かりました。そのように手配しておきます。」と了承する。

「よし、とりあえず人手不足と費用についてはこんなもんかな。

さて他には？」と進める白帝

文2「はい。城下の区画整理なのですが。」

「区画整理？そんな案、オレ出したっけ？」と考える白帝

董苑「コレは私たちで考えた案件なのよ。煩雑に城下・他の町が成長してしまえば、発展の妨げにもなっちゃうでしょう。そうなれ

ば政をしていく中で国として痛手に繋がるのよ。」

豪「そこで、六花殿の意見を聞いて見たいと思つてな。」

「コレはオレが出した案件の処理なのでは？・・・まあいいですけどね。そうですね・・・では職種によつて分けましょう。」と提案する白帝

董苑「職種によつて・・・つまり同じ職種を1か所に集めてしまふということ？」

「そうです。1か所に集めてしまえば互いに競争し合いますし、より良いモノを作つたり売つたりするでしょうから、互いに刺激し合えますしね。」

豪「なるほどな。確かにいい刺激にはなるな、あの店には負けな」とか。」

「それと、それぞれの市に主に取り扱う品を決めるのもいいかもしれませぬね。」

董苑「・・・なるほど。日用品は別にして、用途に合わせて市の利用を上げるのね。」

文「確かに、店を置けば市が成立するわけではありませんからその案ですと確かに市が発展して経済の流れは活発になると思いますが。しかし・・・」と黙り込む文官

「治安については、先程の雇つた警邏隊を区画ごとに配置する。

警邏隊の他にも城の兵を配置して対処に当たらせればいい。」

豪「しかし、そうすると兵達は一線から外されたと思わないか？」

「確かにそうかもしれませんが、そこは期間を区切るか。後は兵達に警邏の指揮をやらせて、うまくできた者は将に昇格と言うのを流せば大丈夫でしょう。もちろんその時は、いきなり任せるのではなく小隊の指揮を執らせたり、ある程度の経験を積ませてからしますけど。」

豪「なるほど、確かに我が軍は人手が足りないし指揮だけでも出来る者がいれば多少は違うな。」

「とりあえず、最初に太守である烈刃殿にやらせましょう。太守自ら当たれば、後に続く人達も不満はないはずですから。」

文2「そう言う考えが・・・」と感心する

「後は・・・娯楽とかなんかあるのかな？」

文1「娯楽ですか？」

「そ、娯楽。祭りとか領民たちが楽しく過ごせる行事とか。」

豪「祭りは年に数回しかないな。後は正月とかそれくらいしかないな。」

「なら、月に1度か数か月に1度、簡単な祭りを開こう。」

文3「祭りですか？」

「そうだ。大規模な祭りはその内の数回として、後は自分たちで楽しめるような事をしよう。」

例えば区画対抗の祭りとか、武闘大会とか。」

董苑「面白そうね。そうすれば市の人たちと城の者達との触れ合いも生まれるし。観光の宣伝にもなるしね。」

文2「なるほど、良いですね。」

「・・・こんなもんでしょかね、参考にはなりましたか？」

豪「ああ。助かったよ！」と絶賛

董苑「ええ、参考になりすぎて六花君にはこれからも文官として働いてほしいくらいだわ！」

文官たち「「そうですよ、白帝將軍！これからも我らの力になってくださいよ！」「」

「・・・あまり時間が取れませんが、それでもいいなら・・・」
苑・文官たち「「ありがとう！！」「」と白帝の手を握ってくる

「それで、他にあるんですか？」

文3「はい。最後に学校についてなのですが。」

「ああ、学校か。それで？」

文3「はい。この3つについて何ですが、文官育成の学校と武官

育成の学校、医者育成の学校なのですが、文官と武官の育成には問題はありませんが、医者については教える者がおりません。」

「確かに医者については無理があるが、その事ならオレの方で何とかしよう。後コレはまだ試験段階だから本格的に実用できるか分からない、なので試験期間として10年は必要と思っている。文官、武官、医者に興味がある子供・・・6歳から15歳の子供を対象とするそれぞれの学校に50人。計150人程入学させる。子供は城下、後は近くの町や村から募集する。条件は特にならない。文字や字が書けない読めない者もいるかもしれんがそれでも構わない。それを教えるのも文官たちの仕事だ。」

董苑「授業料とかはどうするの？いくら試験期間とはいえそれなりに費用は関わるわよ。」

「目処が立つまでは自分が用意しましょう。後、村や町から来る生徒たちには宿と食事を用意します。」

文1「それでは、飯を食わすためだけに通わせる親もいるかもしれませんよ？」

「最初にも言ったがコレは試験段階、たとえ我が子可愛さにそうする親もいるだろう、だが期間の10年でその子が何処まで変われるかが問題だ。その子が城勤めになり政や兵士なつて貢献してくれるといい。それにそういう子供は調べておいてその村や町に問題は無かったか調べる。」

文2「なるほど。ですが、10年間も親から離すのですか？」

「そんな事はしない。週に一度子供たちを返す。その時は護衛として兵もつける。そうすれば兵の訓練にもなるしな。」

豪「そうすれば、子供たちは学を学べるし、兵達は実践が積めるわけか。」

「出来れば、子供たちにはそういう目にあつて欲しくないのですけどね。まあそういうことです。他に質問は？」

文3「はい。10年も専門な事を教えるのですか？」

「イヤ、最初の数年は文字の読み書き、後は体力をつけてもらう。」

文字の読み書きについては簡単な絵本とか解りやすいモノから教え
て行く。体力作りとしては身体が出来上がってない子供たちには走
りこませるだけでいい。後はそこから自分達が希望する学校に行っ
てもらおう。」

文2「教える文官と武官の講師はどうしますか？教える側としま
しても毎日出られるというわけではありませんし。」

「そこは、現役を引退した文官とか武官の人を雇えばいい。他に
も文官希望ではなく講師だけと言う人を雇えばいい。もちろん、現
役の文官、武官が教えて時代の育成に努めても構わない。」

文3「なるほど。分かりました。」

「他に質問がないならこれで終わりでもいいのかな？まああつたら、
こうして呼んでください。」

豪「ありがとう、六花殿参考になった。」

董苑「ええ。ホントに助かったわ。」

「いえ。あ、後コレは先程言っていた案件です。分かりやすく書
いておきましたので検討してください。多分、新たな利益になるは
ずですから、では失礼します。」

と言つて白帝は政務室を出て行った。

董苑「何が書かれているのかしら？」と竹筒を開くとそこには・

豪「こ、コレは！？」

書かれていたのは、今の時代貴重とされている紙の生産方法や細
菌対策としての石鹼の作り方が書かれていた。しかも書いてあるの
は竹ではなく、此処に書かれている紙で作られた紙であつた。

文1「凄いですね。今までの紙とは質が違いますね！」

文3「しかも、作り方を見てみれば本来の作り方より安く済むぞ
！」

文2「これなら、爆発的に売れて利になるな！」

董苑「この石鹸と言つのも面白そうね。どんな物か試しに作つてみて検討しましょうか！」

豪「そうだな！よし！早速職人たちを集めて試してみよう！」

苑・文官たち「ええ！（はい！）」と政務室に響きわたった。

第42話（後書き）

頑張ったかな？

第43話(前書き)

頑張つて書いて行きます。

第43話

白帝が政務室を出てそのまま十六夜の部屋に向かう

「（今は大体、昼前か。このまま昼を食べに城下に行つてそのまま下見でもいいかな。）」と考えて十六夜の部屋の前に来た白帝

「コンコン」十六夜、入っていいか？」とノックをして呼びかける

十六夜「はい。六花様、大丈夫ですよ。」と返答があつたので入る白帝

「待たせたか？3人とも。」

十六夜「いえ。大丈夫ですよ。」

天「今まで女の子トークやっていたからそれ程、退屈はしなかつたわよ。」

月「案件の方は落ち着いたのですか。六花様。」

「ああ。大体な。それじゃあ、城下に行くか、昼を食べてそのまま下見に行くぞ。」

3人「はい！」

昼を食べ終え、目的地の屋敷に来た白帝たち

天「うん。これ位なら問題ないわね。」と屋敷の中を見渡す天香

月「そうですね。前の主は何かと裕福な商人なのでしょね。それ程、傷んだ場所はありませんし、これなら数日中には店が開けますね。」

「早いな。」

月「準備は早い方がいいですから。」

天「そうよね、私たちも急ぎ準備して備えないといけないしね。」十六夜「でも、まだ護衛の方たちが到着していませんけど。」

天「それなら、大丈夫よ。今朝お父さんから連絡があつて」今日

の昼ごろに送る”って、もうすぐだと思っただけど……”

「ん？どうやら来たみたいだな……」と神気を感じ取る白帝
十六夜「えっ。」

見れば通りを30人程の商団の団体が近付いてくる、やがて白帝
たちの目の前で止まり前に笠をかぶった二人の女性が現れた

その内の女性がいきなり……

女1「天香様……。お会いしとうございましたあ……！」と天香
のに抱き着くのだった。

天「ちよつと！その声！まさか、”那波”（ななみ）！？」と抱
き着いた勢いで笠が外れて女性の顔が現れた、そこにはなぜか現代
で見ることしかなかったメイド服を着た天香よりも上と思われる女
性だった……笠とメイド服のツツコミはなしでお願いします

那「はい……。神王様の命により来ちゃいました……。」と明るいメ
イドさん

月「宮殿のメイド隊のメイド長的那波様がいらしたという事はも
う一人の女性は……。」

と月詠がもう一人に向かつて言う

女2「はい。魔界王族近衛隊の隊長”葉月”（はづき）でござ
います。姫様。魔王陛下の命により参りました。」と此方はクール
な人なのだがこちらもなぜかメイド服……近衛隊とは関係ないじ
やんって言うツツコミはなしで！

月「やはりそうでしたか。でもいいのですか？隊長が居なくて？」

葉「はい。私が居なくても隊の者達は任務をこなしますのです。」

とクールに言う隊長さん……メイド服で台無しだが

「え」と天香に月詠、そろそろ自己紹介を頼みたいのだが……
と今まで空気になっていた白帝が声をかける

天「そ、そうね！いい加減に離れなさい那波！いくら私が姉と慕
っていても時と場所を考えなさい！」と未だ天香に抱き着いている
那波を引き離そうとする天香

那「はい。天香様分はちゃんと補充できましたよ。」

「（なんだ天香分つて？）」と思う白帝

月「すみません、六花様。つい話し込んでしまいました。」

「構わない、では紹介を頼む。」

天「じゃ紹介するわね。この人は那波。宮殿のメイド長にして私の教育係兼世話役、さらに護衛役で私の姉的存在ね。」

那「初めまして、白帝様、董伯様。彼の白帝様にお会いできて光栄です。天香様のことよろしく願います。」と

「（なんかフレンドリーな人だな）」と思う白帝

十六夜「はい、こちらこそ。」とペースの速さに困惑する十六夜

月「では次は私が・・・姫様ここは自分が。・・・分かりました、お願いします。」

と自ら名乗る葉月

葉「お初にお目にかかります。白帝様、董伯様。私、魔界の王族近衛隊が隊長、葉月と申します。あのサタンに一太刀浴びせた白帝様にこうしてお会いできて光栄にぞんじます。」と無表情に言う葉月だが

「（気のせいかな、妙に顔が赤いのは？）」

十六夜「どうも、こちらこそよろしく願います。」

月「あら、珍しいですね。葉月さんが顔に感情を出すなんて。やはり、六花様と手合わせしたいのですか？」と月詠が葉月の表情を読み取り指摘した

葉「イエ。姫様の伴侶である白帝様に手合わせを求めるなど恐れ多いことです。」

それを聞いた月詠は

月「六花様、良ければ時間がある時で構いませんので葉月さんと手合わせを願えますか？」

葉「姫様・・・ですから・・・」と反論する葉月

月「良いんですよ葉月さん。貴方の相手が務まるのはお父様ぐらいなんですから、たまには全力で戦わないと身体に悪いんですからね。いいですか六花様。」

「ああ、構わない。」と了承する白帝
葉「よ、よろしくお願いします。」と言って頭を下げる葉月

「さて、立ち話も何だから早いとこ準備を済ませてゆっくりしよ
うか。」と白帝の言葉で皆が準備を始める

準備の様子を簡単に説明すると

1・那波さんが神気でゴミ掃除をした後に神気で雑巾を操り綺麗
にした

2・屋敷に荷物を護衛の方々が置いて行った

3・商品を並べる

4・完成、何時でもお店が開けるぜ！

「って早すぎだろ！？どんだけ早いんだよ。」とツツコミを入れ
る白帝

十六夜「六花様、気持ちは解りますよ。」と感じる十六夜

天「まあ那波はメイド長だけあって仕事が早いから。これ位朝飯
前よ。」

「（そう言う事じゃないんだが。）」と思う白帝

「それで、終わったわけだが報告の為、城に戻るか？」

月「そうですね。後はコレと言って何もありませんし後の事は葉
月さん達がやってくれますので大丈夫です。ねっ、葉月さん。」

葉「はい、お任せください。帰ってくるころにはお食事を用意し
ておきますので。」

月「ええ。分かりました。じゃあ参りましょうか皆さん。」

「ああ。行くか。」と店を出て城に向かう白帝達

報告を聞いた董豪

豪「早すぎじゃね！？」と驚き

董苑「あらそれなら、正月前の掃除も楽が出来るかしらね。」と
思案中の董苑

烈「その二人は美人だったか!?」と報告は報告でも那波と葉月に興味を持った董穿（お前の彼女は別に書くよ。）

いうことがありました。

第43話（後書き）

さて流石に3話は書くのはきつかったせいから3話目の最後はおかしくなっちゃいました。

今回出てきた新キャラの二人は、ある小説の姉妹に仕えている二人です。

キャラはそのままで行きたいと思えますのでよろしくです。

分からない人が居ても構いませんので。

ちなみにヒロインに加えるかどかは今のところありませんので。

では次回〜

第44話(前書き)

久々の戦闘シーン・・・書けるかな(不安)

第44話

（休日3日目）

本日は休日最終日、白帝は先日の医者育成のための人材と費用についての相談を天香と月詠に相談しようと、店に来ていた。ちなみに十六夜は政務があるので今日は居ない

「すまないが、天香と月詠は居るか？」と門を守る門兵に聞いて見る

門兵1「コレは白帝様。姫様達でしたら本日は、店を開けるにあたって有力者たちや他の店の方々に挨拶のため回っています。」と事情を説明する門兵

「そうか。というと帰りは分からないか。」と納得する白帝

門兵2「急ぎのようでしたら、姫様達に言伝か使いの者を向かわせませんが？」

「……（そこまで急ぎでもないが。しかし……）」と考えていると

「???」どうかしたのですか。」と店の門をくぐって出てきたのは近衛隊の隊長の葉月だった。（メイド服でだが）

門兵2「葉月殿、鍛錬は終わつてのですか。」と葉月に気づいた門兵が葉月の頭を下げ話しかけた。

葉「ええ、つい今しがた。それでどうしたのですか？白帝様も今日はどうしたのですか？」

「いやなに。天香と月詠に相談したい事があって来たのだが、二人が居ないから言伝を頼もつか悩んでいたところなんだ。」と説明する白帝

葉「相談事ですか？もし、構わないのでしたら私が相談に乗りますしょうか。」

「葉月殿がですか・・・（確かに二人より先に話して意見を聞いて見るか。）それは、助かります。」と考えて答えを出す白帝

葉「でしたら、お入りください。案内しますので。」と白帝を中に招き入れる葉月

「分かりました。お願いします。」と葉月と共に門をくぐり店に入る白帝

「昨日も来たわけだが、今日は何を？」と店の中を見渡す白帝

葉「はい、昨日用意したのは、店の中・・・主に商いをするための準備でした。奥は姫様達と私たちの寝床となっております。あと今日は生活用品の買い付けです。」と歩きながら説明してくれる葉月

「なるほどな、通りで人が少ないわけだ。だが、生活用品は持つてこなかったのですか？」

葉「持つてはこれませんが、神界・魔界、人間界では違いますから。もし万が一、人間が入って来て、モノに触ってもしたらどうなるか分からないので、こちらで揃えるのです。」と説明してくれる

「そういう事ですか。（・・・そんなに危険があるモノなのか？）と内心疑問に思う白帝

葉「つきました。白帝様、どうぞ中にお入りください。」とドアを開け中に招く葉月

「ああ。ありがとう、では失礼する。」と中に入る二人中に用意されている椅子に座る

葉「お茶を用意させますので、しばらくお待ちください。」と白帝が座つたのを確認すると葉月は部屋を出て行った。

しばらくして、葉月が茶を持ってきて白帝に出す。そして、白帝の向かいの席に座り聞く体制に入る

葉「お待たせしました。それで、相談と言うのは一体？」

「ああ、実は・・・（説明中）」と医者育成のためと費用につ

いての相談を葉月にしている白帝・・・やがて

「・・・と言う訳なんだが。」と説明を終えた白帝

葉「なるほど。医者と資金ですか。・・・医者でしたら人間の医学に詳しい者が確か神界・魔界に居たはずですから、姫様達に伝えておきます。資金についても、もとより、白帝様のサポートの為です。ので構いませんよ。それも、姫様達に伝えておきましょう。」と何ともあっけなく終わった。

「オレが言うのも何なんだが、そんなに簡単に決めていいのか？」と不安ながらに聞く白帝

葉「はい。姫様達より”白帝様第一”と申されておりましたから、ご安心ください。」

「・・・分かりました。では、二人が帰って来たら伝えておいてください。自分の方からも伝えておきますので。（天香、月詠。お前たちの想いは嬉しいがもう少し考えてくれよ。）」「と内心想う白帝である

葉「それで、白帝様。もうこれからの予定はないのですか？」と葉月が予定を聞いてきた

「ええ。後は明日の訓練の準備位ですし、後は文官たちからの仕事が少ない位ですが。」と答える白帝

葉「あの・・・でしたら・・・以前お話した、私との手合わせを・・・お願いしたいのですが・・・よろしいでしょうか？」ときこちなく言う葉月

「別にかまいませんよ。時間もあることですし。それに葉月殿と手合わせをしている内に二人が帰ってくるかもしれないね。」と了承する白帝

葉「（ガバツ！）ありがとございます！！では、さっそく裏庭に行きましょう！！」と勢いよく立ち上がると白帝を裏庭に連れて行く葉月

裏庭は、十数人が余裕で訓練が出来るようなスペースがありその周りを先程まで訓練していた神兵と魔兵が囲んでいた。ちなみに天香、月詠と来た諜報部隊もこの屋敷に住む予定である

そんな状態の裏庭の真ん中では、白帝と葉月が向かい合っていた
「何やらギャラリーが多いんですけど？」

葉「すみません、白帝様。他の者達にもいい刺激になるので・・・
迷惑でしたか？」

「いや、構いませんよ。・・・では始めますか。」と春風を出現させ構える白帝（天生牙以外は城に置いてきている、服装は鎧なしの袴のような格好である）

葉「・・・はい。彼の白帝様とこうして立ち会えること、この葉月、全力でお相手いたします。」とこちらも剣を構える、それと同時に魔力を開放する

その魔力を感じ取り白帝は
「（こうして魔族と戦うのはまだ2回目だが、だが分かる・・・
葉月殿、サタンと比べてもそれ程差は感じられない・・・油断は出来ないな。）」と気を引き締める白帝

（ちなみに葉月の実力は魔界五指の中で5である。1と2は魔王とサタンである。3と4は魔獣なので何処に居るか分からないでいる。なので葉月の全力を受け止められるのは魔王だけなのである。）

葉「スウ〜ハア〜・・・行きます。」と消える葉月

（キンツ！！）と白帝が葉月の突きを防ぐ

葉「！？・・・流石ですね。全力での”瞬点”の突きを止められるとは思っていませんでした。」と驚くがすぐに白帝から距離をとる

「イヤ。行き成り危なかったよ。何とか反応できたくらいだ。」

葉「そうは思いませんでしたか？」

「葉月殿はオレを過大評価しすぎだと思つのですが。」

葉「そんな事はありませんよ。・・・行きます！」と再び迫る葉月

剣が白帝の頭上に迫る

”キンッ”と白帝が片方の小太刀で止める

「はああ!!」ともう片方の小太刀で葉月の脇を狙う・・・が

”ブンッ”と葉月が地面を蹴り白帝の攻撃をかわす。その際、白帝の頭上を飛び越え白帝の背後に回り剣を振り下ろす

当然、反応する白帝は回転と同時に受け止める

「葉月殿は、なかなか早いですね。」

葉「褒めていただきありがとうございます。そういう白帝様も私の速度によくついて来れますね。」

と互いに剣を交えたまま動かない2人

”バツ”と互いに離れ距離をとるが・・・再び

「ハアアアア〜」と距離を詰めて行き

”キンッキンッ”剣が交わり

”ドオオオオンン”と白帝の攻撃が地面を砕き

”キンキンキン”と剣が激しく交差する

その速度は早くなって行きもはや観戦者たちの眼には見えず、見えるのは剣を交えている2人のみ

やがて・・・猛攻が止んでお互いが最後の1撃を出そうと構えて・・・仕掛けた

葉月は最初に見せた瞬点で迫るが、それは最初に比べて違い早くそして、魔力の桁が違いすぎた

対する白帝は剣を逆手に構え、目を瞑り気配を感じ取る。葉月の突きは早すぎて目では捉えきれず周りの空気を感じ取る・・・そして・・・

「そこっ!!」と目を開き白帝の右から来た斬撃を防ぎそのまま身体を動かして左手に構えた剣を葉月の首筋に当たる白帝

「・・・終わりでもいいですか？」

葉「ええ。私の負けですね。」

と互いに剣を降ろす

「ふう〜。葉月殿、ありがとうございます。」と春風を消して葉月に手を差し出す白帝

葉「いえ、こちらこそ久々に全力が出せました。こちらこそ感謝ですよ。」と白帝に手を差し出し互いに握手を交わす

そこに・・・

天・月「ただいま〜。(ただ今帰りました。)」と店の方から天香・月詠の声が聞こえてきた

「どうやら、帰って来たみたいだな。丁度いい、先程の話をするために2人に会いに行くか。」

葉「そう居ましようか。では、先程の部屋でお待ちください。姫様達とお茶を持っていきますので。」

「わかりま・・・。葉月殿、少しお願いが。」と葉月に願い出る

葉「はい?」と首を傾げる葉月

「出来れば簡単な湯あみをしたいのだが、何かないか?」と答える白帝

先程の戦闘で二人は土埃がついており汚い格好である、流石にこの格好で2人に会う訳にもいかないにでなるべく綺麗にしていきたい白帝

葉「そうですね。それでしたら、着替えと拭くモノを用意させますので先程の部屋でお待ちください。」

「分かりました。助かります。」と葉月に礼を言う白帝

葉「いえ、では私は姫様達を出迎えに行つてまいります。着替えなどはすぐに持って行かせますので。」

「分かりました。部屋で待っていますね。」

葉「では。」と白帝に礼をして店に戻る葉月

「オレも戻るか。」と白帝も先程の部屋に戻る

部屋に戻り着替えと簡単ではあるが身体を拭いた白帝は天香・月詠が来るのを待っていた。

（白帝が着替えている最中に二人の押し入りを期待していた皆様、ごめんなさい。私にそのようなシーンは書けそうにないですよby作者）

しばらくして

”コンコン”と扉を叩く音がしたので

「どうぞ。」

葉「失礼します。お待たせしました。白帝様、姫様達をお連れしました。」と入ってきた葉月が答える

天「全く、今日も六花様が来るんだったら挨拶周りを月詠ちゃんに任せて六花様と二人でお話来たのにな。」と葉月の後ろから出てきた天香が文句を言っている。

月「天香様。挨拶は大事ですよ。それに六花様と二人きりになりたいのは、私も同じなんですからね。」と天香をたしなめようとするが最後は天香と同じである

「2人ともすまないな、急に来ることになってしまつて。本来なら昨日言っておけばよかつたんだが・・・」と申し訳なさそうに言う白帝

天「気にしなくてもいいわよ。私たちも今日の予定を話しておけば良かったんだし。」

月「そうですね。六花様。それに、葉月さんから話は聞きました。人材と費用は私たちが用意できますので安心してくださいね。」

「そうか、ありがとな二人とも。」と二人に礼を言う白帝

天「医者については、お父さんに連絡しておくから近日中には連絡が来ると思うわ。」

月「費用についてもある程度の目星が経つたら言ってくださいね。用意して置きますから。」

「わかった。まとめ次第、連絡するよ。」

としばらく話し込みそろそろ白帝が帰る時

「では、今日はもう帰るよ。今日はありがとな天香、月詠、葉月殿。」と礼を言う

天「ううん。また、相談事があったら来てよね。」

月「そうですね、六花様。私たちの役目は六花様のサポートなんですからね。」

葉「またいらしてください。その時はまた手合わせお願いしますね。」

「ありがとう。楽しみにしているよ。」と言って店を後にする白帝

余談

城に帰ってきた白帝は、一日中政務で白帝に会えなかったからか十六夜に抱き着かれ

十六夜「えへへ／＼／＼六花様」と甘えられたそうです。

第44話（後書き）

瞬天・・・”瞬”で相手の懐に潜り込み相手の”点”を狙う
接近戦用の瞬動術

クツ！戦闘シーンが書けない！！

・・・最後はいらなかったかな。

第45話(前書き)

やっと書けたぜ。

今回も微妙です。ごめんなさい。

第45話

休日明けの訓練が再開され、予定されていた周辺の賊討伐による実践による訓練もいよいよ残り一週間。今回の討伐は羌族の住まう土地の近くまで討伐に来ていた。今回は距離があり賊の討伐にも時間が掛かるので遠征である。

そんな中で・・・今、天幕の中では・・・董穿が窮地に立たされている！！

「・・・それで、烈刃殿。その子供は誰なんですか？さらって来たんですか？」と白い目で見える白帝

昇「そうですよ、烈刃様。幾ら彼女が出来ないからって・・・誘拐は・・・さすがに・・・それに・・・まだ子供の・・・」と哀れに太守を見る張安

ちなみに今回の遠征で来ているのは、白帝隊、董穿隊、張安隊である。今は天幕にて明日の討伐についての会議が開かれている

烈「ちよっ！！お前ら！！いくら俺でも、そんな真似はしない！！」と誤解を解こうとする董穿

今、董穿の腕に抱えられているのは歳が10歳ぐらいの女の子である。着ているモノは所々汚れてはいるが大きな怪我はしていない
烈「いいから！オレの話聞いてくれ！！」と話をしようとする

董穿

二人は黙って聞く体制に入るが・・・

「その前に烈刃殿、その子を貴方の天幕に移れていってください。」

烈「なぜだ？」

「その子を抱えたまま話す気ですか。それに見た感じ怪我はありませんが酷く弱っているようですからその子を安静な場所に移しま

しょう。」

烈「なぜ。その場所がオレの天幕なんだ？」

「なぜって？拾ってきた当事者が面倒を見るためですが？何か。」

昇「そうですね、烈刃様。見つけた本人が面倒を見るべきですよ。」

烈「しかし・・・」と納得しない董穿・・・そこに

「では、轟胡様達に”烈刃殿が彼女欲しさに幼女をさらって来た”と報告しますが。どうします？」と白帝の脅し、手にはいつの間にか書簡が握られていた

烈「ちよつと待て！！何て報告を使用としているんだお前は！！」

「それが嫌なら早く移動しましょう。会議はそこでもできます。」

烈「・・・分かった。」としぶしぶ了承する董穿

〔董穿の天幕〕

子供を寝台に寝かせ、董穿は子供を拾った時の事を話した
それによると

・董穿が少数の部隊を率いて周辺の様子を探っていた時、森の奥から何やら戦闘の気配があったので急行

・現場では、十数人の死体がありその中で生存者を探したが生きていたのはこの子だけ

・近くを捜索を行ったが敵兵らしきモノは居なかった

・そしてこの子を陣営に連れて帰ってきた

以上

烈「・・・と言う訳なんだが。どう思う？」と二人に意見を聞く

「そうですね。状況的に見てその子は、何処からか逃げて来た。

と言う事でしょうか。」

昇「戦闘していたのは、恐らく、この子の護衛達でしょう。そして追ってきた敵に遭遇して戦った結果、この子だけが助かった。幾らなんでもこの子に武の心得があるとは思えませんし・・・それ

にこの子は・・・」と少女を見つめ

烈「それに？」と傾げる董穿

昇「恐らく羌族の者ではないかと。」と答える張安

烈「！？羌族の子供がなぜ追われているんだ？」と少女を見つめ

考える董穿

「・・・羌族内での仲間割れ、あるいは・・・賊の襲撃？」と考えるも答えは出ない白帝

昇「今の情報では何も分かりませんが・・・この子が目を覚ますまで待つしかありませんね。」と答える張安

烈「そうだな。よし、次は明日の作戦についてだが・・・」と明日の討伐に切り替える白帝達、確かに少女の事は気になるが今は目的である賊討伐に専念せる。

会議が始まって2時間、そろそろ終わるといふ頃に女の子が目覚めた

少女「こ、ここは？」と少しずつであるが目を開けて起きようとする少女

烈「気が付いたか。六花殿、何か消化のいいモノを。後、簡単に湯あみの用意もさせておいてくれないか。」と白帝に指示を出す董穿

「分かりました。食事の方はすぐに持って来ましょう。風呂は兵に準備が出来たら呼びに来させましょう、では。」と天幕を出る白帝

しばらくして・・・お粥を持った白帝が戻ってきた

「お待たせしました、烈刃殿。」と入ってくるなりお粥を董穿に渡す

烈「ああ、ありがとう六花殿。」と受け取る董穿

昇「コレは、おいしそうな匂いですね。」

少女「グウウウ」・・・ノノノ」と赤くなる少女

烈「どうやら食欲はあるみたいだな、食べられるか？」

少女「ノノノ」コク」と首を縦に振る

烈「よし、熱いからな気を付けて食べるんだぞ。」

少女「ッ！おいしい・・・」と一言、その後は綺麗に完食してくれた。

「それで、何か分かりましたか。」と離れた所で白帝と張安が話をしていた

昇「はい、最初は護衛の者たちがどうなったか聞いてきましたが、烈刃様が説明して落ち着かせました。彼女の名前が 光琳こうりんで羌族の出と言う事が分かりました。」と説明する張安

「そうですか。他には？」

昇「いえ、まだ・・・ただ・・・」

「ただ？」

昇「話からして高貴な出ではないかと。」

「高貴？・・・羌族をまとめる族長の身内か、將軍職に就いている者の娘・・・ですか？」

昇「確定には至りませんが、恐らく。」

「ますます、謎が増えて行きますね。なぜそんな身分の者が逃げるか。」と首を傾げる白帝

そんな時

兵1「白將軍、湯あみの用意が出来ました。」

「分かった。・・・さて女性の兵に頼んで光琳ちゃんを綺麗にしてみらわないとな。烈刃殿連れて行ってくださいね。」

烈「分かってるよ。さて行くこうか。」と光琳に手を差し出す

光「はいノノノ」と董穿の手を掴む

そして二人は天幕を出て行った

「・・・昇華殿。」

昇「何かな六花殿。」

「オレは・・・烈刃殿が間違いを起こさない様に轟胡様たちに報告した方がいいと思うんだが・・・どうでしょう。」

昇「そうですね。私としましても烈刃様が間違いを起こすのは

何とも避けたいところですし、やはりこういうのは、順序と言うモノがありますし。何より光琳さんの身体がまだ・・・」と二人がこんな話をしていると・・・

烈「貴様ら〜〜〜〜！！なんちゅう会話をしてるんだ〜〜〜〜！！！！」と怒号をあげて戻ってきた

「何って、烈刃殿が女性に飢えすぎて光琳ちゃんに手を出さないか心配で。」

昇「手を出すにしても、ここはやはり轟胡様と董苑様に報告をしてから事に及んだ方がいいのではないかと。」

烈「だから、なんで俺が光琳に手を出すことが決定してるんだよ！！おかしいだろう！！それにオレは子供には手は出さん！！」

「でも、光琳ちゃん。可愛いでしよう？」

烈「ん、・・・確かに可愛いと思うが・・・」

昇「それに今は子供でも後5、6年もすれば美人になると思いますがすよ。」

烈「美人に・・・しかし・・・」と考える董穿

「（昇華殿、少なからず烈刃殿は光琳ちゃんを意識しているみたいですね。）」

昇「（その様だね、六花殿。コレは姫様に続いて、いよいよ太守である烈刃様の祝言が近いかもしれないね。）」

「（少なくとも後、数年は必要ですけどね。・・・そうなった場合、周りは反対しないのですか？異民族との交わりは失礼だが、差別されるのでは。）」

昇「（まあ確かに六花殿がそう思うのも無理はないね。でも、その時は烈刃様が頑張るでしょう、惚れた女のためにね。）」

「（まあその時は、協力は惜しみませんけどね。）」

「「ふふふふ・・・」」

烈「って！その二人、何の話をしている！！」

「何って、どうやって面白おかしく豪胡様たちに報告しようかの相談ですけど。」

昇「そうですね。あまり真面目に書いても重いだけですから、ここは軽く事の次第をですね・・・」

烈「待て！何を面白おかしく報告するんだ！昇華様もここは真面目に報告をですね・・・」と文句を言っ歩いていくので

「・・・分かりました。そこまで言うのでしたら、真面目に書きましょう。(チラ)」と張安にアイコンタクト

昇「(コク)・・・そうですね。太守である烈刃様の命ですしね。」「こちらにもアイコンタクトで理解したのか

烈「頼むぞ二人とも、オレの方でも報告書は書いておくから、後で・・・」

「烈刃殿(様)の幼女趣味の報告を、真面目に包み隠さず書いて豪胡様たちに報告します！！では、(ダツ！)」「と声を揃えてダツシユで天幕を出る二人、そして・・・

烈「・・・待てやコラアアアアア~~~~！！そんな報告をしたらオレの・・・太守としての威厳が~~~~。」「と二人を追いかける董穿・・・あなたに太守としての威厳なんてありましたっけ？

烈「ドチクシヨオオ~~~~！！」

と明日の戦を控えての息抜きであって。

烈「俺が息抜き出来てねえだろうがあ~~~~！！」

貴方はすでに・・・

烈「何、続きが気になるんだけど!？」

・・・

烈「何とか言え~~~~！！」と空に董穿の声が響き渡ったそうなの。ちなみに、報告は・・・秘密だ!!!

烈「オイ!」

第45話（後書き）

ごめんなさい。

昇華のキャラが崩れました。

ちなみに新キャラ光琳は彩雲国の光琳で性格は大人しい感じにしていきたいと思います。雛里みたいでもいいかもね。

第46話(前書き)

お待たせしました!!

第46話

光琳を保護した翌日、白帝達は予定通り賊の討伐に向かった。(光琳が狙われて可能性もあるので同伴している)

一行は賊が潜伏しているという砦を目指し森を進軍中である
烈「しかし、良かったのか？光琳を連れて来てしまつて。これから賊の討伐に行くのに。」

「仕方ないでしょう。可能性とは言え光琳ちゃんが狙われているかもしれないし、あのまま陣営に居てもらうより、こうして目の届くところに置いていた方が守りやすいですね。」

昇「白帝殿の言う通り、その方が光琳殿も安心するでしょう。」
と3人が話していると前方より斥候が帰ってきた

兵「報告します！」

昇「砦を発見しましたか。」

兵「はい！賊の砦らしきモノを発見しました。ただ今、隠密部隊が監視を続けています。」

昇「そうですか、数はどうですか？」

兵「はい。見た感じですと7千は居たと思われます。」

烈「此方よりも多いな。分かった、下がって休め。」

兵「はい！」と兵が下がる

やがて、砦が見えるまでに接近した白帝達

烈「さて、こちらのよりも2千ほど多いが問題はあるか？」と2人に確認(ちなみに数は白が800 烈が2500 昇が2000の5千弱である)

昇「特に問題はないでしょう。賊は所詮は烏合の衆、統率がとれ

ているとは思えません。」と昇華

「その通り、それに少しでも賊が多い方が兵達の経験にもなります。」と白帝

烈「分かった。では、昨日話し合った通り、先鋒は任せたぞ、六花殿。俺達は砦を包囲しながら後方から賊を叩く。それぞれが配置に付いたら先鋒である六花殿の合図で始めるぞ。」

昇「気を付けてくださいね、六花殿。」

「了解。白帝隊が正面から砦の門を破って、それが合図で中に突撃をかけ、昇華殿の隊が砦の後方より攻め込んで挟み撃ちにする、烈刃殿の隊は逃げ出した賊の保護または捕縛ですね。」

烈「その通り。ただ今回の賊相手では六花殿の兵では少ないから話した通り、オレの隊から500の兵を出すから使ってくれ。」

「分かっていますよ。では、配置に付きますか。・・・それでは烈刃殿、光琳ちゃんの傍は離れないくださいね。いくらこれが白帝隊が主体とは言え、大將は太守である烈刃殿なんですから。」

烈「分かっている。今回は前線には行かずに後方で指揮しながら光琳の護衛をしているよ。・・・2人と武運を祈る。」と二人を見る

「「では!!!白帝隊!!!（張安隊!!!）行くぞ!!!（行きますよ!!!）」

とそれぞれ隊を引連れて行った。

烈「さて、こちらにも配置に付くか。・・・董穿隊!!!こちらも行くぞ!!!」

（砦の門正面）

今、白帝隊が配置に付き董穿隊と張安隊の配置完了の知らせを待つ・・・やがて

兵1「報告、太守様の部隊、配置完了しました。」

兵2「報告、張安様の部隊も完了しました。」とそれぞれの隊から連絡が来たので

「分かった。・・・ではこれより、皆に突撃をかける！！お前達、覚悟はいいか！！」

と兵達に叫ぶ

兵達「もちろんです！！」と同じく叫ぶ兵達

「よし！！全員、抜刀！！」と兵に伝え、白帝は鉄砕牙を抜く、

白帝が抜いた鉄砕牙は一見、サビ刀に見えるが・・・

「行くぞ、鉄砕牙よ。お前を使うときが来たみたいだ。存分に暴れるぞ！（ブッ！）」と一振りすると刀が巨大な剣になり周りの兵を驚かせた

兵1「なあ。やっぱり白將軍って神の御使い、なんだろうか。」

兵2「そうだな。噂じゃボロ屋敷の中を豪華な住まいにして、難民や貧しい人たちの寢床にしたそうだしな。」（この話は賊討伐が終わったら書きますよ。）

兵3「それに、白將軍が、持つてる武器は全部、神様から頂いた神具だぞ。だったらあの武器が変化するのも頷ける。」

兵4「あと、白將軍が出された案件や政策は天の知識だそうだぞ。」

と次々と兵達が話し始める。・・・しかし、その内容は差別するモノではなくむしろ、自分たちを率いている白帝を誇りに想っている話である。

そんな兵達の声を聞いた白帝

「（「神の御使い」か・・・天の御使い と似たようなものか。

出来ることなら他の郡や都市には知られたくないな、敵の正体がかめるまでは。）」と考える白帝だが、今は目の前の敵に集中する

「お前たち、話はこの戦が終わってからだ。・・・行くぞ、風の傷！！（ブッ！！）」と勢いよく鉄砕牙を振るい

（ドオオオオオンンン）

風の傷で門を破壊、そして・・・

「突撃！！賊どもを殲滅せよ！！」と兵達に命令を下す。

兵達「ウオオオオオオオ」と一斉に砦になだれ込む

砦に居た賊たちは、突然の轟音と共に来た太守たちの軍に驚きながらも抵抗をするが、所詮は烏合の衆、数は居ても統率が取れておらず賊たちは混乱していた。

そんな賊たちも早々に片付けて行く白帝とその部下たち、白帝はその巨大な牙である鉄砕牙で賊を葬り、部下たちは数人で連携しながら賊たちを倒していった。

しばらくして、砦の反対側から来た張安の部隊と合流

昇「おお！六花殿、無事でしたか！」と弓を撃ちながら賊たちを退治する張安

「昇華殿もな！」と近くの賊を切り捨てる白帝

昇「六花殿、賊の大将は見つけましたか？」

「イヤ。恐らくまだ中でしょう。今から小隊を率いて中を調べます。此処はお任せしても。」と張安に確認

昇「大丈夫です。後、村人の話では砦の中に女子供が近くの村から攫われたそうです。そちらも、頼めますか。」

「分かりました。では、お任せします。・・・その隊はオレと共に来い！！」

兵たち「はい！！」

〔砦内部 地下〕

白帝たちは、地下へと続く道を発見し進んでいくと牢屋を発見した。

兵1「白將軍！！中には攫われた女子供が居ました！！」

「よし！お前たちは、外の安全が確認できたら、その人たちを連れて砦から出る。後の者はオレと共に奥に行くぞ。」と白帝はその場に10人ほどの護衛を残し後は地下の奥へと進んでいった。

奥には部屋ばかりで人はいなかったが、最後の部屋からは人の気配がした。それも、複数の声も聞こえてきた。

「???」「ちくしょう!!!あいつ等になんて報告すりゃいいんだ!」「と叫ぶ男

賊1「しかし、頭。報告って一体どうやるんですか?外じゃ軍が暴れていますし、早いとこ逃げましょうよ。」

賊2「そうですね。今はまだ上は混乱してる筈ですから、うまくいけば逃げ切れますよ。」

頭「そうだな。よし!いくぞ、お前ら!!!こんな処さつさとおさらばだ。」と気配は扉に近づいてくる。

「(どうやら、中にいるのは首領のようだな。しかし、あいつ等か・・・気になるな・・・よし。)お前たち、突入するぞ。相手は殺すな、生け捕りにする。」

兵達「(コク)」「」

「よし、行くぞ!!!(バーン!)」と扉を蹴破り部屋へと侵入。突然のことに賊たちは驚き後退する

頭「テメエらか!オレの砦を攻めている軍ってというのは!?!」と後退するも入って来た白帝たちに怒鳴る首領

「その通りだ。涼州が太守、董穿様の軍だ。お前たちには聞いたことがあるから、生け捕りにする。抵抗はするなよ。」

頭「はっ!やれるもんなら、やってみな!」と武器である斧をとり白帝に襲い掛かる。

・・・しかし

「遅い。」と呟くと斧の攻撃をかわし首領の顔を掴んで、そのまま地面に叩き付けた

(ドカツ)と叩き付けられた首領は気絶した

「お前たちも抵抗するか。」と残りの賊を見渡す

賊1・2「いえ。しません!」

「よし。こいつらを連れて行け。逃亡は許すなよ。」

兵達「はっ!」「と賊たちを縛り上げ連れて行く兵達

「さて、後は・・・ん？これは、書簡？」と机に置いてある書簡を手に取り内容を読もうとするが

「これは、漢文じゃないな。何かの暗号か・・・あいつらに聞いてみるか。」と書簡を持って部屋を出る白帝

地上では張安が後処理の指揮を執っていた。

「昇華殿。」

昇「六花殿！無事でしたか。」

「ええ、何かありましたか。」

昇「いえ、六花殿のおかげで攫われた者たちもみな無事です。賊の大将も今は縛り付けて兵たちに見張らせています。逃亡した賊は烈刃様の隊と勝手ながら六花殿の隊を追撃に出させました。」と報告する張安

「いえ、かまいません。で、今は何を？」

昇「はい。投降した者たちの対処と死者たちの弔いです。今回の戦闘ではこちらの被害はありませんでした。」

「そうですね。分かりました。・・・処で昇華殿、この文字は読めますか？」と先程の書簡を見せる

昇「これは・・・恐らく羌族たちが使っている文字だと思われるます。」

「！読めますか？」

昇「いえ、私はただ見たことがあるだけなので、読むことはできません。申し訳ないです。」

「そうですね。そうになると、捕まえた首領に聞く必要があるな。・・・早速行ってみます。」

と向かうが

兵「賊だあ~~~~」と兵が叫ぶ

「！？」急ぎ向かう、張安も同様に駆け出す

向かう先では金属音の音が鳴っていた。どうやら敵との交戦中らしい

そして、着いてみればそこでは、無残にも細かく切り殺された賊の首領の亡骸が転がっていた。そして、兵士たちに囲まれた黒いマントに身を包んだ賊の戦闘が行われていた。

「（これは・・・ええい！考えるのは後だ！今は！！）・・・お前たちは下がれ！！周囲に警戒態勢！他に侵入者がいるかもしれない！警戒を怠るな！！昇華殿にはその指揮を頼みたいのですが。」

昇「構いませんよ。此処はお任せします。・・・その者たちは私と共に来なさい！それと、烈刃様に警戒の報告！！」と兵に指示を出し、張安も駆け出す

兵達「了解！！」と張安に続く兵達、その場に残ったのは白帝と数人の兵達である

「（さて、この者から流れてるのは邪気か？・・・となると、その元を切れば何とかなるか。）」と賊の体から発せられる邪気を感じ取る白帝

「（恐らくは、その邪気で操られているはず）“カタカタ”・・・ん？」と白帝の腰の天生牙が震えている

「天生牙・・・分かった、頼むぞ。」と天生牙を抜く

「（見える、邪気の元が。）」今、楽にしてやる。「“ダッ！”と相手に駆け出す白帝

“ダッ”と相手も白帝に向かって駆け出し武器である剣を振りかぶる

“ガキンツ！！”と振りかぶった剣と天生牙がぶつかり合う

“ギギ・・・ギギ・・・”刃と刃がせめぎ合う

賊「（頼む・・・殺せ・・・早く・・・）」と刀を通して賊の思いが流れ込んでくる

「どうやら、全て操られているという訳ではないようだ。待っている！今、助ける！！」と相手の剣を弾き、そのまま賊の後ろに浮かんでいる黒い塊を切る

“ズバツ”傍から見れば何もない空間を切ったかのように見える

が、白帝は邪気の塊を切った

“ シュウウウウ ” と邪気が天生牙によって浄化され、賊はその場で崩れ落ちた

その後、白帝は兵たちに董穿と張安に報告を頼み、白帝は賊の手当てをしながら見張っていた。その時、賊のマントをとったが正体は男で、暗殺を得意とするような者ではなかった。

やがて、報告を聞いた董穿と張安が戻ってきた。光琳も一緒である。

白帝が事情を説明するより早く光琳が賊の男を見るなり

光「 叔父様! ? 」と賊の傍に駆け寄った

白帝達は、事情を聴くために陣に戻るのであった。

第46話(後書き)

第47話

その後、白帝達は光琳から事情を聴くために陣営に戻ってきた。今は会議用の天幕の中に居る。

中に居るのは、白帝、董穿、張安、光琳 である。光琳の叔父は、まだ意識が戻らないので離れた天幕に兵達の監視の中に居る。

ちなみに、それぞれの天幕の外には式神である戦鬼が分離して待機している

烈「では光琳、話してもらおうか。君が何者なのか。なぜ、あの森で”襲われた”のかお。」

光「はい。私が知っていることをお話しします。」と光琳は話してくれた。

- ・ 光琳は羌族の族長の娘
- ・ あの日は狩りの為に森に来ていた
- ・ 狩りの最中に何者かに襲撃された
- ・ 叔父は族の中では父である族長の弟で將軍であること

「その襲撃した者達はどんな格好をしていたか分かるか。」

光「はい。みんな叔父様が着てきた黒いマントで姿を隠していました。」

「と言う事は、”討伐した賊の襲撃”か”羌族内部で族長の娘である光琳暗殺”。・・・同じマントから考えられると後者か。」

烈「だが、族長の娘を殺したらバレた時が大変たぞ、自分たちの首が飛ぶんだからな。」

昇「そうですね。しかし、場所は適しています。あの場所は賊が出ますし何より狩りに来ていた少数です。暗殺を仕掛けるには丁度いい場所です。」

光「でも！叔父様は暗殺を考えるような人じゃありません！！」

「落ち着いて、君の叔父さんは操られていた。」

烈「それは本当か六花殿！」

「間違いないでしょう。体から邪気を感じましたから、今は浄化されていますから心配はありません。ただ・・・」

烈「ただ？」

「だが、邪気を体に溶け込ませたのが問題です。見た感じそれほど強い邪気ではなかったですし、邪気で人が操られる位でした。」

昇「強ければどうなるのですか？」

「詳しくは城に帰って天香たちに聞かないと別れませんが、恐らく魂が完全に汚されて“人”としてなくなるでしょう。」

烈「“人”じゃなく“化け物”になると？」

「恐らく、まあ今回は大丈夫でしたけどね。」

烈「そうか。」

と話していると、天幕の外から兵が来た

兵「董穿様。賊の意識が戻りました。いかがいたしますか？」

烈「よし、会おう。今からそちらに行く。」

兵「分かりました。」と下がる兵

烈「さて、行くか。光琳、お前も来るだろう。」

光「はい！」

烈「では、行くぞ。」

と皆は移動した。

???「ここは？」と男が寝台から体を起こす。

光「豹樹ひょうじ叔父様!!」と光琳が豹樹に抱きつく

豹「光琳!？お前がどうしてココにいる!？」と光琳を抱きしめる

烈「気分はどうだ？」と董穿が豹樹に話しかける

豹「貴方は？」と光琳を離し豹樹は董穿を見上げる

烈「涼州が太守、董穿だ。貴殿は我らが保護している。」

豹「保護？」と首をかしげる

烈「そうだ。説明するから横になっている、まだ無理はしない方がいい。」

光「そうですね。叔父様は横のなっていてください。」
と言つて董穿は話し始めた、自分達が賊討伐に来たこと、それにあたって光琳の保護、そして、賊討伐の最中にあなたが操られていたということ。

豹「そうですね。私は操られていましたか。確かに此処に来るまでの記憶はありません。ただ・・・あなたに救われたのは分かりました。」と言つて白帝を見上げる

「紹介がまだでしたね。白帝六花です。説明が終えたところで豹樹殿、貴方に聞きたいのですが。」

豹「構いませんよ。私が知っていることはお話ししましょう。」

「では、最近羌族内部で変わったことはありませんでしたか。」
豹「変わったことですか。」

「そうですね。よそ者・よそ者・・・他の民族とは殆ど関わりませんし、それはあり得ませんし。仲間割れ・・・もないですね。それにあなた方は、涼州の者、知っているでしょう近く涼州と羌族で戦が起こるのは。言わば敵同士、そんな時に仲間割れは起こしませんよ。本来なら私は殺されて光琳は人質となっている。」

「確かに我らは敵同士ですが、此方・・・嫌、オレの事情か。オレはある人物を探しているのだが、そいつは、なかなか正体を見せない。」

豹「白帝殿が探している者が羌族内にいると？」

「可能性ですが。それに、これから起こる涼州と羌族の戦は仕掛けられたと考えられます。」

「「「????!!!」「」とその場にいた全員が驚く

烈「六花殿。それはどういう事だ。」

「烈刃殿と昇華殿は知っているでしょう。俺が探している者が何者なのか。」

烈「ああ。」昇「はい。」

「そいつは、今、力をつけるために争いを起こすつもりでいる。・・・が、早々戦が始まるとは思えない。よって・・・」

昇「戦を起こさせるための仕掛けをする。」

「その通りです。なので、今回の涼州と羌族の戦も仕掛けられた可能性があるので。」

烈「なるほど。だが、それなら光琳が襲われたのか分からんな。」

昇「いえ、それならば大体、見当が付きます。」

烈「つと言つと。」

昇「恐らく口実が欲しいのでしょうか。涼州に攻め入るための口実が。」

「なるほど。族長の娘である彼女が亡くなれば攻め入る口実になると。」

烈「だが、死んだからと言って涼州に攻め入るとは思わないんだが。」

それを聞いた白帝と張安は・・・

「ハアアアアア~~~~」とため息をついた

「烈刃殿・・・城に帰ったら昇華殿に勉強を見てもらいましょう。暫くは知を蓄えてください。」

昇「そうですね。太守である烈刃様がこのようなことが分からないのであつては、他の者たちに馬鹿にされてしまいます。」

烈「なぜそうなる!？」

「説明はこれからします。・・・別に光琳を殺さなくてもいいんですよ。誘拐なりどこかに監禁するなりすればいいんですから。要は光琳を羌族内から姿を消させればいいんです。そして、恐らく黒幕が族長に光琳が涼州兵に殺された、または攫われたと言えば自然と矛先が涼州に向きます。それに、双方、戦の準備は整っているはずですし、後は切っ掛けがあればいいんですから。」

豹「なるほど。確かに兄者のことだ。愛娘の光琳が殺されたとなれば攻め込んでくるだろうからな。・・・だがなぜワシが此処にい

る必要がある？」

「恐らくそれはコレが原因でしょう。」と言って見せたのは皆の中にあつた書簡

豹「コレは？」

「賊討伐の際に皆で見つけた書簡です。賊の首領が持つていました。が、書かれているのが漢文ではなく羌族が使うものだと分かったので読んでいただけますか。」

豹「確かにコレは羌族内で使う暗号文だが・・・コレは!？」

光「何が書かれているの、叔父様。」

豹「光琳誘拐の命令書だ・・・」

全員「「「!?!?!???」「」「」

豹「しかも!!命令したのは兄者の側近の鹿賀だ!!」

光「鹿賀さんが!？」

と二人は驚愕している

「その鹿賀というのは何者なんだ。」

豹「鹿賀は族長である兄者の側近で知略に長けた男だ。まさか、こんな命令を出すとは・・・嫌、出すはずか・・・元よりあいつは野心があつた。族長になる野心が、そのためには今の族長である兄者を消す必要がある。そのための策か!!」

「(なるほど。奴はその野心に付け込んだか。)恐らくコレの回収と賊の首領暗殺をするために貴方を操り此処に来させたのでしよう。しかも、誰でもいいわけじゃなく最初から貴方を此処に来させるために。」

豹「どういふことですか。白帝殿。」

「この書簡を取戻し、賊の首領暗殺を完了したならば貴方は用済みです。恐らく目的が終えれば貴方は自害か兵に殺されていたでしょう。・・・それこそが敵の狙いでもある。」

烈「どういふ事だ？」

昇「烈刃様・・・」

烈「はい・・・」

「羌族の族長は情に厚い人とお見受けしますが、そんな情に厚い人が愛娘を攫われ、実の弟である豹樹殿が殺されれば間違いなく周りの制止も聞かずに涼州に攻め込むでしょう。」

豹「確かに兄者は武に優れているが知には疎い。それでは、鹿賀の思う壺だ!!」

烈「だが戦が始まり狙い通り族長が負ければ羌族の族長の座が鹿賀になるとは思えないのだが。」

「コレは予想ですが、族長の首を差出し、降伏の条件として鹿賀が族長の座に就く、と思われます。」

豹「なるほど。確かにそうすれば族長の座には就けるか。後継者である光琳と弟の私がないからな。」

光「では、今すぐに戻らなければいけません!!」

豹「確かにそうだ、しかし・・・」

昇「恐らくはもう遅いでしょうね。光琳殿が来て1日は経っていますし、豹樹殿に至っては操れないと知っていますから。状況的にみて敵の予定通りに運んでいます。」

「それに敵はこの陣の位置を掴んでいるはずです。早々に城に戻った方がいいでしょう。もし、攻め込まれたら5千の兵では対応できません。」

烈「そうだな。情報は手に入った。明日の早朝と共に城に向かう、準備にかかれ!」

白「了解。」昇「分かりました。」

二人は天幕を出て兵たちに帰還の準備をさせ始めた。

烈「では、光琳と豹樹殿はこの天幕に居てくれ。ああ、安心を外では兵が護衛としているから、何かあれば兵に声を掛けてくれ。では・・・」と言って光琳の頭を撫で董穿も帰還の準備にかかる。

頭を撫でられた光琳は赤くなっていた

光「/ / / /」

豹「(光琳・・・お前・・・)それも悪くないか・・・」

と小さく呟く豹樹

そして、予定通り白帝たちは早朝と共に涼州に帰るのであった。

第48話(前書き)

遅くなりました!!

今回は時間を少し戻します。

第48話

白帝は城壁から数千人の民たちを見ている。だが、その民たちは、もともと涼州の民ではなく、流民や貧困層の人たちである。何故、数千人の流民たちが居るにかと言うと以前、白帝が文官たちに言っていた策を実行するために文官たちが流民や貧困層の人たちを保護したのである。

「よもや、1週間でここまでとは、予想以上だな。」と流民たちを見つめる白帝

文1「はい。私たちも、ここまでとは思いませんでした。」

「流民たちに、今後の説明はしたのか？」

文2「はい。保護した者達、すべてに言っております。」

「そうか。何か反対はあったか。」

文1「いえ。むしろ歓迎されましたよ。住む場所も出来るし、仕事にも就けるんですから反対する者はいませんでした。」

「分かった。他に何かあったか。」

文2「特にありません。保護した者達には食事と白帝様が連れて来られた医者の皆様のおかげで餓死者と死人は出ていません。」

「では、流民たちを千人単位で分けて街に入れてくれ。オレは住居の準備をする。」と文官たちに指示を出し白帝は董豪から言われた屋敷に向かう。

（屋敷前）

董豪から言われた屋敷は門の近くに建てられていたボロ屋敷が数件ほど建っていた。

白帝はその一つである屋敷の前に立っていた。その傍では、董家の方々と天香と月詠が白帝を見ていた。

十六夜「六花様・・・」と心配そうに白帝を見つめる十六夜

天「大丈夫よ、十六夜ちゃん。」

月「そうですね、十六夜様。誰も六花様の事を怖がる人はいませんよ。」

そんな十六夜を励ます天香と月詠

確かに十六夜の心配は解る、白帝がこれからやろうとしている事は、白帝が隠してきた力を皆の前で見せるからである。それを見て、民たちが白帝を恐れるかもしれないからである。

そんな事を考えていると、白帝が十六夜の前に来ていた。

「十六夜、そんな心配そうな顔をするな。」と白帝が十六夜の髪を撫でる

十六夜「六花様・・・でも・・・」と心配そうに白帝を見つめる十六夜

「コレはオレが望んだことだ、十六夜・・・お前が気にすることではない。それに、コレは民たちの為でもあるし、何より、持っているモノは使わなきゃ意味がないからな。」

十六夜「六花様・・・」

とそこに兵が白帝の元に走ってきた

兵「白將軍！！流民たちの編成、終わりました！」と報告する

「よし、では第一陣を此処に連れて来てくれ。」

兵「はっ！」

「行くか。」と白帝は十六夜に背を向けて歩き出す。

やがて屋敷の前に戻って来ると、屋敷の前で困惑している流民たちが騒いでいた。

流民「なあ、俺達どうなるんだろうな。」「心配ないって、保護された時に言われただろう。俺達は国の政策で必要なだって。」「ただ、この人数を見てみるよ、国がこれ程の人数を受け入れるか

「よくて半分だぞ。」

とそんな声があちらこちらから聞こえてきた。

「その心配はない、皆の保護は俺が出した案件だ。最後まで責任は持って、誰一人として見捨てはしない。」と白帝が流民たちに言っている。

流民「だけど、住む場所はとうするんですか？」「そうですね。幾らなんでも、この人数をこの城下に住まわせるのは無理があります？」

「心配ないと言っているだろう。住む場所は今から用意する。」
屋敷の前に立ち懐から札を取り出す

その様子を見守る周りの者達、やがて白帝の身体から神気があふれ出すと、静かに言葉を紡ぐ

「彼のモノの時間を戻し、永久の時間と無限の空間を約束せよ」と白帝が神気を籠っている札を屋敷に向かって飛ばすと、（パアアアア）札が屋敷全体を囲むように結界を張る

すると結界に包まれた屋敷が、見る見るうちに以前のような立派な造りの屋敷になった。

それを見た者達は、ただ茫然と見ていた。天香たちでさえ驚いていた。

天「（幾ら私達神族よりも神気があるからって、ここまでの修復は一人では無理ね。）」

月「（先程、六花様が言っていた、永久の時間と無限の空間 恐らくは屋敷の時間を止めて中には尽きることのない何処までも広がる空間・・・この場合は部屋の数かしらね。札に籠められた神気の言霊で固定したのね。）」

「ふう・・・（流石にコレは初めてやるが、中々キツイな。神気を大分持って行かれた。まあ、時間の固定と空間拡張・・・コレは持って行かれて当然か。だが後、数回は出来るはずだ。）」

さて、此処が今日から、あなた方が暮らす仮住居だが、・・・驚

いてないで屋敷の中に入ってくれ。それと、屋敷に入る前に屋敷の門の前に居る兵達から鍵を貰ってくれよ、それがないと部屋には入れないからな。」と説明する白帝

白帝の言葉で我に返る流民たちは、白帝の指示通りに門の前にいる兵達からカギをもらい屋敷の中に入っていく。

「さて次だな。・・・第二陣を連れてこい！」

兵「は、はいっ!!」と兵は駆け出していく

十六夜「六花様、大丈夫ですか!？」と白帝に駆け込んでくる十六夜

見れば天香と月詠も走ってきた

天「六花様。無茶すぎだよ！」

月「そうですね、六花様!時間固定と空間拡張は膨大な力を使うんですから、幾ら私たちよりも神気と魔力があるからって一人で行ってどうかしています!」

と二人が白帝を責めたてる

十六夜「二人ともそれは本当ですか!？」

天「そうよ。十六夜ちゃん、時間固定と空間拡張には本来なら数十人の神族魔族が集まって行えるのよ。」

月「それを一人でやるなんて、体が持ちませんよ!？」

「三人とも心配してくれるのは嬉しいが、コレは俺が出した案件なんだ。出した本人が何もしないのはダメだろう。」

十六夜「そんなことはありません!六花様は私たちのために頑張ってくださいます!!」

豪「その通りだ、六花殿。」と董豪と董苑、董穿が歩いてきた

「豪胡様。」

豪「六花殿にはこの涼州のために尽力しているんだ。君が思っているほどにね。」

董苑「そうですね、六花君。貴方が出してくれた案件や政策でこの涼州がどんなに変わって来たか。」

烈「それに、流民や貧しい者たちのことを考えるのは、本来なら

太守であるオレの問題、それを六花殿に任せてしまうなんて自分が情けない。」

「董苑様、烈刃殿。．．皆さんの気持ちは分かりますがコレは俺が出した案です。何か一つでも民達のために自分の手でやりたいのです。」

天「六花様。でしたら私にも協力させてください。」

「天香？」

月「そうですね、六花様。私たちにも手伝わせてください。私たちもこの地に暮らしているわけですから少しでも皆の役に立ちたいのです。」と白帝の目を真剣に見つめ返してくる、やがて．．．

「分かった。出来るなら二人には使つて欲しくはなかったんだが、そこまで言うなら仕方がないか。では、天香たちにはオレの補助をしてもらいたい。」

天・月「ありがとうございます！！六花様！！」

そこに、兵が走ってきた。

兵「白將軍、連れてきました！」

「よし、次だな。直ぐに第三陣が入れるように準備をしておいてくれ。」

兵「はい！分かりました！」と準備に向かう兵

「では、よろしく頼むぞ、二人とも。」

天・月「はい！！」

十六夜「（私にも何か力があればいいのに．．．）」と自分が白帝の力になれない事に悔しさを覚える十六夜

そんな十六夜に白帝は

「十六夜、自分を責めるな。それにな十六夜、お前は十分にオレの力になっているんだよ。お前の存在がオレに力を与えてくれる。大切な人がいてくれるから。」と静かに十六夜を抱きしめる

十六夜「六花様／＼／＼」

「それでも十六夜が満足しないなら、頼みがある。」

十六夜「なんですか六花様？」

「久々に十六夜の手料理が食べたいんでな、城に帰ったら作ってくれるか？」

十六夜「・・・はいっ！！じゃあ今日は六花様にために頑張ってくださいね！！」笑顔で了承する十六夜

「ああ。楽しみにしているぞ、十六夜。」と十六夜を離し、天香たちを連れて歩き出す白帝

それからの白帝は天香たち神・魔族たちのサポートのお蔭で無事に作業が終了した。

十六夜たちが心配していた白帝に対する恐怖もなくむしろ・・・流民「白帝様！ありがとうございます！！」「これで安心して暮らせます！！」と感謝されるのであった。

文1「好かったですね、白帝様。皆の顔に希望が現れました。」

「そうだな・・・お前たちは怖くないのか？」

文1「白帝様をですか？そんなこと、あるわけじゃないですか。」

白帝様を嫌う人なんてこの涼州にはいませんよ。」

文2「そうですよ、白帝様！！」

武1「白將軍は俺達のためにしてくれたことだ！」

武2「どんなことがあっても、俺達は白將軍を嫌うわけありませんよ！！！」

「ありがとうございます。お前たち。」と武・文官達に礼を言う白帝である。

その後は屋敷の具体的な説明をそれぞれの屋敷の代表者に説明し白帝たちは城に帰っていくのだった。

その夜の城での食事は皆が食堂で集まって行われた・・・

十六夜「さあ六花様。アーンしてください。」と十六夜が白帝の口にオカズを運ぶ

天「十六夜ちゃん。六花様は貴方に料理を作ってくれと頼んだだけなのよ。どうして、そこまでするのかしら？」と顔が笑ってない天香

十六夜「コレは妻として役目です。妻が自分で作った料理を旦那様に食べてあげるのは当然です。六花様、アーンですよ。」と口に運ぶ十六夜

その料理を食べる白帝

十六夜「おいしいですか。六花様。」

「(旦那様……)……ああ、うまいぞ、十六夜。」と内心嬉しい白帝

今までは、六花様としか呼ばれていなかったから旦那様という新しい響きに心が躍る

十六夜「えへへ／＼／＼」

月詠も負けじと

月「それでしたら、私も自分で作った料理を六花様に食べさせるとしましょう。」と十六夜の言葉を聞いて月詠はさらに意見を述べる月「これからは作った人しか六花様に食べさせることが出来ない決まりにしましょう。」とそれを聞いた天香と十六夜

天「えっ!？」

十六夜「いいですね。そうすればお互い納得できますしね。」

と十六夜は納得するも

天「(不味いわね……私……料理できないんだけど!!)」と内心叫んでいる天香

月「決まりですね。それでしたら……次は天香様が作りますか。」

天「(ビクッ!)え、ええ……いいわよ。」と内心ドキドキしながらも返事をしてしまった天香

月「じゃあ次は天香様で決まりですね。六花様が食べたい時に天香様に言ってください。あ、当日じゃダメですよ。ちゃんと事前に連絡をくれなきゃダメですからね。」

「ああ、分かったよ。」
と食事は進んでいくのだった。

無論、天香が次の日にメイド長である那波に「料理を教えて!!」
と陰ながら頼んだのは言うまでもない

第48話（後書き）

今回も駄文でしたね。

最近、思うように進めない（それは、文才がないからさ）
知ってるよ！！

次は時間を戻して羌賊との戦を書きたいと思います。

入る前に1、2話書いてから入りたいと思います。

早く恋姫の方を書いてみたい・・・でも、まだ・・・入れない

（グス）

（長すぎなんだよ。）

第49話(前書き)

やっと書き上げられました!!
遅くなって申し訳ありません!!

第49話

帝達が賊の討伐から帰ってきたのは夕方頃である

白帝達は報告を行うため光琳と豹樹を連れて玉座の間に来ていた玉座の間には白帝、太守の董穿、董轟、董苑、十六夜、呂畔、張安、光琳、豹樹、白帝が呼んだ天香と月詠である

烈「さて、今回の白帝隊による訓練、並びに賊討伐の報告だが・
・六花殿訓練の報告を頼む。」

「はい。・・・では、報告いたします。白帝隊については、この度の遠征で実践をともなった訓練は終了いたしました。これよりは正式に白帝隊としてこの涼州のために兵共々、尽力つくします。」と董穿の前に出て改めて臣下の礼を執る

烈「報告ご苦労。ではコレを持って白帝隊を正式に我が軍の部隊として発足させる。六花殿、これからも頼む。」

「はっ！」

烈「・・・堅苦しい形式はここまでとして、早く立ってくれ六花殿。どうも、六花殿に膝を着かせているとこっちの気が重くなるんだよ。」

「それは、なぜでしょうか。」

烈「嫌な。前の流民の件で六花殿が力を使っただろう、そのせいか民たちが六花殿を 神の御使い だとか 神様 とか言っているから、そんな人に礼を執られると落ち着かなくなてな。」

「そう言えば、兵達も言っていたな、神の御使いだとか何とかか。天「それなら、私達の店にも何か噂があったわよね、月詠ちゃん。」

月「そうですね。確か・・・天女様が住まう屋敷だとか・・・
／／／・・・」と顔を赤くする月詠

十六夜「どうしたのですか月詠さん。」

月「／＼／＼つ・・・の・・・がた・・・すん・・・です／＼／
と途切れ途切れでよく聞き取れない

「月詠よく聞こえないだが。」と指摘すると

月「だからですね・・・御使い様の奥方が住んでいる屋敷だと/
／・・・噂されているんです／／／」

「噂も何も事実だろうに。」

月「それでも、恥ずかしいんです／／／」と赤くなる月詠、見れば天香も顔を赤くしているのである

董苑「そういえば、侍女達が十六夜の噂を聞いたって言っていたわね。」

十六夜「えっ！私のですか!?!」

董苑「ええ。・・・聞きたい？」と顔をニヤつかせる董苑

十六夜「うっ。(あの顔を絶対に面白がってる!でも、私の噂か・・・よし!)はい!聞きたいですお母様。」と戸惑ったが好奇心に負けて聞くことにする十六夜

董苑「ええつとね、確か・・・”白の巫女姫”とか”白の花嫁”

後は”御使いの花嫁”だったかしらね。」

十六夜「・・・はあう／／／／」と顔を瞬時に真っ赤にさせフラつく十六夜

「十六夜!」と十六夜を支える白帝

十六夜「大丈夫です六花様。」

天・月「むう。(私もそんな二つ名が欲しいわね。ですね。)」
「と思う二人

董苑「ふふ。いいじゃない、白き神に仕える巫女と言うのも悪くないじゃない。」

「董苑様、もうその辺でお願いします。十六夜が恥ずかしさのあまり気を失いそうです。」と董苑にこれ以上、十六夜で遊ぶのをやめてもらおうように言う白帝

董苑「ええ。解っているわよ、六花君。」と笑顔で答える董苑

烈「次の報告は、豹樹殿と光琳の事、後、羌族内の事に付いてに報告なんだが・・・」と董穿は賊討伐の際に保護した羌族・族長の娘光琳と討伐の際に出会った羌族・族長の弟の豹樹の説明と羌族内の事についての説明をした。

烈「・・・と言う事なんだが、皆の意見を聞きたい。」と説明を終えて意見を求める董穿

豪「・・・ふむ、羌族内で謀反の可能性か・・・」と董豪

苑「しかも、羌族との戦が仕組まれた事だったなんて・・・」と俯く董苑

天「その鹿賀と言う男の力が気になるわね。」と天香

月「はい。普通の人が扱うにしては危険すぎます。」と天香に同意する月詠

紅「どうやら敵は羌族全体ではなく、その鹿賀と言う男か・・・」と拳を握る呂畔

昇「その様ですね。後の者達は豹樹殿と同じように操られている可能性もありますからね。」と張安

十六夜「酷い・・・人を操って無理やり戦わせるなんて・・・」と皆が意見を言うなかで

豹「お願いします！！・・・どうか！どうか！・・・兄者を！・・・

仲間を！・・・助けてくださいっ！！」と豹樹が叫ぶ

光「叔父様っ！？」

豹「敵である羌族の長の弟である私が頼めた義理じゃありませんが・・・どうか・・・お願いします・・・皆を・・・全員とは言いません・・・救える者たちだけでもお願いします！！」と床に両手をつき皆に頭を下げる豹樹

光「私からもお願いします！！私のことは好きにしてもかまいません！！その代りお父様を！！皆を！！お助け下さい！！」と光琳

も頭を下げる

それを見た董穿達は

烈「豹樹殿、光琳・・・何も其処までしなくても・・・」と言いかけるが・・・

「もとより、最初から見捨てるつもりはない。」と白帝

烈「六花殿。」

「この戦は仕組まれたこと、なら無駄に血を流す必要はない。・・・
・そうでしょう、みなさん。」と周りを見る

烈「当然。無駄に兵と民の血を流すことはない。」

豪「うむ。」

苑「ええ。今は敵とか言ってる時ではないわ。」

天「今はどうやって、皆を助けるかの相談よ。」

月「そうですね。そちらは、どちらかという私たちの専門です
しね。」

紅「まあ、攻めるにしても、守るにしても苦勞しそうだがな。」

昇「紅よ、それは言っな。」

豹「みなさん・・・ありがとうございます。」

光「ありがとうございます。」

と二人は頭を下げる

と其処へ・・・

兵「申し上げます!!」と兵が駆け込んできた

豪「何事だ!!」

兵「はっ! 羌族の軍が侵攻していると、隠密部隊より報告がありました!」

全員「「「！！！！！！！！！！」」」

烈「敵による被害は？」

兵「はい。幸いにも周辺の村に狼煙による避難勧告が出来ましたので被害はありません。」

烈「よし。隠密部隊には、そのまま監視を続けてもらおう、今、出陣できる隊は。」

紅「オレの部隊が出られます。」と呂畔

烈「では、出陣してくれ。他の者たちも準備を急いでくれ。」

全員「「「御意！！」」」とそれぞれが準備に向かう

（30分後）

呂畔達の部隊は兵5千を連れて出陣、次に準備ができるのは白帝の部隊である、白帝隊である。

今は、兵たちに装備の確認をさせている。

「剛鬼。」と静かに式神を呼ぶ白帝

剛「（お傍に）」と姿を神気で隠しての召喚

「（お前は、先行して紅殿のサポートで敵の進行を妨害しろ、途中に広い場所があったら陣を敷くための砦として土壁を作っておいてくれ。）」と指示を出す

剛「（分かった、任せろ。）」と言って白帝から離れる

「頼んだぞ。」とそこに、

十六夜「六花様。」と十六夜が現れる

十六夜だけではなく、天香と月詠も一緒だった。

「十六夜、天香、月詠どうした？今は兵糧と物資の確認で忙しいはずだろう。」

十六夜「はい。でもお母様が、六花様にコレを渡しに行きなさいと・・・」と十六夜が渡してきたのは、薄い青地で白銀の文字に“白”と書かれ、白の周りを白銀の六つの花びらが囲んでいる牙門旗

である。

「この牙門旗は？」

十六夜「はい。六花様の隊が正式に認められた証として作らせていた物です。」

「こんな立派なものをオレにか？」

天「むしろ、六花様に相応しいわよ。」

月「ええ。どうか、無事に帰ってきてくださいね。」

「分かっている。必ずお前たちの元に帰ってくる。心配ない。」

十六夜「六花様。．．．えいつ！」と十六夜が白帝の顔に自分の口を当てる

天・月「！！！！？」と驚愕

十六夜「んん．．．ちゅ！」

「はっ！．．．十六夜、いきなり何を．．．」と言いかけるが十六夜が白帝に体を預けてくる

十六夜「お願いです。六花様．．．どうか無事に．．．帰ってきてください。」と少し潤んだ瞳と泣きそうな声で白帝を抱きしめる。

「十六夜．．．前にも言っただろう」そこに、お前が居ればオレはそこに帰ってくる”と十六夜を抱きしめながら言った。

十六夜「はい．．．六花様。」と白帝から離れる十六夜が、

その場に居る天香と月詠の二人が黙っているはずもなく

天「ちよつと、十六夜ちゃん！？それは、抜け駆けよ！」

月「そうですよ！私も六花様とキスしたいんですから！」
当然こうなる、そして．．．

天「という訳だから．．．六花様！」

月「私とキスしてください！！！」

「お前たち、一応これからオレは、戦場に向かうんだが．．．」
天「分かっているわよ。でもね．．．」

月「もしものことを、考えると・・・」
と二人の顔が沈む

「・・・分かった。(出来るなら二人とは、もっと雰囲気のある場所でしたかったのだが)・・・天香」

天「はい・・・っん!？」と天香の顎に指をかけ、少し持ち上げて天香の唇にキスをした。

「今はこれで我慢してくれ。・・・月詠。」

月「えっ・・・っん!？」と此方も少し持ち上げて月詠にキスをした。

天「もうノノ六花君は強引なんだからノノノ」

月「でも、好きな人とキスするのは気持ちがいいですねノノノ」
と二人は顔を赤くする

「戦から帰ってきたら、その続きをするからな、覚悟しておけよ。」
と白帝は3人に言う

十六夜・天・月「(ボ?ンツ)ノノノノ」

「では、行ってくる。双鬼・・・」

双「はい。」

「十六夜たちを頼んだぞ。」

翡「任せなさい!」

黄「そうだよ、奥方様たちのことは、任せて白帝様は自分のことに集中してね。」

「ああ・・・白帝隊!準備は出来たか!」

白帝隊「はい、何時でも行けます!!」

「よし!全員騎乗!これより、出陣する!初陣だが、己の力を信じる!・・・出陣!」と白帝は白雪と共に駆ける

白帝隊「おおおおお」

白帝は、先頭を走り、牙門旗をなびかせ戦場に向かう

それが見えなくなるまで見守る、十六夜たちである

十六夜達「」(どうか、武運を……)「」と切実に願うのだ
った

第49話（後書き）

何か無理やりな感じですけど、次は羌族との戦を書いて行きます。
出来るだけ早めに終結させて、洛陽行を書きたいと思います。

第50話

白帝隊が城を出発して1時間、やっと先行している呂畔の部隊に追いついた白帝

今、二人の隊は陣を敷くための準備をしていた。幸いにも今夜は満月で、来る時も天幕を張るにしても、それ程の苦勞はしなかった。さらに、羌族の進軍の妨害が成功したのか、剛鬼が神氣を使つて土壁の砦を作つてくれた。まあ、その時は一騒動あつたが、今は落ち着いている。

紅「いやあ、しかし、驚いたぞ。行き成り目の前に鬼が現れるんだからな。」

「それは、まあ。何と云うか、すみません。」と頭を下げる白帝
紅「さらに、驚いたことに、その鬼は白帝殿の仲間・・・式神だつていうんだからな。・・・まあ、そのおかげで、こうして陣が完成した訳だからいいんだがな。」

剛「すまない、主。」と主である白帝に頭を下げる剛鬼
「気にするな、剛鬼。それに、別にお前の存在がバレても問題はない。すでにオレの力は皆が知っている。」

紅「その通りだ、式神殿。誰も白帝殿や式神殿を恐れる者はいない。」

剛「感謝する、呂畔殿。」

「それで、剛鬼。敵の数と現在の場所は分かったか。」

剛「是、敵の数は先遣隊なのか、数は2千から3千。場所はこの谷だ。それと、敵の進軍を止めるために、谷の入り口を岩で塞いできた。恐らくは1日2日の時間は稼げるはずだ。」

「分かった、ありがとう。・・・あと一つ、その兵達は人だった

か？」

剛「・・・正直に言つと、分からない。・・・ただ言えることは、奴らの周りを黒い塊・・・恐らくだが邪気が囲んでいた。」

「そうか。(・・・まだ間に合うか。)」

紅「それで、どうする白帝殿。このまま、朝が来るのを待つのか？それとも、こちらから攻めるか？」

「・・・とりあえず、偵察部隊を向わせましょう。今夜は満月です。奇襲にしても相手にバレてしまいます。今は交代で兵達を休ませましょう。」

紅「そうだな。今は体力の回復と敵の情報を集めを優先しよう。」と呂畔も賛成

「では、後はやっておきますので。紅殿は休んでいてください。」
紅「分かった。では、しばらくしたら交代だ。3時間後に起こしてくれ。」

「分かりました。兵達にも交代で休むように言っておきます。」
紅「ああ、頼む。」といって呂畔は自分の天幕に戻る

その後、白帝は兵達に3交代で休むように伝え、呂畔と交代しながら一夜を明かした。

「紅様、おはようございます。何か変化はありましたか？」と早朝、会議用の天幕に顔を出す白帝

紅「ああ、白帝殿。おはよう。偵察部隊の報告では、奴らはそのまま谷に陣を敷いたみたいだな。それと、建業からは昇華殿の部隊と豹樹殿が来るらしい。」

「そうですね。何時ごろですか。」

紅「報告では、10時頃だと聞いている。」

「分かりました。では、昇華殿達が着いたら、小数を率いて敵陣営を見てきましょう。」

紅「そうだな。では、その隊の編成は任せていいか。」

「ええ。白帝隊を中心に編成しておきます。」
紅「頼む。」

そして、報告の通り張安と豹樹が陣に着いた。二人はそのまま、会議用の天幕に案内された。

昇「紅。白帝殿。」

白・紅「昇華殿。豹樹殿。」

昇「早速ですが、敵の動きは？」

「はい、敵は2千から3千。現在は、この谷の入り口に陣を敷いています。また、入り口は岩で塞いだので、ある程度の時間は稼いでいます。」と説明する白帝 無論、剛鬼のことも二人には話した。豹「その谷の入り口の他に道はあるのですか。」と豹樹

紅「いや、無いな。あるとするなら、その谷を上るしか手はない。」

昇「となると、此方から攻め込んでみますか。」

「其の前に、一度、小数を率いて実際に見てみた方がいいでしょう。すでに、隊の編成は終わっています。」

昇「そうですね。実際に見て、攻める、守るの判断をした方がいいですね。」

紅「では、オレはこの陣に残っていよう。そちらの方は、任せる。」

昇「分かりました。では、紅はこの陣の指揮と守備を、白帝殿と豹樹殿は私と一緒に参りましょう。」

「はい。」

豹「ありがとうございます。」

そして、一行は敵が陣を敷いている場所を谷の上から見ている。昇「どうやら一晩経っても、あの岩を退けることは出来なかったみたいですね。」

「しかも、退けたとしても次もありますから、どちらにしても、

進めないでしょうね。」

豹「しかし、それではこちらも同じなのでは？」

「心配はいりません。もし攻めることがあるなら、剛鬼に頼んであの岩ともども退けてもらいます。剛鬼は土の属性を持っています。そんなこと、造作ありません。」

豹「なるほど。それで、張安殿。此方は守りに徹しますか？」

昇「そうですね。見た感じですと敵は苦勞しているようですし、此方の準備が整うまでそのままでもいいでしょう。」

「では、方針が決まったところで陣に戻り・・・。」と白帝が言いかけるが

“ドオオオオオオオンンン！！！”と轟音が響いた
見れば岩が破壊され敵が谷に入ってきた。

昇・豹「なっ!?!?!」と驚く二人、対する白帝は

「(やはり)・・・昇華殿、豹樹殿は急いで本陣に戻ってください。・・・ここは、俺が食い止めます。」と二人に進言

昇「白帝殿!? 正気ですか!?!」

「無論。あいつらの相手は任せてください。」

豹「しかし!?!」

「豹樹殿、心配しなくても敵が後退したら戻ります。二人は戻って兵を率いてください。」

昇「・・・分かりました。では、頼んでいいですか、白帝殿。」

「ええ、任せてください。後、物資も運ぶ準備をお願いしますね、あの陣を第2の拠点としますから。」

昇「分かりました。一応、準備はさせておきます。ご武運を・・・我らは陣に戻る! 全員急げ!」と張安が周りの兵に号令をだし陣に戻る。

それを見送る白帝

谷に侵入した羌族は、馬を駆り谷を進んでいた。

しかし、どの兵にも表情がなく、目が虚ろである。その兵の体を黒い邪気が囲んでいた。

羌族が、谷の中間に差し掛かった時、先頭を進む兵が馬を止めた。見れば、白銀の長髪をなびかせた白帝がいた。その後ろには牙門旗が刺さっていた。

「残念ながら、この先に行かせるわけにはいかないんでな、後退してもらおうか。」と春風を構える白帝

羌族兵「・・・殺せ！奴を殺せ！」と一人の兵が叫ぶと周りの兵も反応して叫ぶ

「どうやら、此方も洗脳されてるみたいだな。・・・白帝、参ります！」と駆け出す白帝

「はあっ！」

と白帝は、また一人、敵を倒す。

もともと、この谷の幅は狭く大群で進むような道ではないので自然と小數で戦う形になってしまう。しかも白帝は、相手を殺すのではなく、気絶させているのである。

これは、相手の洗脳・・・邪気を消すためである。

もちろん、ただ相手を切れば、という訳でもなく豹樹と同じように邪気の塊を切らねばならない。（豹樹の時は天生牙だったが、同じ神性を持つ神刀・春風でも問題はないと天香と月詠に言われた）普通なら、神気と体力を相当使うのだが、白帝には疲れが見えず絶えず春風を振るい相手の邪気を切って気絶させていく。

・・・が、敵とて操られているとは馬鹿ではない、後方に下がっている兵が一斉に槍や矢を白帝めがけて撃ってきた。相手は一人、幾ら強くてもこの狭い道幅では回避にも限界がある。・・・が、白帝は一人ではない。

「剛鬼!!!」と白帝が叫ぶ

すると白帝の目の前には鬼が出現し土壁を作る

無論、武器は白帝には届かず壁に当たって地に落ちる

「（一気に決めるか！）・・・はあああああ！！！」と白帝は春風に神気を込める

「回転剣舞・乱・・・」と神気が籠った斬撃を飛ばす、しかも、狙ったかのように邪気を打ち抜いていく白帝

やがて、神気を討ち果たしたのか春風を下げる白帝、春風は気の打ちすぎたのか刀身が赤くなっている。

「やりすぎたか・・・さて、全員気絶させたか・・・後で戦鬼に頼んで、こいつ等を運んでもらわないとな。」とその場に座り込む白帝

しばらくして、後方より張安隊と白帝隊が到着した。

昇「白帝殿！ご無事ですか！？」と白帝に駆け寄り寄る張安

「昇華殿、ええ。大丈夫です。見ての通りですよ。」

豹「白帝殿・・・」

「豹樹殿、心配なく皆気絶しているだけです。もちろん、邪気は浄化しましたよ。」

と豹樹を安心させるようにいう白帝

豹「そうですね・・・よかったです・・・」と近くで倒れている羌族兵を抱え込む豹樹

「さて、ひとまずは羌族の陣に行きましょう。流石に、このままにしておくのはまずいので。」

昇「そうですね、では我々は、あの陣に行きましょう。白帝殿の言った物資は伝令に頼んで後から来る増援に運んでもらいましょう。」

「お願いします。それじゃあ、運びますか・・・戦鬼。」

戦「呼んだか、主。」と「目の前に赤い鬼が出現した

「この者たちを、あの陣まで運んでくれ。」

戦「分かった。」と言って戦鬼は、体を分身させ羌族の兵を陣まで運んでいった。

その光景は、鬼が餌を自分の住処に持ち帰るようで何かと怖かつ

たそうな。

く羌族本隊 本陣く

本隊の本陣に建てられている会議用の天幕の中では二人の男が話していた

「????」「クソツッ!先遣隊の報告はまだか!?!」と荒れている大男。男は獣の毛と皮で作られた鎧を纏っている

「????」「豹牙様、落ち着いてください。間もなく、連絡が入るはずですよ。」と此方は男を落ち着かせるように言葉を掛ける小柄な男

豹「しかしな鹿賀よ!」と小柄な男に言葉を散らす

兵「報告します!」とそこに、駆け込んでくる兵

鹿「如何しました。」

兵「はっ!“遠目”からの報告で先遣隊は全滅したそうです!」

豹「なんだと!?!」と報告を聞いて驚く豹牙

鹿「それで、敵は今どうしていますか。」

兵「はい。先遣隊が敷いた陣にいます。数は5千く6千だと、報告です。」

鹿「そうですか、引き続き監視を続けるようにと伝令してください。」

兵「はっ。」と言って兵は下がる

鹿「(チツ、役立たずどもが!やはり、あれだけの暗示ではダメか。なら今度は、少し強くしてみるか。クククツ)・・・豹牙。」と心では腹黒いことを考えている

豹「鹿賀よ、今度はワシ自ら出陣するぞ!奴らを!ワシの娘である光琳と弟の豹樹の仇を取るために!涼州の奴らを殺すために!」とその眼は憎悪に塗れており、最早、周りを見ることが出来ないでいた。

鹿「豹牙様・・・(好いですね、その憎悪に包まれた目が、これなら、早く力が溜まるかもしれませぬ。)・・・分かりました。本来ならもう少し様子を見たかったです、豹牙様がそこまで仰

るのでしたら止めはしません。私も全力で豹牙様に力を貸しましょう。
う。」

と小芝居を打つ鹿賀

豹「おお！！では、早々に出陣の準備だ！涼州兵など蹴散らして
くれるわ！！」

鹿「はい！！（コレが、貴方の最後の戦なのですからね・・・）」
と何かを考えている鹿賀、その体には黒く暗いモノが鹿賀を包んで
いた。

第50話（後書き）

回転剣舞・乱・・・刀身に神気・気を込めて打ち出す技。対集団用。

豹牙・・・羌族の長で光琳の親で豹樹の兄

豹牙は光琳と豹樹が涼州兵に殺されたと思いついでいる。

実際は二人は生きているのだが、鹿賀の情報によって騙されている。

鹿賀・・・羌族内では軍師的な位置

最初は、族長の座を狙っていたが今は、豹牙を騙して何かを企んでいる。

遠目・・・羌族の隠密部隊

とこんな感じですよ。

第51話(前書き)

新年あけましておめでとございます!!

久々の投稿です!!

第51話

白帝たちは、羌族の兵達を陣内で保護した後、後続からの援軍と合流した。

援軍は、太守の董穿が率いる部隊である。

白帝たちは、陣の天幕で会議をしている。

〔第2拠点・天幕内〕

烈「それで、敵本陣の場所は掴めたのか？」

昇「はい。斥候からの報告ですと、本陣の場所は此处から20里の距離にあるそうです。」

烈「20里・・・すると、10キロの距離か。」

烈「20里か・・・その地形は？」

豹「そこでしたら、平地で周りには何も無いはずですよ。」

紅「となると、策ではなく、まさに力と力のぶつかり合いか。」

「そうですね。周りが何もないので、まさに双方の数が勝敗を分けます。」

烈「それで、敵の数は？」

昇「はい。報告では、2万だそうです。」

烈「2万か・・・こちらよりも多いな。」

紅「そうだな。此方は、1万5千・・・僅かに向こうが上だが・・・」

烈「数で負けていても、兵と率いる將軍の質では負けません。」

烈「その通りだ。敵が如何に数で来ようとも、此方は負けるつもりは無い。」

昇「ですが、次の戦も死人を出すわけにもいきません。」

烈「そうだな。かと言って、次も六花殿に頼る訳にもいかないだろう。」

「それなら、考えがあります。」

豹「考え？」

「はい。先ほどの羌族たちは確かに操られていましたが、完全に支配はされていませんでした。恐らくは暗示か洗脳の類だと思うので気絶させれば問題はありません。」

豹「それで、暗示が解けるのか。」

「暗示は解けますが、邪気は浄化できません。」

烈「では、どうするんだ。」

「心配なく・・・水鬼。」と式神を呼ぶ

水「はい。白帝様。」と目の前には青い鬼が姿を現した

皆はその光景にも驚いている

「皆に紹介します。式神の水鬼、属性は水で浄化の力があります。」

「

烈「浄化・・・すると」

「はい。水鬼には気絶させた羌族の邪気を浄化してもらいます。」

豹「そんなことが、可能なのか!？」

「ええ。水鬼は、元々オレの神気を元にしていますから、俺と同じように浄化できるはずです。」

水「はい。」

「それに、烈刃殿に渡した、“天狼剣”・・・あれも、神刀と同じで浄化の力があるので問題はありません。」

烈「そう言えば、そんな事を言っていたな。無論、鍛練は怠っていないぞ。」

「それは、何より。では、その鍛練の成果、見せてくださいね。」

烈「ああっ!」

そんな会話をしていると、外のから兵が駆け込んできた

兵「報告します!」と兵が駆け込んできた。

それと同時に水鬼は、姿を消した

紅「何事だ。今は軍議中だぞ!」

兵「っは。ただ今、羌族の本隊と思われる部隊が進軍中とのことです！」

豹「！流石は兄者か。まだ、碌に相手もしないで、行き成り勝負をつけに来たか。」

と豹樹は、兄の考えを読み取る

烈「が、先手を取られたのは痛いな。・・・各部隊はすぐに出陣の準備を、次の戦で決着をつけるぞ、各々そのつもりでな。」

全員「「御意!!」」

烈「よし、では準備にかかれ!!」

董穿の言葉に白帝たちは、それぞれの部隊に戻り準備にかかった。

準備が整った白帝たちは、急ぎ出陣し今は羌族と5里程の距離にいる

「それで、烈刃殿。陣形は如何しますか。」

烈「そうだな。先陣は六花殿に任せる、敵陣営に風穴をあけてくれ。」

「御意。」

烈「昇華様は、後方から六花殿の援護。」

昇「分かりました。六花殿、お願いしますよ。」

「此方こそ、頼りにしています。」

烈「紅さんは、左翼から攻めてください。俺は右翼から攻めます。二人で敵陣を囲むようにします。」

紅「承知した。存分に暴れてやるよ。」

烈「豹樹殿には、私と一緒に兄君の説得をお願いしたいのですが。」

豹「・・・分かりました。今の兄者に言葉が通じるか分かりませんが、やってみます。」

烈「感謝します。」

「では、護衛として戦鬼をつけましょう。・・・戦鬼、頼む。」
戦「分かった、任せろ。」
烈「すまない、六花殿。」

やがて、両軍は大将同士による口上から始まった。

豹「我は羌族が族長、豹牙！貴様ら涼州の者に殺された娘の光琳と弟の豹樹のために貴様らを討つ！覚悟しろ！」

烈「オレは涼州が太守、董穿！豹牙よ！それは、誤解だ！貴方の娘の光琳も弟の豹樹殿も我らが涼州の者が保護している！その証拠として、豹樹殿をお連れした！」

豹「何！？」

豹樹「兄者！オレも光琳も無事だ！これは、鹿賀によって仕組まれた戦だ！戦う必要はない！」

豹牙「！？仕組まれた？・・・鹿賀よ、どういうことだ！？」

鹿「(チツ)・・・豹牙様、奴等の言に耳を傾けてはいけません。」

豹「しかし、鹿賀よ。弟は嘘をつくような男ではない。」

鹿「豹樹様は、奴らに脅されているのです。だからあのような言で我らの結束を崩そうとしているのです。(やはり、邪気が消えた時に奴が死んだと思っただのが間違いだっただのか！)」

豹樹「それに、兄者！鹿賀は盗賊どもを使い光琳の誘拐、また兄者暗殺を計画していた！」

豹「！！？？鹿賀・・・それは本当か・・・」

鹿「(チツ)・・・」

豹「どうなんだ！！鹿賀！！」

鹿「・・・ええ。その通り、私が賊に命じて光琳と豹樹、そして豹牙、貴様の暗殺を企てました。」

豹「な、何故なんだ！何故そんなことを！？」

鹿「最初は族長になることが目的でしたけど、今は違います。今は、あるお方の為に力を集めているのです。」

「(・・・あるお方？・・・もしか、ブラドか？)」

鹿「私が集めるのは、人が持つ負の感情。怒り、憎しみ、悲しみ、嫉妬 それらを集めるのが私の役目なのです。」

烈「そのために、村や町を襲ったのか!？」

鹿「まあ、それもありますね。私としましては、そのまま殺されてくれた方が負の感情を集めやすくなるので助かるので、何せ頼んだのが盗賊とかの流れ者ですからね、これ以上の適任はいないですよ?？」

「外道が・・・」

烈「許さねえ!」

豹「鹿賀・・・貴様と云う奴は!」

鹿「では、みなさん。私の為に存分に殺しあってくださいね。」
手を高々と挙げて

豹「鹿賀?貴様、何を!？」

鹿「さあ!みなさん、存分に暴れなさい!!」手を下す。まるで
進軍せよ と命令するかのようになり、すると後ろに控えていた羌族兵が
羌兵達「オオオオオオ~~~~」と一気に駆け出す

豹「まつ、待て!お前たち!?!勝手な行動はするな!?!」と豹牙
は叫ぶが兵たちは止まる気配はない

鹿「豹牙、貴方も存分に殺しあってくださいね。(パチンツ)」
と鹿賀は指を鳴らすと

豹「クツ!?!なんだ!体の自由が・・・」と豹牙の体の自由を奪
い羌族兵の後に続くように駆け出した

豹樹「兄者!?!」と豹樹は叫ぶ

烈「チツ!やはり、こうなるのか!豹樹殿、下がるぞ!」と豹樹
を連れて後退する董穿

それに合わせるかのように、白帝と張安の部隊が前に出る

「剛鬼!」

剛「はっ!土流壁!」

剛鬼が地面に拳を叩き付け神気で造られた土壁が羌族兵の妨害をする

「白帝隊は、このまま敵陣を駆け抜ける！説明したとおり相手は殺すな！気絶させろ！」

白帝隊「了解！！」

「昇華殿は、後方にて矢の一斉斉射をお願いします。その後は、白帝隊の指揮をお願いします。」

昇「六花殿？」

「オレは、そのまま鹿賀の元まで行きます。奴には聞きたいことがありますし、何より奴の相手が出るのは俺くらいでしょう。」

昇「分かりました。では、指揮は任せてください。ご武運を。」

「貴方も、昇華殿。・・・行くぞ、お前たち！！全員、抜刀！我に続け！！」

白帝隊「オオオオオオお~~~~！！」

昇「張安隊も行きます！白帝隊の援護を！！全員、矢！構え！！」

張安隊「(ザツ)」

昇「放て！！」

と、次々と矢が放たれて羌族兵を襲う(尚、今回使用されている矢じりを潰してあります。無理やりな設定でごめんなさい。)

続いて白帝隊

「敵陣を両断したら反転！そのまま敵を蹂躪せよ！！両脇から来る味方の存在も忘れるな！！」と敵陣を駆け抜けながら指示を出す白帝、無論、敵を気絶させながらの駆け抜けである。

白帝隊「了解！！」と此方も白帝に負けじと、敵を気絶させながら白帝について行く白帝隊

やがて、敵陣を抜け出して

「全員、反転！！先ほどの命を実行せよ！！」

白帝隊「オオオオオオ~~~~」白帝隊は反転し羌族兵に襲い掛かる

「では、後のことは昇華殿の指揮に従ってくれ、頼んだぞ。」と近くにいた白帝隊の隊員に声を掛ける

兵「はい。隊長もご武運を！」

「ああ、ありがとう。・・・水鬼！」

水「はい。」

「浄化は任せたぞ。」

水「はい。お任せください。」

「よし。白雪、このまま行くぞ はあっ！」と白帝はそのまま鹿賀の元まで向かう

鹿賀はこちらに向かってくる白い馬に乗った何者かの存在を確認した

鹿「おや？誰か単騎で向かって来てますね、邪魔ですから、退場してもらいましょう。（スウ）」すると鹿賀は懐から黒い水晶玉のようなものを取り出した

鹿「さあ、あの者を殺して来なさい！！」

鹿賀が白帝に向けて呟くと、水晶玉が光る。すると地面から黒い姿の虎らしきモノが何体も出現した。

黒トラ「ガアアアアア~~~~」と叫ぶと白帝に向かって走り出す

「んっ。・・・あれは、黒い獣？」白帝は自分に向かって来る黒い虎を確認

「なるほど、あの黒い水晶が力の源か。となるとアレを破壊しない限り邪気は消えないか。まずはあの黒い獣を如何にかするか。・・・鉄碎牙！！」

白帝は、鉄碎牙を抜き

「・・・風の傷！！（ブンッ！）」

風の傷を放ち、迫ってきた虎を吹き飛ばす

鹿「なっ！？」とコレには鹿賀は驚いた、何せ普通の人間で妖獣

を倒すとは思わなかったのである。

鹿「（あの者は、何者ですか。剣を一振りしただけで妖獣がやられるなんて!?!?・・・しかし!）・・・まだまだ、行きますよ!!!」

すると鹿賀は、またしても水晶を掲げて妖獣を出す

「邪魔だ!!!」と妖獣を鉄砕牙で切り捨てる

やがて、白帝は鹿賀の前まで行き鉄砕牙を突きつける。

「さて、鹿賀よ。貴様には聞きたいことがあるんだが。」

鹿「なんででしょうか?」と剣を突きつけられても表情を変えずに余裕の表情の鹿賀

「貴様が持つている水晶。そして、お前の後ろで糸をひいてる者は誰か喋ってもらおうぞ!」

鹿「ああ。この水晶ですか?コレは主様から頂いた物です。能力は既にご存知のはずですよね。・・・しかし、この水晶のことは喋れても偉大なる主様のことは喋る訳に参りませんので。」

「なるほどな。まあ、貴様が答えなくても、その主様の予想はついてはいるが、主の名は・・・ブラドか。」

鹿「!?!?」

白帝の言葉に反応したのか肩を震わす鹿賀

鹿「そうですね。・・・主の名を知っている者ならば益々生かしておく訳にはいきませんね。・・・今、此処で!死んでもらいます!!!」

すると鹿賀は、水晶を掲げると水晶は黒い光を放ち白帝と鹿賀を包み込む

「（此処は・・・）」と白帝は周りを見渡す暗く赤い空に、鉄色の雲が漂っていた。

鹿「此処は、この水晶が造りだした異界。」

「なるほど、此処なら何人の邪魔も入らずにオレを始末できるという訳か。・・・随分と用心深いな。」

鹿「ふふ。それだけではありません。此処では、邪気が満ち溢れ

ており普通の人間なら長くは生きられません。よって、貴方が如何あがこうとも死に行く事には変わりありません。」と不敵に笑う鹿賀

「確かに、普通の人間ならな。」

鹿「どういう事ですか？」

「ふむ。ブラドからは聞かされていないのか？まあ、所詮、貴様は力を集めるだけの駒という訳か。」

鹿「だから、どういうことですか！？」と鹿賀が叫ぶ

「生憎と俺は人じゃないんでな、この程度の邪気ではオレを死なせることは出来んぞ。」

鹿「なっ！？」

「その様子では聞かされていないか。では、これ以上、聞いても何も無いか。・・・なら貴様は此処で死ぬだけだ！」と鉄砕牙を背負い鹿賀の元まで跳躍し切り付ける

「ハアアア！（ドゴーン！）」と白帝は切り付けるが鹿賀は後ろに跳躍し躲す

鹿「残念でしたね。此処では外と違って私の手の中です。此処では私の思うが、ままなのです。」

「が、それならば水晶を壊せばいい話。覚悟はいいか。」

鹿「やれるものなら、どうぞ。ですが、この姿を見て貴方に勝ち目があると思いますか？」

「何。」

鹿「行きます。コレが主様より頂いた神の力！！」

すると、鹿賀の体が変わっていく

元々人の姿であつて鹿賀の体が大きく膨れ上がり、全身に毛が生え模様が浮かぶ。

毛並みは金と黒の縞模様。眼は血のように赤く、口元には白い牙を覗かせ、四肢の先には長く鋭利な爪を引っさげ、大鷲の翼をばさりと大きく広げた。

「変化！？もはや人ではなくなつたか。しかし、この姿は・・・」

そう、鹿賀が変化したのは虎であり、しかも翼が生えているの

である。しかも、大きさが10メートル程の巨体である

鹿「ガアアアアア〜」と虎が吠えると体から魔力が発せられる

「此奴、魔力も持っているのか!？」

鹿「どうですか、コレが我が主・・・ブラド様から頂いた力です。素晴らしいでしょう。今から、貴方を、噛み殺してあげましょう!」

言うな否や変化した鹿賀は、その巨体とは思えないほどのスピードで白帝に迫りその足で白帝を踏みつぶす。が、白帝は意図も容易く躲し、尚且つ跳躍したまま空中で鉄砕牙を構えて

「風の傷!」を放つ。しかし、鹿賀は翼を羽ばたかせて突風で風の傷を打ち消した

さらに、鹿賀の攻撃は止まらず鹿賀の口から黒い塊が放たれる

鹿「食らいなさい!」(ドンッ!ドンッ!ドンッ!)

白帝はそれを躲していく

「(くそ!なんて奴だ、あの巨体で、あのスピード、風の傷と互角の風、おまけに魔力の塊である魔弾。水晶は奴と同化してるときた。)...少々厄介だな。」と苦虫を潰したようにつぶやく白帝は鉄砕牙を構えなおした。

第51話（後書き）

投稿が遅くなり申し訳ありません

これからは、定期的に投稿していきたいと思えます（出来るのか？）

感想などの指摘があればお願いします。参考にしますので

本年もよろしくお願いします（ペン）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0920v/>

白帝記～それは、神と契約した男の物語～

2012年1月2日10時46分発行